

横川ダム水源地ビジョンに対する提言 策定業務報告書

平成20年3月

山形県 小国町

目次

序章 業務の背景と目的	1
0-1 業務の背景	1
0-2 業務の目的	1
第1章 小国町のまちづくりの流れと横川ダム	2
1-1 白い森構想における横川ダム周辺の位置付け	2
1-2 ダム湖周辺地域のこれまでのまちづくりへの取り組み	3
1-2-1 東部地区のむらづくりの歴史	3
1-2-2 横川ダムに関連するこれまでのまちづくり構想	5
第2章 水源地域周辺の現状と課題の整理	10
2-1 水源地域周辺の現状を示すキーワードと情報の整理	10
2-1-1 水源地域周辺の特徴	10
2-1-2 ダム上流地域の集落機能の現状	17
2-1-3 個別ヒアリング調査結果	20
2-2 地域づくりの現状と課題	22
2-2-1 東部地区住民の地域づくりに対する活動の変化	22
2-2-2 ダムと周辺環境を活かした今後の東部地区の地域づくり の課題と可能性	22
2-3 水源地の利活用に関する事例	24
2-3-1 大石ダム	24
2-3-2 白川ダム	27
2-3-3 奥三面ダム	31
2-3-4 漁川ダム	35
第3章 資源特性を活かした水源地域活性化の可能性検討	38
3-1 小国町全体のまちづくりからの視座	38
3-1-1 まちづくりの5つの柱	38
3-1-2 横川ダムを活用した事業展開がまちづくりに 与える影響	40

3-2 東部地区の「集落機能」の維持・保全からの視座	45
3-2-1 東部地区の集落機能の維持保全に対する課題	45
3-2-3 ダムに関連する事業展開が集落機能の維持・保全 に与える影響	46
3-3 東部地区の未来の夢実現のために	47
3-3-1 取り組むべき課題	47
3-3-2 実現のための活動方策	52
3-4 地域資源の保全と有効活用のあり方	54
3-4-1 自然資源の保全と活用	54
3-4-2 人文資源の活用	55
3-4-3 特産品や伝統技術の活用	56
第4章 横川ダムを活用した地域活性化の具体的方向	58
4-1 ダム湖及び周辺資源を活用した多面的交流事業推進のあり方	59
4-1-1 ダム湖及び周辺整備箇所を活用した交流事業 推進の視点	59
4-1-2 四季が織りなす地域の自然と人の暮らしを活かした 交流事業推進の視点	63
4-1-3 ダム上流地域における集落間連携・協力体制の 再構築の視点	64
4-1-4 ダム湖周辺資源を活用した地域活性化と まちづくりへの視点	65
4-1-5 町全体あるいは町域を超えた地域交流の視点	68
4-2 多面的交流事業の推進等地域活性化のための 人材育成と確保	69
4-2-1 ダム湖上流地域の地元住民の意見	69
4-2-2 地域活性化のための人材育成のあり方	71
4-2-3 具体的なダム湖周辺地域活性化への人材育成と確保	72

第5章 横川ダム水源地域ビジョンとまちづくりで目指す	
方向性への提言	74
5-1 「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能のレベルアップ	74
5-1-1 「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能	74
5-1-2 レベルアップにつながる活動メニューの検討	74
5-2 東部地区の集落機能の維持・保全につながる	
活動メニューの展開	77
5-2-1 集落機能の維持・保全につながる活動メニューの検討	77
5-3 他の拠点エリアとの連携	80
5-3-1 ふな文化の継承	80
5-3-2 森林セラピー基地の機能補填	80
5-3-3 食文化の継承と商品化	81
5-3-4 人材の連携	81
5-4 まちづくりを横軸で支えていく活動メニューの構築	82
5-4-1 「森の学校」の機能づくり	82
5-4-2 「森の仕事場」の創出と活性化機能づくり	83
5-4-3 「森の住宅」環境づくり	83

序章 業務の背景と目的

0-1 業務の背景

従来、ダムは治水や利水を目的として、下流流域を災害から守るとともに、産業経済の発展のために整備され維持管理が行われてきた。しかし最近では、これらの機能に加えて、ダム及び水源地域の豊かな自然や文化を活かした地域の振興及びバランスの取れた流域の発展を図ることにより、21世紀のランドデザインの一部として機能することが期待されるようになってきている。

このため、国土交通省では、直轄ダム、水資源機構ダムについて、地域ごとにダム水源地域の自治体等と共同し、地域住民も参加して、ダムを活かした水源地域の自立的、持続的な活性化を図るための「地域水源地ビジョン」の策定を進めている。

0-2 業務の目的

上記のような背景を受けて、横川ダム工事事務所ではダム水源地域の自治体・住民等と共同で、ダムを活かした水源地域の活性化を図るための「横川ダム水源地ビジョン」の策定に着手している。

そこで、地元自治体である小国町は、横川ダム工事事務所の策定する同ビジョンと町の総合計画や施策等と整合を図る必要があるため、本業務は、同ビジョン策定に対して、横川ダムの利活用に関する小国町としての提言をとりまとめることを目的とする。



横川ダムダム完成予想CG写真（横川ダム工事事務所）

第1章 小国町のまちづくりの流れと横川ダム

1-1 白い森構想における横川ダム周辺の位置付け

本町は、1985年を基準年とし、2000年を目標年次とした新小国町総合計画において、自然教育園構想を打ち出し、本町の豊かな自然の保全と活用を目指して「中央総合レクリエーション基地」、「飯豊山麓リゾート基地」、「朝日山麓リゾート基地」の3つのゾーンを設定して整備を進めてきた。

この構想は、さらに「白い森構想」へと発展しながら、横川ダム湖周辺は「湖畔の森ふれあいゾーン」に位置付け、町づくり施策体系においても、横川ダム周辺整備事業の推進を挙げている。

今後は、町づくりの全体計画の中で位置付けた当該地域の振興方針と連携したダム湖周辺整備の実現と、流域住民全体を含めた有効活用のソフト事業の展開が求められる。



図 1-1 小国町全町における関連施設の分布と横川ダム湖の位置付け

1-2 ダム湖周辺地域のこれまでのまちづくりへの取り組み

1-2-1 東部地区のむらづくりの歴史

横川ダム上流地区は、ダム建設に伴って移転した市野々と下叶水、さらに集落再編によって移転した西滝、東滝などを含み、現在残る上叶水、下叶水、新股、河原角、下大石沢、上大石沢を合わせた全体を東部地区と称している。

この地区は、昭和 58 年に第 22 回農林水産祭において「むらづくり部門」で天皇杯を受賞した地域であり、むらづくりにかける情熱が熱く、水害や豪雪、過疎化の加速度的進行など、多くの困難を乗り越えて頑張ってきた。

以下の表は、東部地区に関係する災害等も含めて、まちづくりに関する活動や主なできごとをまとめたものである。

表 1-1 東部地区のドキュメント

年月	東部地区に関連する主なできごと
S35.8	小国町と津川村が合併：合併当時の東部地区人口 1,492 人、世帯数 270 戸
S38.1	38 豪雪：米坂線も 10 日間に渡って不通となり、陸の孤島となる
S42.8	羽越水害（降水量 600 mm）：耕地被害戸数 156 戸、耕地被害面積 4,673 アール、米坂線の復旧に 3 ヶ月を要した
S45.11	滝集落全戸（36 戸）が集落再編による集団移転
S46.	高野、豆納、赤沢集落が集落再編による集団移転
S50.8	叶水基幹集落センター落成：山村振興特別対策事業
S51.4	叶水基幹集落センター運営協議会発足
S51.8	第 1 回東部地区盆踊り大会実施：S54 年まで 4 回開催、以後集落単位で実施
S53.4	東部地区山菜生産出荷組合設立：組合員 80 名
S53.11	東部地区振興研究会発足：農業、林業、水産、交通、エネルギー、住宅、生活環境、克雪、観光（雪、山菜）、民宿など全般的な研究をする会
S56.4	横川ダムの予備調査に着手
S57.11	第 1 回東部地区ふるさとまつり実施：菊と盆栽展示会、民謡を聞く会、ヘリコプターによる遊覧飛行、子供もちつき大会、ゲートボール大会、ソフトボール大会、和牛肉試食会など
S57.11	東部地区地域づくり講演会：森 巖夫先生
S58.2	東部地区地域づくり研究集会：助言者森 巖夫先生、長井普及所
S58.6	第 1 回東部地区山菜まつり実施：地区外の人との交流を目的に実施
S58.10	第 2 回東部地区ふるさとまつり実施：菊と盆栽展示会、子どももちつき大会、カラオケ大会、ソフトボール大会、和牛肉試食会など
S58.11	農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞：東京明治神宮会館
S59.3	東部地区地域づくり研究集会：年代別意見発表会、絵・作文表彰式
S59.6	第 2 回東部地区山菜まつり実施
S59.7	歴史の道黒沢峠手入れ作業実施：草刈り、土砂除去作業、全地区が協力
S59.10	第 3 回東部地区ふるさとまつり実施、天皇杯受賞記念碑除幕式：絵・作文の募集、天皇杯受賞記念碑除幕式、バレーボール大会、子どももちつき大会、菊と盆栽展示会、和牛肉試食会、菊と盆栽展示会など
S60.12 ～61.1	羽越工事事務所が予備調査結果について地元説明会を実施
S61.3	町議会に横川ダム建設対策特別委員会を設置：委員 18 名

S62.5	横川ダムの実施計画調査に着手
S62.10	町が横川ダム対策室を設置
S63.1	横川ダム対策協議会が発足：水没予定地の居住者による組織
S63.3	新小国町総合計画が策定され、自然教育圏の形成を目指して、当地区は「ふるさとこども村」として位置付けられる：叶水集落センターを核とした、山村の生活文化の伝承や、横川ダムの湖畔・湖面を多目的利用の促進など
H2.3	横川ダム水源地再建計画が策定される：ダム上流地域を子供たちの体験学習空間を含めた「ぶな文化ふれあいの里」として「ふるさと文化むら」の整備を目指す
H2.6	横川ダム工事事務所発足、横川ダムの建設に着手
H.3.3	「横川ダムの建設に関する基本計画」決定、官報告示
H3.12	横川ダム建設事業に伴う損失補償に関する協定調印：建設省北陸地方建設局長、横川ダム水没者団体連合会長、副知事、町長など出席
H4.6	付替道路の工事に着手：主要地方道川西小国線
H4.11	水没予定地域の離村式：横川ダム対策協議会主催、市野々、下叶水、上叶水の一部の約80人が出席
H7.3	横川ダム水源地域整備計画策定：水源地域対策特別措置法の適用を受けて、県が中心となって策定
H8.9	横川ダムランドデザイン検討委員会設置：委員長篠原修東大教授他8名
H12.2	町道横川ダム湖岸線付替工事着手
H12.8	主要地方道玉川沼沢線付替工事着手
H13.11	主要地方道川西小国線開通
H15.3	本体工事着手
H16.11	主要地方道玉川沼沢線、町道横川ダム湖岸線付替道路開通
H17.5	横川ダム定礎式
H18.8	完成後ダム湖に沈む旧道を歩く「湖底ウォーク」開催
H18.11 ～12	水没予定地にある町文化財飛泉寺の大銀杏移植

このように昭和30年代から40年代後半にかけての大きな自然災害や奥地集落の集団離村などによって、集落の存続の危機とも言える状況が、かえって地域の連帯意識を高め、むらづくりに対する活発な取り組みへとつながっていった。

昭和50年の叶水基幹集落センターの完成を機に、叶水基幹集落センター運営協議会（後に東部地区振興協議会と改称）が発足し、集落の代表者や各組織、グループの代表者などからなる「むらづくり」の推進体制が整った。そして、協議会は東部地域の過疎から脱却と、若者が定住できる環境の整備を目指して、産業の振興や地域のコミュニケーションづくりに積極的な活動を展開してきた。それらの一連の活動が昭和58年の天皇杯受賞として実を結んだわけである。

その後は、横川ダムの建設が決まり、市野々や下叶水の集落移転など、東部地区の状況は大きく変化し、それまで東部地区が一体となって進めてきたむらづくりの活動は、横川ダム建設にかかわる内容等が中心となって現在に至っている。

1-2-2 横川ダムに関連するこれまでのまちづくり構想

本町では、横川ダムの建設に伴って生れる新しい環境を活かした周辺地区の整備構想や、地域の活性化を推進するための構想を、全体のまちづくりの一環として位置付けて提案してきた。

これらの構想や計画におけるハード面の整備においては、実現には至らなかったものが多いが、その理念を尊重しながら改めてレビューし直し、さらに現在の集落構造等の課題を踏まえて、今後の横川ダム周辺の地域づくりの提案に生かしていくものである。

1) 「水源地域整備への提言」(平成元年3月)

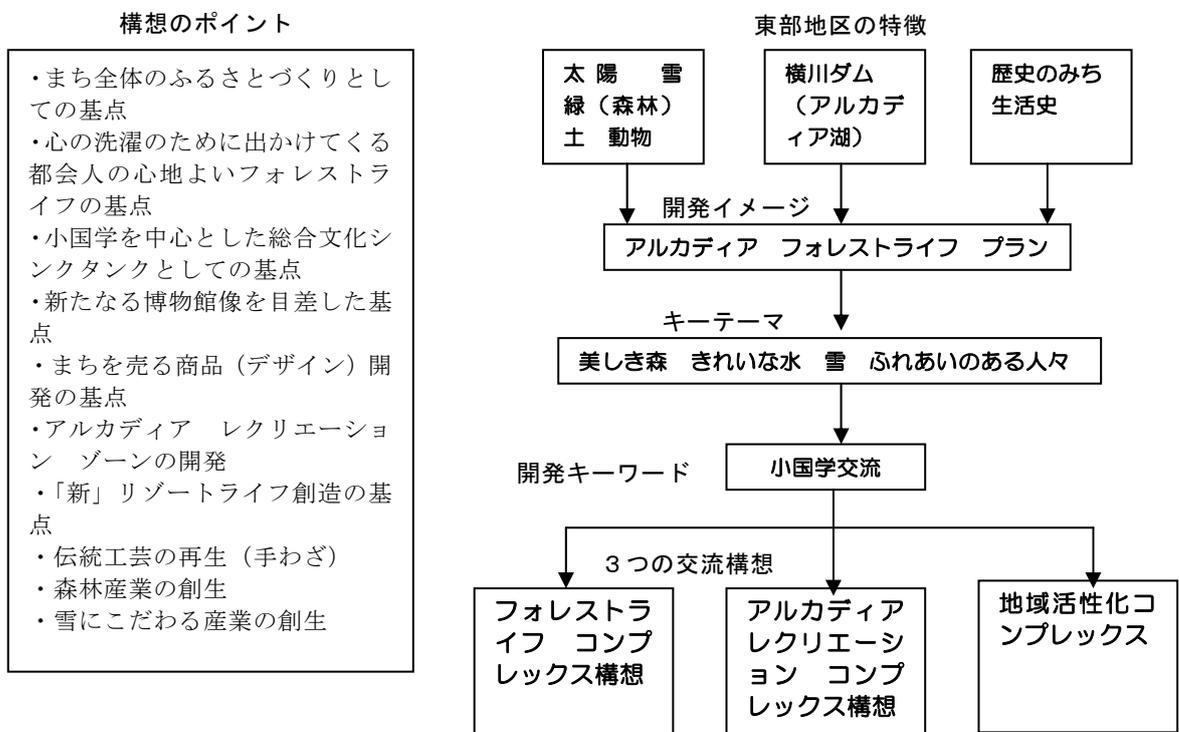
□ アルカディア フォレストライフ プラン構想

横川ダム(アルカディアダム)をめぐり、地域にすむ人々の活動や交流を動的に捉え、この人々を支えている全山・森林を背景として展開される様々な営みを示す意味を端的に表現する言葉として設定する。

この構想は、森、水、土、人、動物、空気が泉のごとく湧いてくるイメージ構想とし、新しいインフラ整備が本町発展の確かな礎となるように展開するものである。

➤アルカディア フォレストライフとは

山々の森林の軸(源)が、空間、土、水、動物、そこに住む人々への泉として全体を包括することである。さらに、東部地区が新たなるアルカディアづくりをめざすことをイメージしている。



□ フォレストライフ コンプレックス構想

➤位置づけ

自然（雪、森）、人、地域、交流、発信プラス展示、研究これらを総合したフォレストライフを確立するために、それぞれの機能をもった施設を、ハードの連携はもとよりソフトを内蔵し連携させる。施設群は、総合的なしかも全体の流れの中でかたまりとなって動くもの。人と人、人と物、人と〇〇といった関係を地域から地域へ、そして外へ向かって拓くことが責務であり、その関係が強くなるにしたい、施設のアイデンティティは確立される。

➤目差すもの

人々の心の支えとしての機能を果たし、豊かな国際性と先進性を備えると共に、小国町の地域活性化に貢献し、地域居住者や広域からの人々の文化的・学習的・交流的・体験的な総体としてのつながりに寄与し、郷土愛を深める施設としての役割を全うしなければならない。

➤機能

①博物館機能（天然学習センター）

- ・ 教化・展示系、管理・運営、研究・調査系

②まちづくりを軸にした地域内交流機能

- ・ 町内のすべての資料が保管され、町内の文化財ネットワーク、各種開発企画計画等の研究機能をもつ
- ・ 他町村からの資料収集や地域総ぐるみでできるソフト開発がなされる

③地域間交流機能

- ・ 製作、研修、活動活性化のための場。地域にすむ人、都市交流者の家と創作場の有機的な連携を図る。また、地元の工芸や民俗芸能などについて都市の人と地元の人とのコミュニケーション活動等が開催できる機能をもつ。

④地域発信機能

- ・ 時代性、生産性、市場性を総括したセンター機能

⑤小国学を中心とした総合文化シンクタンク機能

- ・ 小国町の風土学である小国学を軸に、これからの小国町のあるべき姿の研究や、場来の小国をつくる小さな子供たちなどへの研究機能などをもつ。

□ アルカディア レクリエーション コンプレックス構想

➤位置づけ

アルカディアダム(横川ダム)や周辺一帯、さらにダム上流の全集落は、地域の人々のために、子供たちのために、そして交流者のために、自然環境、歴史文化的にもレクリエーション環境に十分である。

地域の自然環境、人間資源、生活そのものが味付けとなり、それにプラスしたレクリエーション活動形態により、ダム建設を契機とした新たなる小国町独自のレクリエーションコンプレックスが成立する。

➤ 目指すもの～3つの交流形態～

① 長期山村留学としての交流

都市環境とは違った、大自然の中で様々な活動をすることで子供たちの心の安定とやる気を養う。

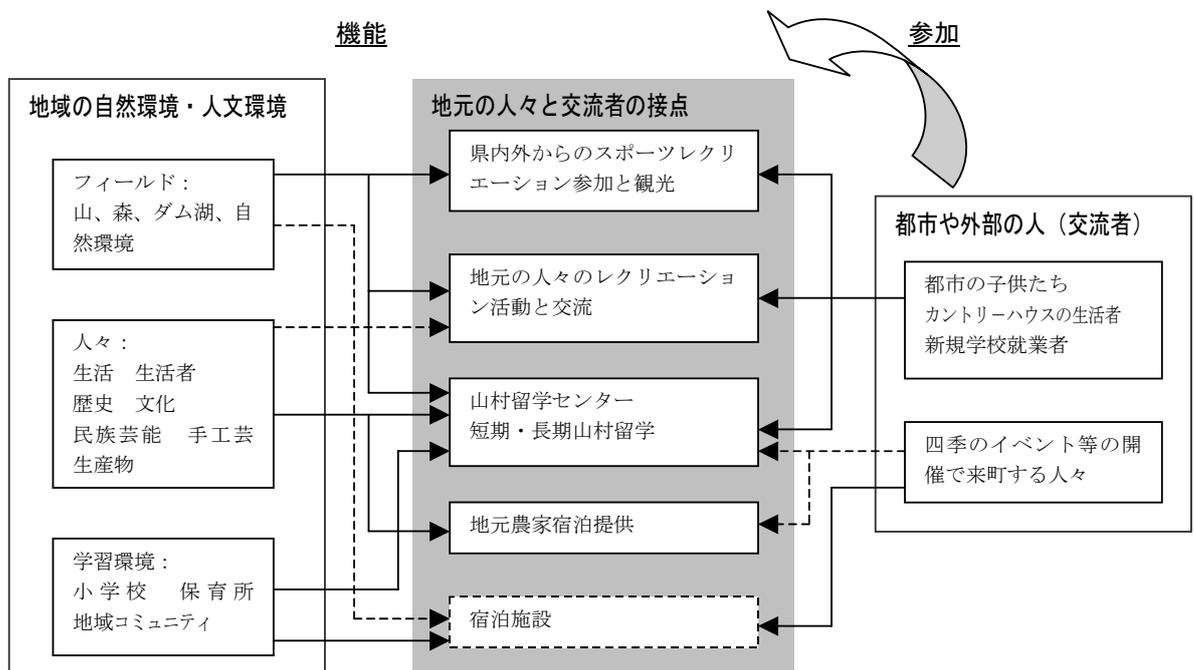
② 短期留学及び集団宿泊学習として一定の期間訪れる人との交流

郷土を中心とした社会、自然環境教育の教材とカリキュラムの開発・実践

③ 町内の資源を活かしたレクリエーションを通じて不定期に訪れる人との交流

町内の資源をベースにしたレクリエーション活動の展開

➤ 機能



□ 地域産業活性化コンプレックス構想

➤ 位置づけ

上記の交流構想を基に、ダム建設等の新しい社会的なインパクトを勘案しながら、町内に多くのビジネスチャンスをつくり出すことと、地域おこしセンターともなりうる新しい交流の形成を通して地域の活性化を図っていくものである。

➤ 計画目標

地域の活性化は、小国町の生活環境・教育・文化・観光・商業等の生活・生産に関わるすべてが背景となったモノの開発・商品化である。

➤ 目指すもの

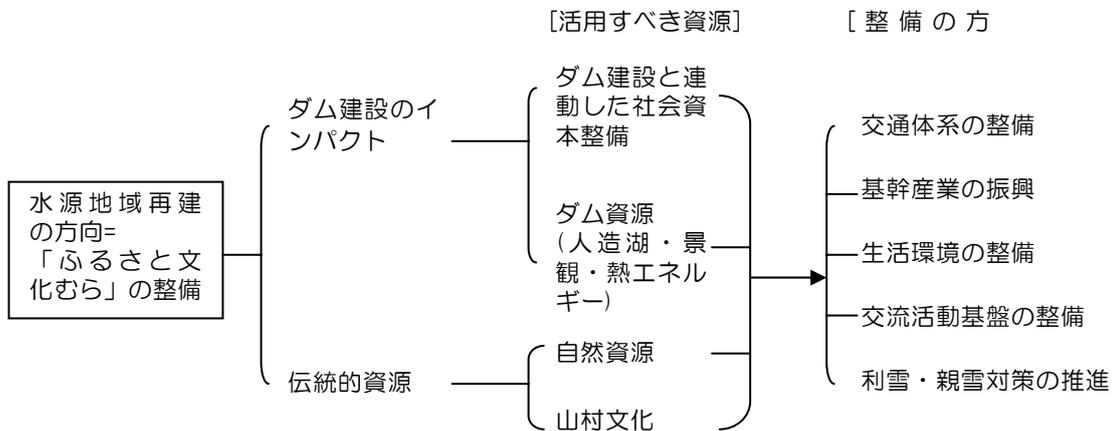
地域を通しての開発・整備の戦略が立てられていないこと、組織・体制づくりが十分に整備・活用されていないことに着目し、計画理念を「開発・整備のシステムづくり」とし、ソフトとハードの一体的地域づくりを目差す。

2) 「横川ダム水源地域再建計画」(平成2年3月)

小国町の町づくりの最も大きな柱である「自然教育圏構想」をより具体化していくために「ぶな文化ふれあいの里」として小国町全域の整備を推進していくことを提案。

そのなかで横川上流域一帯は子供たちの体験学習空間を含めた「ぶな文化ふれあいの里」整備の一貫として「ふるさと文化むら」として地域の機能を位置づけ、自然教育圏構想と整合性のある地域整備の推進実現を目指すものとする。

➤ 水源地再建を目指した地域整備の方向



交流活動基盤の整備の多様な国内交流等の推進の一貫とし、横川ダム周辺に整備される施設のなかで叶水地区に「民話の館」が計画され、大滝地区には300haの町有地を利用して自然体験交流施設として「山村文化の森」の計画が上げられている。

施設の概要：

施設名	事業主体	事業の概要	計画目標年次 (平成年度)
		事業規模・内容	
叶水地区 民話の館	第3セクター	語り部の間、民話・民具、年中行事資料展示室、郷土料理体験室、談話室、民話ホール、レストラン等	10
大滝地区 山村文化の森	第3セクター	山村交流館(宿泊研修施設)の整備 大規模別荘住宅の整備 こどもアスレチックフィールド等の整備 散策路、休憩所等の整備	14

3) 「小国町横川ダム周辺整備構想」(平成6年1月)

横川ダム周辺地区の活性化整備計画として、5つの主要ゾーンにわけその整備方針と基本的な整備メニューを検討している。

ゾーン名	方針	主な計画目標
叶水地区： 民話の里ゾーン 「人の力、人の和」	地域の人々の日常生活空間を大切に環境整備を図るゾーンであるが、周辺のそれぞれのゾーンのネットワークの要であり、ベースキャンプとなる施設整備	<ul style="list-style-type: none"> ・生活環境の向上（集落排水の浄化施設） ・地域の経済基盤の強化（農林産物の加工出荷設備と体制整備） ・ふるさと伝承館（地域の生活文化や技術の伝承、生産活動の施設整備） ・地域住民の参加体制づくり ・コミュニティハウス（地域体験交流施設） ・地域景観の形成、保全 ＊ネットワークとしての車道整備
横川ダム護岸整備： 親水ゾーン 「天の恵みの水、地の利」	水面を活用した「湖畔の子ども休暇村（ファミリーキャンプ）」	<ul style="list-style-type: none"> ・管理センター ・ロッジ、コテージ村 ・シャワー、トイレ及び食事棟 ・オートキャンプ場 ・カヌー及びレジャーボート等
大平地区： 恵みの森ゾーン 「地の恵み、人の力」	大平の牧場跡。実のとれる木、木材や林産物を生産し収穫する場 拠点地区の一つ	<ul style="list-style-type: none"> ・木材生産、特用林産物などの生産活動展開の場の整備 ・素材生産 ・森林の育成と保全を行う ・わらび園 ・ビジターセンター ・林道、駐車場、作業所、休憩所 ・遊歩道の整備
大滝山： 22世紀の森ゾーン 「時(天)の流れ、人の力(和)、地の利(特性)」	親子を対象に森林の中でレクリエーションと森林に関する学習と研修を展開する。 「森を守り、創り、育てる」 「森の学ぶ」「森に遊ぶ」 拠点地区の一つ	<ul style="list-style-type: none"> ・林業実習と研究を基本とした林業実習展示林整備 ・森林の育成と保全 ・休憩展望 ・レクリエーション施設 ・林道及び駐車場、ビジターセンター、作業小屋、休憩所、遊歩道等の整備
滝・河原角地区： 冒険の谷ゾーン	溪流と深い山の景勝地であり、これを生かした子どもたちの自然の中での体験と遊びの場とする。できるだけ自然に近づいた状態で子どもたちの豊かな創造性と野外体験を展開する。	<ul style="list-style-type: none"> ・自然観察路 ・オリエンテーリングコース ・サバイバルコース ・休憩施設（山小屋） ・溪流釣り ・沢のぼり訓練コース ・野営場

第2章 水源地域周辺の現状と課題の整理

2-1 水源地域周辺の現況を示すキーワードと情報の整理

2-1-1 水源地域周辺の特徴

水源地域には、かつて、13の集落があったが、現在では横川ダム計画前に移転した滝、高野、赤沢、豆納、さらに横川ダム建設水没地にあたる市野々、下叶水が移転して7集落となった。しかし、水源地域周辺には、かつて集落があった名残や、地域文化も残されており、地域の歴史を含めて横川ダム工事事務所による「ふるさとへの想い」に詳細がまとめられている。

また、ダム事業着手以前に、東部地区の8集落が一致団結してまちづくり活動を展開し、農林水産祭の「むらづくり部門」で天皇杯を受賞したことを記念して発行された「東部地区のむらづくり」に当時の東部地区の状況や、子供たちの夢などがまとめられている。

ここでは、これらの資料や既存の調査資料等を基にして、歴史的な流れの中における現在の水源地域周辺である東部地区の特徴を、キーワードを抽出する方法で整理を行った。

表 2-1 水源地域周辺の特徴

区分	キーワード等	概要
自然環境	山地面積	<p>東部地区に沼沢と白子沢を加えた旧津川村の面積集計データによると、総面積約19,600haのうち山林率は93.7%を占めている。</p> <p>横川ダム堤体側から上流域の集落を望む。山地に囲まれて農地面積も少ない。(横川ダム完成予想CG写真:「YOKOKAWA DAM 2006」より)→</p> 
	豪雪	<p>典型的な日本海型気候で、全国でも屈指の豪雪地帯。11月中旬には初雪が降り、最大積雪深は時に5mに達し根雪期間は5ヶ月以上に及ぶ。</p> <p>冬の積雪状況(河原角)→</p> 
	飯豊山	<p>飯豊山系の北側山麓に位置し、地蔵岳に源を発する横川、大石沢川に沿って集落が点在する。</p> <p>飯豊連峰を望む →</p> 

	市野々十二景	<p>市野々には「市野々十二景古絵図」があり、自然の情景が季節や時間との関連で詩的に表現されている。</p> <p>市野々十二景古絵図（横川ダム工事事務所：「横川ふるさとへの想い」より）</p>	
	<p>かじか滝</p> <p>不動滝 白滝 （滝街道の三名滝）</p>	<p>横川の最上流部にある滝で、かじかが滝の岩登りをすることで有名。それに合わせたかじか捕りの珍しい漁法もある。</p> <p>不動滝、白滝を加えて、滝街道の三名滝とも呼ばれる。</p> <p>かじか滝 →</p>	
	ブナ林	<p>権沢入の一部にブナの天然林が残っており、国有林で大石沢ブナ保護林に指定して保護している。</p> <p>ブナ天然林が残る。大石沢ブナ保護林 →</p>	
歴史・文化環境	遺跡	<p>豆納遺跡（縄文後期）、赤沢遺跡、胡桃平遺跡、河原角遺跡（縄文中・後期）、向原遺跡（縄文後期）、千野遺跡（縄文早期後半から中期）の遺跡群がある。中でも向原遺跡はダムに沈むため、最近まで発掘が続けられ、土偶や土器、矢じりなど多くの遺物が見つかっている。</p> <p>向原遺跡の発掘風景、多くの遺物が発見された。↑</p>	
	上杉時代	<p>慶長3年（1558年）上杉景勝が越後から会津に移封されてから幕末まで一貫して上杉家の支配下となった。直江兼統は越後と米沢を結ぶ越後街道の整備にあたり、その拠点集落に駅場と伝馬宿送りの制度を敷いて円滑な物資の輸送に当たさせた。市野々は宿駅として発展した。</p> <p>また、上杉鷹山の時代には、当地区にも副業として、集落ごとに特産物の生産が奨励された。</p>	
	越後街道黒沢峠	<p>黒沢峠は、平成8年（1996年）、文化庁の「歴史の道百選」に選ばれた越後街道十三峠のうちの一つである。1980年、土中に埋もれていた敷石が確認され、その後地元の有志によって発掘・整備が進められ、江戸時代の舗装道路が蘇った。</p> <p>黒沢峠敷石保存会によって江戸時代の街道が保存されている ↑</p>	
	イザベラバードの日本奥地紀行	<p>明治11年7月に「日本奥地紀行」を著したイザベラバードが、越後街道の十三峠を通して新潟側から米沢に向かう途中に、市野々に一泊している。この記述には「市野々は素敵で勤勉な部落」と記されている。</p>	

	<p>飛泉寺の大銀杏</p>	<p>600年近く前、越後村上の耕雲寺の末寺として建立された。本堂は2度の火災にあって焼失したが、境内の大銀杏は昭和53年に町の文化財に指定された樹高25m、幹回り7.1mを誇る巨木である。 当初の位置ではダム湖に水没するため、平成18年12月に100mほど山側に移植された。</p>	 <p>↑ 移植作業中の大銀杏</p>
	<p>飯豊山岳信仰</p>	<p>東部地区の旧滝集落からも飯豊山への信仰登山道があり、集落内に「飯豊山石碑」が2基ある。</p>	 <p>西滝にある追分石をかねた飯豊山石碑 →</p>
	<p>民話</p>	<p>この地域には数多くの民話が記述としても残っているのが特徴的である。しかし、民話を語る語り部が跡絶え、継承者の育成が課題となっている。</p>	
	<p>祭り</p>	<p>各集落での祭りのほかに、東部地区では合同の盆踊り大会やふるさと祭りが実行委員会の企画運営によって行われてきたが、最近では合同の祭りは行われていない。</p>	
	<p>年中行事</p>	<p>昔からの年中行事が全て行われている訳ではないが、現在でも主だった行事は受け継がれている。具体的な時期や内容については文献等にきちんと残されており、再現は可能となっている。</p>	
<p>ダム工事に伴う関連インフラ整備等</p>	<p>道路整備の進展</p>	<p>主要地方道川西小国線の付替によって町中心部との時間距離が大幅に短縮されたほか、町道横川ダム湖岸線などの整備が進んだ。</p>	 <p>新しく町中心部と結ばれた主要地方道川西小国線 →</p>
	<p>集落や農業施設等の環境整備</p>	<p>水源地域の生活産業基盤の整備と地域の活性化を図るため、合併浄化槽の設置や農業用排水路、集落道の整備、さらに水源の郷交流館の建設などが行われた。</p>	 <p>水源の郷交流館 →</p>
	<p>ビオトープ</p>	<p>ダム貯水池上流の津川橋付近でトンボ池、ドジョウの水路など、地元の小中学生などが参加して自然観察会やビオトープ整備が行われている。一帯は「叶水ふれあい生物村」という名称で約3haの面積を有している。</p>	 <p>叶水ふれあい生物村での観察会 →</p>

	情報インフラ	<p>ダム堤体及びダム湖を管理していくために敷設された光ファイバーを活用して、周辺の携帯電話不感エリアの解消を、全国初のケースとして実施した。</p> <p>光ファイバーを利用した携帯アンテナの設置 → </p>
	ダムサイト	<p>管理所のほか、インフォメーション・展示学習機能を備えた広報交流館、駐車場、展望広場が整備される。</p> <p>広報交流施設内の展示室のイメージ図 → </p>
	市野々地区	<p>飛泉寺の大銀杏を移植し、周辺を広場として整備する他、黒沢峠の敷石道から対岸の桜峠につながるルートとして「もぐり橋」が計画されている。</p> <p>周辺環境整備市野々地区の計画図 → </p>
	下叶水地区	<p>湖畔の広場として、自然草地の整備、池や河道の掘削による帯水面の拡張、並木植栽、管理用通路の整備などが計画されている。</p> <p>周辺環境整備下叶水地区の計画図 → </p>
	上叶水地区	<p>パークゴルフ場（公認 18 ホール）、ゲートボール場（2 面）、芝生広場、親水施設、湖畔の散歩道、並木植栽などが計画されている。</p> <p>周辺環境整備上叶水地区の計画図 → </p>
人口動態	人口減少	<p>昭和 35 年には東部地区全体で 1,472 人を数えた人口も、昭和 40 年に 1,280 人、昭和 60 年に 667 人、平成 17 年には 424 人まで減少してきている。（別添資料編 1-4）</p>
	高齢化	<p>高齢化率は、河原角、新股、大石沢、上叶水の集落ごとの集計では、平成 2 年に 18～35%であったものが、平成 17 年には 24～48%へと上昇している。今後も高齢化が進展していくことは間違いないが、上大石沢のように町外からの I ターン世帯の移入によって、平成 2 年より高齢化率が低下している地域もある。（別添資料編 1- ）</p>
	町外からの若い人たちの移住	<p>町外から東部地区に移住してくる若い人たちが増加傾向にあり、山の仕事や、雑穀の生産など、地域の環境を活かした特徴ある活動を展開しているケースが見られる。</p>

産業	観光わらび園	<p>観光わらび園は、町内に 11 箇所あるが、そのうち 5 箇所が東部地区に分布している。リピート率が高く、地域の産業として定着している。</p> <p style="text-align: right;">観光わらび園 →</p>	
	おいしい米	<p>地元の人たちの間でも、東部地区とりわけ新股のお米はおいしいという評判が高い。</p> <p style="text-align: right;">おいしい米 →</p>	
	つる細工	<p>食料品等を入れる籠や木の実の採取等に用いられてきた民具の一つである。アケビやマタタビのツル等を材料にし、実用品としても民芸品としても人気は高い。また、つる細工の体験講習会なども開催されて人気がある。 地域の伝統技術であるのつる細工 (白い森道先案内人パンフレットより)→</p>	
農業生産・食と料理	農業生産	<p>東部地区の農業の主力は水稻であるが、1980 年には 15,550 a あった作付面積が、2002 年には 8,102a とほぼ半減している。但し、特筆すべき点は、これまで最高で 254a だった雑穀類が、2002 年には 1,414a と大幅に増加している点である。</p>	
	自然の恵み	<p>山菜、きのこ、川魚、木の实、木の芽など山の幸、川の幸が豊で、昔からこの地域の食を支えてきた。</p>	  <p style="text-align: center;">↑自然の恵み、山菜ときのこと↑ (小国町観光協会 HP より)</p>
	郷土料理	<p>タワラ、この葉まま、ざくざく煮、きくらげの白和え、あかつき粥、とふから炒り、マスのすし、こごみのクルミ和え、みずとろろ、うどのどころ煮、あけび焼きなど地域の食材を利用した様々な郷土料理がある。</p> <p style="text-align: right;">自然の恵みを生かした多彩な郷土料理 →</p> <p style="text-align: right;">(横川ダム工事事務所：ふるさとへの想いー市野々・下叶水ーより)</p>	
学校教育	児童数の減少	<p>昭和 40 年には小学生 162 人、中学生 82 人、計 244 人いた東部地区の児童生徒も、平成 17 年には小学生 16 人、中学生 7 人の計 23 人までに減少してしまった。</p> <p style="text-align: right;">児童数が激減している叶水小中学校 →</p>	
	学校統合	<p>東部地区だけでなく、小国町全体で児童・生徒数の減少が激しいため、町教育委員会では平成 25 年度を目途に、全町の小・中学校を、統合して 1 校ずつにする考え方で調整している。</p>	

	基督教独立学園高校	鈴木粥美氏によって昭和8年に基督教独立学校として設立されたが、戦後の学制改革によって昭和23年4月に基督教独立学園高等学校として再スタートした。以来、叶水の地で、特色ある小規模高校として広く知られるようになり、全国から学生が集まって来ている。	
まちづくりに関する活動やグループ等	農林水産祭「むらづくり部門」天皇杯受賞	東部地区のむらづくりの活動が評価され、昭和58年に第22回農林水産祭の「むらづくり部門」において、天皇杯を受賞した。地区の誇りとして、昭和59年に叶水に記念碑が建立された。 叶水にある天皇杯受賞記念碑 →	
	まちづくり活動の拠点施設	昭和58年の農林水産祭天皇杯受賞につながる、東部地区のまちづくり活動を支えてきた叶水基幹集落センターは、昭和50年山村振興特別対策事業によって建設された。 叶水基幹集落センター →	
	まちづくりや環境教育、食育、観光交流などに関する活動団体	NPO法人おぐに森と水辺の会、おも白い森、白い森案内人、森林インストラクター、五穀の会などの活動に東部地区から参画している人たちがいるが、同一地区という切り口での連携や協力関係はあまり見られない。また、東部地区全体の地域づくりの推進母体は、東部地区振興協議会が担っている。	

その他、ダム水源地域の資源性については横川ダム工事事務所によって、「小国の郷風土資産マップ」が作成されており、ダム本堤や湖水橋など、ダム建設によってできた新しい人工景観を含め「横川の里八景十六勝」が選定されている。

表 2-2 横川の郷 八景十六勝

八景		十六勝			
八景の一	ダム堤体の威容	十六景の一	七曲り峠	十六景の九	桜峠
八景の二	湖水橋の麗用	十六景の二	木の谷	十六景の十	飛泉寺と大銀杏
八景の三	鐙坂の老松	十六景の三	見付山	十六景の十一	出生の滝
八景の四	丸山の山容	十六景の四	市野々街道	十六景の十二	済広寺
八景の五	火山の夕景	十六景の五	黒沢峠	十六景の十三	土尾原
八景の六	角子岬の老松	十六景の六	熊の神	十六景の十四	土尾の峰の城跡
八景の七	津川橋の麗容	十六景の七	市野々宿	十六景の十五	送り地藏
八景の八	愛宕山の遠望	十六景の八	鐙坂	十六景の十六	コウセン地藏

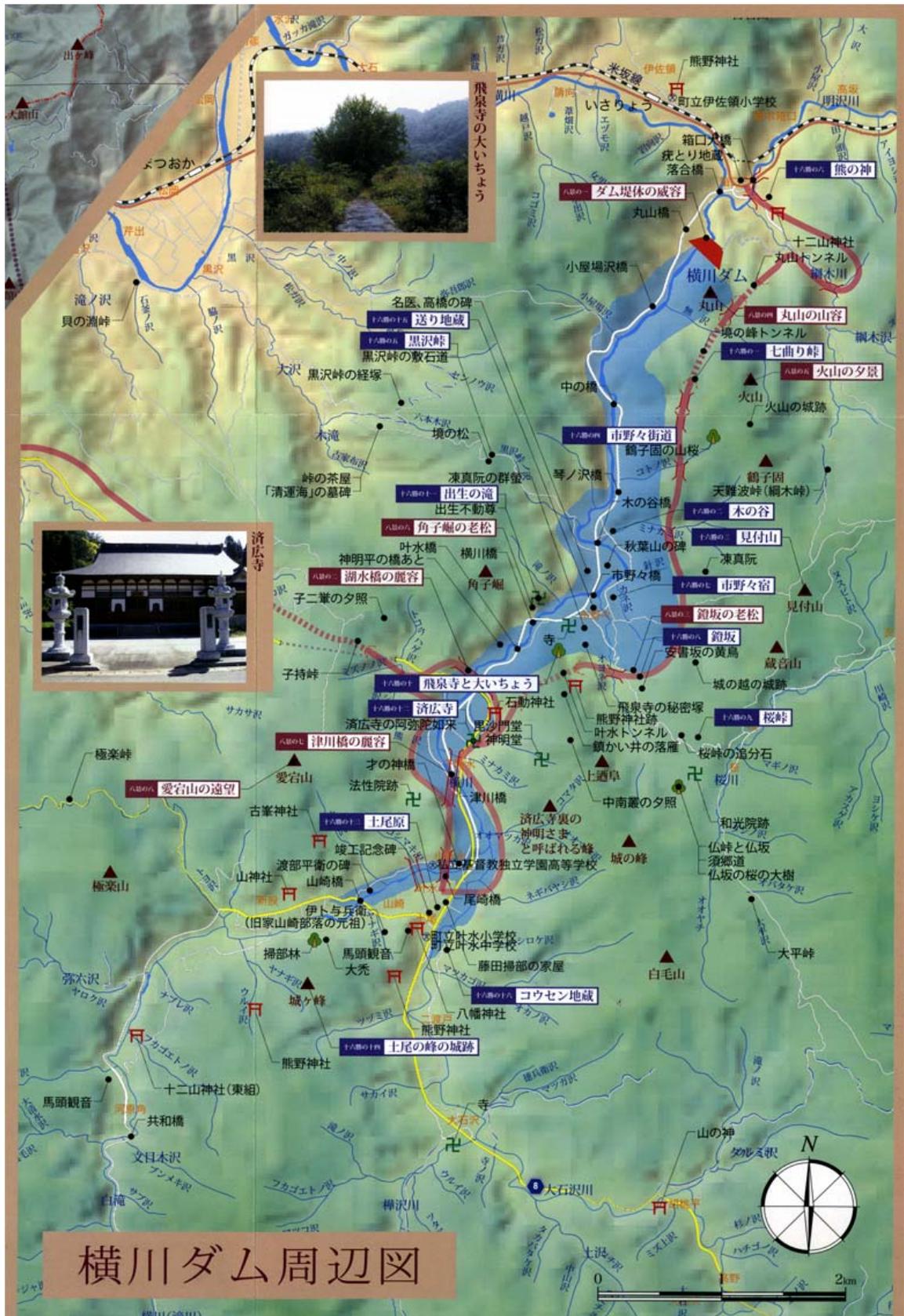


図 2-1 横川ダム周辺図と横川の里八景十六勝（横川ダム工事事務所）

2-1-2 ダム上流地域の集落機能の現状

近年の全国的な傾向として、農山村集落では農林業の低迷や後継者不足と高齢化、人口減少や流出による大幅な集落人口の減少、生活スタイルの変化などによって、共有地や公共施設の維持管理、冠婚葬祭や地域の祭り・行事の実施など、集落の共同体としての活動や行事の継続が困難になりつつある状況にある。

本町では、平成 18 年度に別途「農山村地域におけるムラ機能の維持・保全に関する研究」（以下「ムラ機能に関する研究」と称する）を進めていることから、本調査に関連するダム上流地域の集落の資料を抽出して、その概要を以下に整理する。

1) 駐在員アンケート調査結果

駐在員に対するアンケートによって、集落機能に関して問題があるとされた項目は以下のとおりであった。

(1) 現状における諸問題の発生状況（上大石沢、下大石沢、上叶水、河原角、新股、下叶水の 6 駐在区の一つ以上で問題があると回答のあったもの）

- ・森林の管理が行き届かなくなり、森林が荒れている。(3/6)
- ・水路や河川環境が変貌している。(2/6)
- ・神社仏閣等の歴史的資源が荒廃している。(1/6)
- ・山林の管理が行き届かなくなっている。(4/6)
- ・自給程度の耕作しかできない農家が増えてきている。(3/6)
- ・林業経営への意欲が減退している。(3/6)
- ・集落内で婚礼や葬儀を手伝うことが困難になっている。(1/6)
- ・祭りや伝統行事の実施が困難になっている。(1/6)
- ・集落内施設等の除雪や雪下ろしを実施することが困難になっている。(1/6)
- ・高齢者世帯の冬季の積雪に対する助け合いが減少している。(1/6)

(20 の設問のうち 1 集落でも問題があると答えられた項目は以上 10 項目であった。)

(2) 今後の集落活動の維持に関する見通し。

- ・「農作業」における共同作業。： 3/6 は維持困難
- ・「山道の補修、草刈などの山作業」： 3/6 は既に実施していないか維持は困難
- ・「道路側溝の維持管理」： 3/6 は既に実施していないか維持は困難
- ・「集落内施設や歩道などの除雪や雪下ろし」： 2/6 は既に実施していないか維持は困難
- ・「高齢者世帯の雪下ろしなど冬季の積雪に対する助け合い」： 5/6 が既に実施していないか維持は困難又はほとんど不可能
- ・「公民館や公園・空き地の掃除、草刈り、雪囲いなど」： 3/6 が既に実施していないか、維持は困難
- ・「共有地などの山林の管理」： 6/6 が既に実施していないか維持は困難又はほとんど不可能
- ・「有害動物の駆除活動などに関する共同作業・助け合い」： 4/6 がもともと実施して

いないか、既に実施していない。

・「神社・仏閣や集落の共有財産の維持管理」：3/6 が既に実施していないか、維持は困難

・「結いの精神に基づく互助活動」：5/6 が既に実施していないか、維持は困難

・「祭りや伝統行事への参加・協力」：1/6 が維持は困難

・「会合、寄り合い、集会などの開催、参加」：1/6 が維持は困難

・「集落内の婚礼や葬式における助け合い」：1/6 が維持は困難

・「ごみ置き場の清掃・管理」：2/6 が既に行われなくなったか維持は困難

・「回覧版等の行政連絡の伝達」：6/6 が比較的良好に維持、あるいはなんとか維持

(将来的に、これらの様々な集落活動の維持が困難あるいは維持できなくなると考えられる最も大きな理由は、居住者が高齢化し、体力的にも作業を負担できなくなるからであった。)

2) 町民アンケート（個人）調査結果

調査集計が合併前の旧町村ごとであるため、当該地区は旧津川村のデータで示すものとする。

■集落機能の維持では地区の50%以上が参加している（時々参加しているを含む）活動は、参加率の高いものから、①集落の婚礼や葬式における助け合い69.8%、②回覧板などの行政連絡の伝達68.9%、③会合、寄り合い、集会などの開催、参加61.5%、④祭りや伝統行事への参加・協力59.5%、⑤農作業に関する共同作業、助け合い53.8%、⑥山道の補修、草刈などの山作業50.8%

参加率の少ない項目は①有害動物の駆除活動などに関する共同作業、助け合い10.5%、②共有地などの山林の管理（枝打ち、下草刈りなど）17.2%、③高齢者世帯の雪下ろしなど冬季の積雪に対する助け合い20.5%、④結い（ヨイ、ヨイナシ）の精神に基づく互助活動23.2%、⑤神社・仏閣や集落の共有財産の維持管理40.8%

■特に大変だと思う共同作業・コミュニティ活動を旧町村別に見ると、農作業に関する共同作業や山道の補修などの山作業、共有地などの山林の管理は旧北小国村及び旧南小国村でより高い割合となっているが、祭りや伝統行事への参加・協力や集落内での婚礼や葬式における助け合いについては、旧津川村での割合が特に高くなっているのが特徴である。

■旧津川村では、必要と思われる共同作業やコミュニティ活動の上位は、①集落内の婚礼や葬式における助け合い、②山道の補修、草刈りなどの山作業、③高齢者世帯の雪下ろしなど冬季の積雪に対する助け合いであった。旧津川村では集落の冠婚葬祭に対する助け合いは、特に大変だと感じる一方で、必要性も、最も重要と感じているという特徴がある。

■地区・集落としての活動を維持していくためにどうすべきか？に関しては、全地

区とも同様の傾向を示し、最も多いのが「道路や公園、公共施設などの管理は行政が積極的に支援する」であり、次いで多いのが、「近隣の集落で助け合う」であった。

■住んでいる集落の魅力を高めていくために今後必要な取り組みとしては、「田舎暮らしや新規就農を考えている人の積極的な受け入れ」がトップであるが、「地区・集落の共有財産を生かした交流活動」が他の地域よりも高い割合を示し、観光わらび園などが集積する地域として、地域の資源を活かした観光・交流人口の拡大により集落を活性化させることが望まれている。

■高齢になったときに望む住まい方では、74歳以下の各年齢層とも、「小国町以外で暮らしたいという意向が旧津川村と旧小国町で高くなっている。

■住んでいる「地区・集落を良くするために必要な公共サービス」としてダム上流地域では、「就労の場や機会の充実」、「一人暮らしの高齢者の安否確認など見回り体制の強化」、「道路の除排雪の強化」、「道路の維持管理」などが上位となっている。

■町全体としての今後特に力を入れていくべきと思う分野では、旧小国町以外では、ほぼ同じ傾向で、「新しい産業おこしや起業の支援」、「休日・夜間の救急医療体制の充実」、「訪問看護や在宅福祉など高齢者福祉サービスの向上」、「道路の除雪」などが上位に挙げられている。

3) 町民アンケート（世帯）調査結果

町内の各世帯（世帯主）に対するアンケート調査で、主に世帯後継者の有無、農地・山林の管理状況などが中心である。

■家族構成では、旧津川村は町全体の平均値と同じ1世帯当り3.4人である。

■世帯の後継者の状況でも、旧津川村は町全体の平均値に近く、「同居家族または現在別居家族だが将来住み続けてくれる」を合わせると約32%となっている。「子供はいるが、将来この家に住むかどうかかわからない」が最も多く約44%を占めている。

■農地の所有状況と管理状況

・旧津川村では約63%の世帯が農地を所有しており、町全体の平均値である約40%を大きく上回っているが、80%を超える旧北小国村や南小国村よりは少ない。

・農地面積では水田が平均278アールと畑が7アールで、水田では町全体の平均より60アールほど少なく、畑は逆に最も多い。

・農地の管理状況は、「自家で耕作している」が41%で最も多く、「大半を貸している」が次いで多く29.1%である。「大半は荒れたまま」が9.4%あった。町全体の平均値と比較すると、自家で耕作している人が多く、貸している人はやや少ない。

・半数以上の世帯が山林を所有者しているが、旧北小国村や南小国村と比較すると2割ほど少ない。

・山林の世帯あたりの所有面積では5haと、旧北小国村に次いで多いが、「自家で適

切に管理している」世帯は、40%弱と旧北小国村や南小国村より少なく、「放置している」が36.4%あって、町内で最も高い比率となっている。

・所有する農地や山林の鳥獣被害の状況では、半数以上が無回答と「わからない」であるが、旧津川村では「ひどくなっている」は12%強で、「被害を受けていない」方が20%を超えている。一方、旧南小国村では35%が「ひどくなっている」と答えており、地域差が大きい。

2-1-3 個別ヒアリング調査結果

本調査では、特にダム上流地域の在住者、ダム上流域の出身者で町内在住者、ダム湖に沈む集落出身者で現在も町内在住者の30代の若い人たち7名にインタビューによるヒアリングを行った。内訳と結果概要は以下のとおりである。

1) 東部地区振興協議会が昭和60年3月に発行した、第22回農林水産祭「むらづくり部門」天皇杯受賞記念誌『東部地区のむらづくり』に、作文が掲載されていた当時叶水小中学校の児童・生徒だった方。：男性2名、女性2名

- ・全員がこの生まれ育った東部地区が好きで、良いところだと感じている。
- ・子供を自然の中で育てたかったため小国に戻ってきたが、自分たちの子供にも小国町に住みつけて欲しいとは考えていない。
- ・子供の頃と大きく違っている点は、道路や上下水道などのインフラが整備されたことで、街中での生活とあまり差がなくなってきた。
- ・各集落の人口が減少して、祭りなども活気がなくなっている。
- ・集落の共同作業も、高齢者が増えて若い人に負担がかかるようになってきている。
- ・地域がまとまってまちづくりの活動を行うことは、まだダム計画時の賛成派と反対派との分裂のわだかまりが残っているため、一つになることは困難と思われる。
- ・叶水の基督教独立学園とは今後もお互いに協力し合っていく必要がある。
- ・市野々の飛泉寺の大銀杏は、遊んだり実を拾ったりした子供のときの思い出に残るシンボルである。
- ・新股でできる米は非常においしい。やはりこの地区は農業を大事にすべきだと思う。
- ・昔と比べて休耕田が目立つようになってきた。
- ・ダム周辺の利活用や活動については、以下の提案があった。
 - ア. 都会の子供と地元の子供たちが交流できる場づくりができればいいと思う。
 - イ. 子供を遊ばせることができる公園を作してほしい。
 - ウ. 地区の基幹産業を育て、ダムを訪れた人たちに提供できる体制作りが必要と考えられる。
 - エ. 白川ダムのように、人が集まってきて楽しめる場となるようにしてもらいたい。
 - オ. ダム湖や湖畔を利用した活動を、東部地区の人たちだけで取り組むのは難しいのではないか。

2) 叶水小中学校の卒業生。現在町内在住で、定期的集まりを持っている方たち：男性1名、女性2名

- ・人口が減って、特に運動会なんかの時は寂しく感じる。
- ・道路が良くなって通勤が大変楽になった。
- ・集落の共同作業などは高齢者が中心で大変である。

- ・最近若い人たちが転入してくることがきた（ほとんどが基督教独立学園の卒業生つながりのつてが多い）が、地域との共同意識はあまりなく、積極的に関係は持ちたがらない。
- ・叶水に移転してきた若い人たちも、地域との関係は薄く、町内でも地域外の人たちとのつながりの方が多い。（趣味や仕事の関係）
- ・新しく転入してきた若い人たちともっとコミュニケーションが取れて、協力し合えればよいと思う。
- ・行政にとっては叶水の集落は何かと問題が発生するところで、他の集落と比べて、関係性はあまりよくない。
- ・箱物は要らない。水の郷も賛否両論で、地域がまとまって目的をもって運営しているわけではない。今はほとんど営業していない。
- ・グリーンツーリズムなどを広げていく。
- ・雑穀などをウリにして人を呼ぶ。
- ・ダムの話が持ち上がってからは、やはり住民同志がギクシャクした。まちづくりに対する活動もあまりしなくなったと思う。
- ・東部地区連絡協議会も、結局高齢化してきて、若い人が後を受けて引っ張る状況にない。
- ・基督教独立学園は、コミュニケーションを持っている人には身近に感ずるし受け入れられていると思うが、そうでない人には、全く別世界と考えているのではないか？
- ・小中学校の運動会に参加したり、田植えや稲刈り休みというのがあって、生徒は1日授業を休んで、地域の農家の手伝いを行った。
- ・雪下ろしの手伝いも行った。
- ・地元に住んでいたものにとっては、生れたときからあったし何も違和感は無かった。
- ・今でも先生のうちに遊びに行ったりしている。
- ・学園が携帯電話のアンテナ設置を反対した時には、かなり地域住民は怒った人が多かった。そういうギクシャクした関係は結構あるかも知れない。
- ・3人のうち2人が同学園の卒業生。

2-2 地域づくりの現状と課題

2-2-1 東部地区住民の地域づくりに対する活動の変化

東部地区の地域づくりの歴史や現況から見ると、当地区が農林水産祭むらづくり部門で天皇杯を受賞した頃までは、地域全体の活性化に対する推進力も団結力も強く、活発な活動が見られた。しかし、ダム建設に伴う集落移転や急激な人口減少・少子高齢化の進行により、個々のムラ機能を維持していくことが難しくなっている。このため東部地区を一つの生活エリアとして充実させていくために取り組んできたこれまでの住民活動も脆弱化してきている。

2-2-2 ダムと周辺環境を活かした東部地区の地域づくりの課題と可能性

新たな環境での再出発が期待される東部地区の地域づくりについて、その現況特性を整理しながら、今後の課題と可能性を表 2-3 に探ってみた。

表 2-3 地域づくりの課題と可能性

要素	ダムと周辺環境を活かした将来の可能性	地域づくりの課題
自然・景観の保全と活用	<p>▷劇的に移り変わる季節感を体験できる景観ポイントやルートなど、地域の誇りとすべき場所を決めて、住民がその景観保全のために協力し合うことが、地域づくりの具体的な活動につながっていく。</p> <p>▷霧・湖水・雪といった豊かな水の資源性を活かす多様な切り口を用意することによって、訪れた人たちに癒しと感動を与えることができる。</p>	<p>▶自然が豊かで、美しい自然景観があるという財産を、まちづくりに活かすためには、そこに住む人たちと自然との良好な共生関係が見えることが、これからの時代には必要となる。</p> <p>▶例えば、里山やスギ人工林の管理と有効な利活用がきちんと行なわれているとか、自然景観を一層引き立てる人工景観への配慮がなされているとかの住民側の活動が重要になってくる。</p>
歴史・民俗の伝承と活用	<p>▷縄文時代からの森との共生の歴史や知恵を、生きた情報として伝承しながら、地域固有の文化として、来訪者にも感動を与え、観光交流や体験学習に役立てていくことができる。</p>	<p>▶現代に生きる我々も未来へ、この大地の記憶を伝えていかなければならない。</p> <p>観光交流に活かすことは、伝承していくための手法の一つではあるが、真の目的は未来の地域づくりへの人材育成であり、地域を担う若者の定住が課題となる。</p>
交流人口の拡大や地域連携の推進	<p>▷ダム湖周辺地区を魅力アップすることによって、町内における拠点性が高まる。</p> <p>特に町内の他の地区には無かった広々とした水辺環境は新しい資源として効果的な利用を図ることが可能である。</p> <p>▷町外との交流・連携においても、白川ダムや大石ダム、奥三面ダムなどとの連携、民話の里としての交流、歴史的街道の交流などに広げていくことが可能である。</p>	<p>▶町内外を問わず、新しい環境が生れることによって、訪れる人が増えることは予測できるが、これらの人たちがリピーターとなって、地域の人たちと交流が継続されるためには、新しい「しくみ」や「しかけ」をつくって行かなければならない。</p> <p>▶広域な連携交流を図るためには、多様な関係機関との調整や協働が必要となる。</p>
学習環境の創造	<p>▷ダム上流地域の歴史文化や農山村環境に加えて、新たな湖水面や、湖畔の水辺環境を学習環境の拠点として活用することが可能である。</p>	<p>▶この地域に暮らす人たちが育んできた、自然との共生の知恵を伝承していく人材の育成が不可欠となる。</p>
癒しの場の創出	<p>▷背景の山々や森林・渓谷などの豊かな自然、美しい農村景観、広々とした湖、多様な水辺空間を、健康回復や癒しの場として活用することができる。</p>	<p>▶専門の医師やセラピスト、インストラクターとの連携体制を構築するなど、単なる癒し空間の提供に留まらない、受け入れのための体制づくりが求められる。</p>

<p>農林産物と郷土食の活用</p>	<p>▷わらびやきのこ、五穀など地域の特産物を活かした、安心安全な素材や加工品、郷土食の提供などによる事業化の可能性は高い。</p> <p>▷水質日本一とともに、おいしさ日本一のブランド米を目指すことが可能。</p> <p>▷スローフード、無農薬野菜、自然食、安心安全な食、食育など、食に関するキーワードが多く見られる時代にあつて、当地域の昔からの郷土料理は、まさにこれらに当てはまる自然素材を活かしたもので、ばかりで時代的なニーズに合っている。</p> <p>▷町が進める森林セラピー基地などとも連携して、自然の持つ癒しを、空間だけでなく食の面からも満たすことができるという商品化が可能である。</p> <p>▷グリーンツーリズムを推進する大きな要素となる。</p>	<p>▶地域が一体となって推進する必要がある、共通認識に立った活動と協働が必要となる。(個人的レベルの取り組みから、いかに地域全体の活動に広げていくかが課題となる。)</p> <p>▶現在、地域内で取り組んでいる様々な情報を広く発信していく体制づくりが必要である。</p> <p>▶農業や食に関しては、町外からの移住者とのかかわりも重要となり、まちづくりの視点からの協働が課題となる。</p> <p>▶魅力アップのためには食だけでなく、ものづくり体験、湖面や水辺での活動、歴史街道の散策、縄文遺跡を始めとする地域の歴史・文化資源の探索など、他の要素との連携が課題となる。</p>
<p>若い人たちのU・J・Iターン促進</p>	<p>▷東部地区では、基督教独立学園高等学校の受け入れに始まり、今でも町外からの転入者を多く受け入れている。この特性を今後も積極的にまちづくりに活かし、自然との共生を望む若い人たちを受け入れつつ、活性化を図ることが可能な地域である。</p>	<p>▶転入者を受け入れるだけでなく、彼らのエネルギーを地域づくりに有効に活かしていく積極的な連携方策が課題となる。</p> <p>▶地縁を大切にする集落活動に彼らを積極的に参加させることが必要である。</p>
<p>ものづくりを大切にしたい仕事場の創出</p>	<p>▷かつて盛んだった木地づくりや、つる細工、山菜・きのこを活かした食などの伝統技術の伝承を、さらに一歩進めた新しいものづくりへと進化させ、地域産業起こしへと高めていける素材を有している。</p>	<p>▶既にこの地区では絶えてしまった技術もあり、地域内だけでは困難な場合もある。</p> <p>▶地域間の連携協力や、多様な地域づくりの活動との連携によって、新たな方策を模索していく必要がある。</p>
<p>民話の活用</p>	<p>▷この地区を代表する特徴の一つに民話や伝説の多さがある。周辺集落の雰囲気と一体となった民話の里としてのポテンシャルは高い。</p>	<p>▶現在、語り部として来訪者に語ることでのお年寄りがいなくなり、民俗文化の継承が懸念される。</p> <p>▶語り継ぐことのできる後継者の育成が急務となる。</p>
<p>雪の有効活用</p>	<p>▷雪を利用した雪中貯蔵によって、おいしい野菜や米を提供することが可能であるだけでなく、自然エネルギーとして公共施設や集落施設等の地域冷房にも活用が可能で、雪国らしいまちづくりができる有効な資源である。</p>	<p>▶実用化までには、雪中貯蔵によって味がよくなる客観的なデータの収集など、調査研究が必要で、関係機関との連携が不可欠である。</p> <p>▶雪エネルギー利用は各地でも行われており地域的特長が求められる。</p>
<p>木質バイオマス利用による森林と林業の活性化</p>	<p>▷森林への適正な管理が行われなくなり、森林の荒廃と林業の衰退が問題となっている。人工林の未利用間伐材や里山の落葉紅葉樹の定期的伐採による木質資源を、バイオマスエネルギーとして活用することによって、地域森林の管理と、CO2削減による地球温暖化防止に寄与できる。</p> <p>▷また、森林面積の多い当地域にとって林業関連産業の持続的経営に新たなインパクトとなる。</p>	<p>▶林業労働者の高齢化が進み、後継者がいなくなってきた。大石沢に転入して林業に従事している若いIターン者のように、町外からの活力の導入は不可欠となりつつある。</p> <p>▶こういう若者たちが定住できる環境づくりが、今後の可能性の拡大に必要な要素となっている。</p> <p>▶源流部の森林の維持保全は、その地域だけの問題ではなく、流域全体、日本全体の大きな問題であり、多くの人たちにいかに目を向けてもらうかが課題である。</p>

2-3 水源地の利活用に関する事例

2-3-1 大石ダム

荒川は古来より氾濫を繰り返し、特に1966年（S41）と1967年（S42）に連続して発生した集中豪雨は、荒川流域に甚大な被害を与え、「羽越水害」と呼ばれる。

この荒川水系大石川に、洪水調節・発電を主な目的として1968年～1980年に建設されたダムが大石ダムである。

大石ダムは飯豊山への登山口に位置しているため、全国各地から毎年多くの登山者やハイカー達が訪れる他、周辺の良質な自然を利用した自然探勝・トレッキングなどの適地として、毎年多くの人たちに親しまれている。

また、ダム周辺には多くの施設が整備されており、これらを活用して関川村の観光事業とも連携した多くのイベント・行事が行われている。それらの中には、毎年8月28日に行われる「えちごせきかわ大したもん蛇まつり：全長82.8mの世界最大の神輿」のように、大石から全国に発信された情報によって広域の各地から多くの観光客を集めるまでになり、地域の「文化」へと育ったものもある。

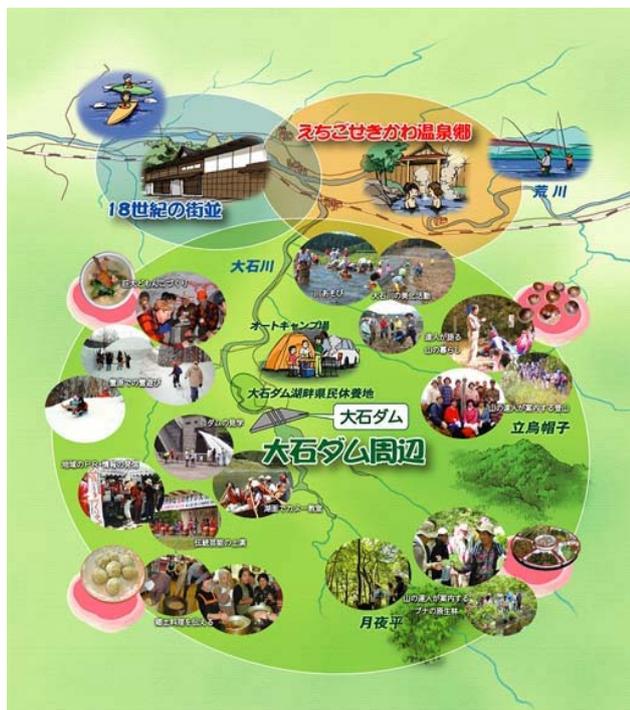


図2- 大石ダム周辺マップ（羽越河川国道事務所ウェブサイトより）

■大石ダム諸元

形式 重力式コンクリートダム

堤高 87.0m

堤頂長 243.5m

堤堆積 391,000m³

総貯水容量 22,800,000m³

流域面積 69.8k m²

湛水面積 110.0ha

発電所名 大石発電所（10,900kW）

■周辺施設等

- ・大石ダムインフォメーションハウス
- ・大石オートキャンプ場
- ・つり堀



大石ダム本堤

- ・大石自然館
- ・レストハウス大石
- ・バーベキュー広場
- ・小動物園
- ・遊びの広場
(ゴーカート、ミニS L、バッテリーカー)
- ・ミニアスレチック
- ・展望公園(左岸・右岸)
- ・左岸下流公園
- ・流木をチップ化してカブトムシの繁殖にチャレンジ (2003年より)



トンネル内に保管展示されている 82.8mある藁でつくられた「大したもん蛇」
(関川村の「えちごせきかわ大したもん蛇まつり」に使われる。(ダム便覧ウェブサイトより))

■行 事

- ・「森と湖に親しむ旬間 (7/21~7/31)」
- ・おいしいダム湖畔まつり：ダム・発電所見学、ダム湖遊覧、ウォーキングラリー、カヌー体験等
- ・親子かじかとりまつり：かじかとり、各種イベント、川遊び
- ・大石ダム湖畔UP・DOWN 関川マラソン

■活動団体等

これら活動の中で「おいしいダム湖畔まつり」と「親子かじかとりまつり」は、森と湖に親しむ旬間の期間中の土日に連続して開催されるイベントであり、「おいしいダム湖畔まつり実行委員会」を結成して運営される。

実行委員会には、国土交通省羽越河川国道事務所・下越森林管理署村上支署・村上地域振興局・関川村・荒川町・神林村・北陸建設弘済会・東北電力・関川村観光協会・関川村緑の少年団・荒川漁協など、非常に多くの組織が参加して地域ぐるみで運営されており、ダムを核とした地域振興として良好な成果を納めている。



カヌー体験



ウォーキングラリー



ダム見学会



魚のつかみ取り大会



フリーマーケット



親子木工体験教室

写真：おいしいダム湖畔まつり (国交省羽越河川国道事務所HPより)

大石ダムでは、春のゴールデンウィーク・夏休み・秋の紅葉シーズンを中心に、週末には恒常的に多くの人々によって利用されている。1日あたりの延べ利用者数は、イベントなどの催し物が無い休日(日曜日)では200~600人程度と推測され、ダムまつり等のイベント時には延べ2000人以上もの利用者を数えることができる。

また、年間利用者数の推計では約15.6万人の報告がある。

■大石ダム水源地ビジョン

<基本理念>

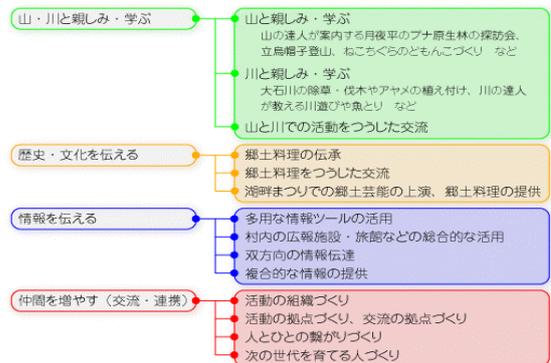
- ・地元の人達が仲間を大切にしながら、協力し合い、自分たちの力で活動を継続していく。
- ・活動を通じて、地域の宝を再認識し、あたため、育み、磨き、そして楽しむ。
- ・自分たちが楽しむことで、自分たちが輝き、そして地域も輝く。
- ・その輝きに惹かれて、外から人が集まってくる。

大石ダム周辺を一つのフィールドにして そんな地域の未来をめざします。

<テーマ>

大好き!おいしい・せきかわ!みんなが輝く生き生きステージ!
 ~春夏秋冬 ふるさとの食が彩る 出会いと発見~

<ビジョンを支える4つの柱(ビジョンの展開方向)>



<ビジョンの推進に向けて>

ワーキンググループを中心に自主的な活動を継続し、行政・ダム管理者などの支援をうけながら、ビジョンを推進していく。また、活動にあたっては、一年の成果を翌年の活動にフィードバックし、適宜、内容を見直しながらすすめていく。



2-3-2 白川ダム

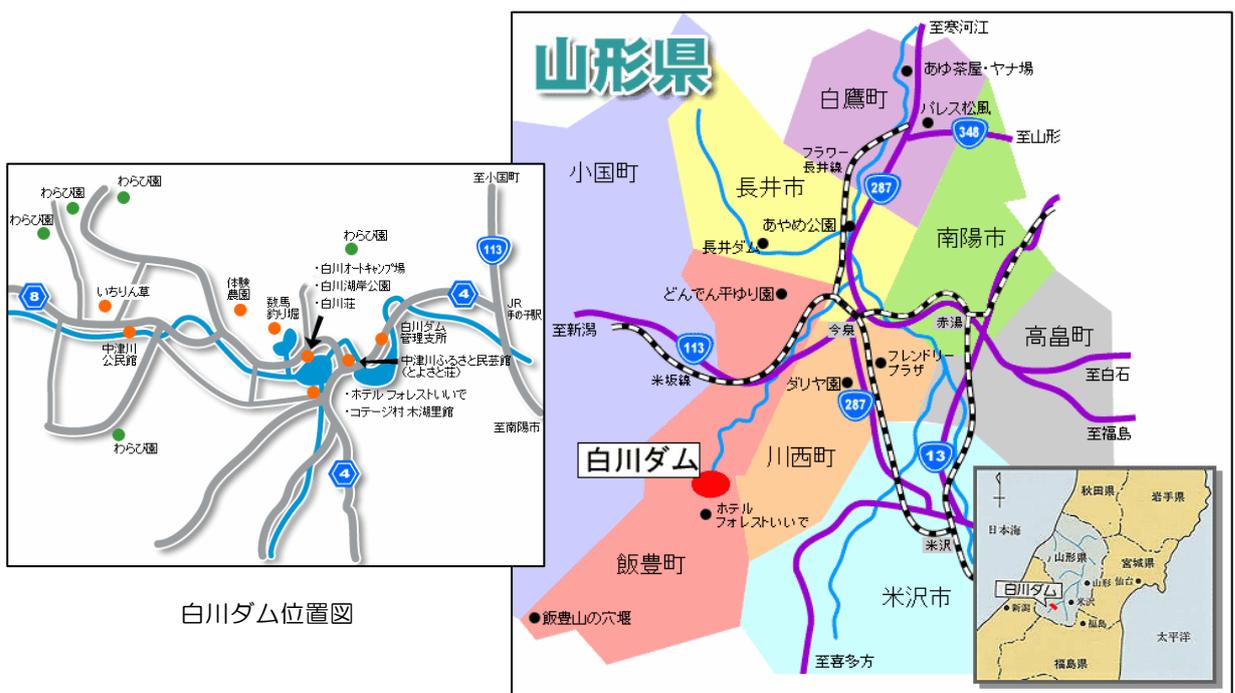
飯豊の山並みに抱かれた白川ダムは、豊かな緑と水の里に出現した一大人造湖で 139 戸の集落移転を伴い、10 年以上の歳月をかけて昭和 56 年に完成したものである。

普段は静かな置賜白川も、いったん大洪水に襲われると、その被害は計り知れないものであった。(特に昭和 42 年の羽越豪雨では、白川をはじめとして最上川上流部は未曾有の大洪水となった)

一方では夏場の水不足にも悩まされ続けてきた地域でもあったため、洪水を防ぎ豊かな水を活用する多目的ダム(洪水調節、工業用水、農業用水の供給、発電)として建設された。



白川ダム湖(ダム写真集ウエブサイトより)



白川ダム位置図

■白川ダムの緒元

事業者	国土交通省		
位置	山形県飯豊町高峰（最上川への合流地点より上流約 20km）		
完成年月	昭和 5 5 年		
形式	中央コア型ロックフィルダム		
堤高	66m		
堤頂長	フィル堤体 348.20m	余水吐	71.40m
集水面積	174.5		
湛水面積	2.7km ²		
総貯水容量	50,000,000m ³		
有効貯水容量	41,000,000m ³		
洪水調節容量	第一次 27,000,000m ³	第二次	30,000,000m ³
利水容量	第一次 14,000,000m ³	第二次	11,000,000m ³
堤体積	フィル堤体 2,233,000m ³ コンクリート（余水吐） 153,000m ³		

■周辺環境・施設

白川湖周辺では、国・県・町・地域住民が連携してダム湖周辺の環境整備が進められており、さまざまなレクリエーション、保養休養、環境教育（体験）施設がある。

① 源流の森

「源流の森」は、利用者が森林や地域の文化と対話し、楽しく学び、交流する事ができる安全で快適な環境を継続的に維持し、育てていくことを目指してつくられた山形県の施設である。

森林での自然体験やクラフトづくりなど様々な体験ができるだけでなく、自然観察指導者の育成や安全研修なども行っている。

<施設概要>

- ・ 源流の森センター：源流の森に関する総合的な情報の提供、交流、案内及び展示施設で、ブナ帯文化や置賜地域の歴史・民族文化等に関する案内や展示の他、研修や催し物のできるホールなどからなる複合施設である。

- ・ 森のアトリエ：人間の五感を通して、森のメッセージを受信し、木工芸や陶芸、彫刻などの芸術的な創造を行うことのできるアトリエで、作品の展示場でもある。地元の陶芸家が常駐している。

- ・ 冒険体験施設：既存の森の中に、人々との信頼関係を築きながらチャレンジする丸太遊具やロープコースを設置し、自然の中で子どもだけでなく大人も楽しめる施設。

- ・ 森のモデルコース、源流の森ロッジ・炊飯棟



源流の森センター



源流の森センター展示室

<主なプログラム>

- ・ 森の学校
 - ・ 森の分校
 - ・ 冒険教育に関する指導者の養成
 - ・ 森林やクラフト、安全に関する研修
- その他、講演会、森の文化祭などのイベントも行っている。

② 白川ダム湖畔公園

白川ダム湖畔に位置し、パークゴルフ場、テントサイト、広場、炊事棟などがある。

③ 白川湖オートキャンプ場

白川ダム湖畔に位置し、オートサイト、炊事棟、トイレなどがある。

④ 白川温泉

湖畔にある一軒宿(白川荘)の温泉。ダムの建設をきにできた施設である。

⑤ 宿泊施設

- ・ ホテルフォレストいいで
- ・ コテージ村木湖里館
- ・ 白川ダム記念館十四郷荘

■ 飯豊町のイベント等

白川ダムのある飯豊町でも、雪を使ったイベントや伝統的なお祭りが行われている。

- ・ 中津川地区雪祭り
- ・ 全国白川ダム湖畔マラソン大会
- ・ 荒獅子祭り
- ・ ふるさといいで里帰りツアー
- ・ 真夏の雪合戦 など

■ 白川交流ネットワーク

白川湖畔交流ネットワークとは、白川湖畔にある関係機関相互の情報交換や連絡調整を行い、効果的に水源地域、地域文化、自然の重要性を一体的に考えることで、環境保全に寄与することを目的に、中津川むらづくり協議会、中津川財産区管理会、(株)緑のふるさと公社、飯豊町、飯豊町教育委員会、中津川公民館、山形県源流の森、白川ダム管理支所で設立された組織である。

炭焼き教室や蛍マップの作成等を行っている。



森のアトリエでの体験



ダム湖畔に建つ宿泊施設棟とコテージ

■白川ダム水源地ビジョン

ダムを活かした水源地域の自立的・持続的な活性化を図り、流域内の連携と交流によるバランスのとれた流域圏の発展を図ることを目的として、ダム管理者がダム水源地の自治体、住民等と共同で策定主体となり、下流の自治体・住民や関係行政機関に参加を呼びかけながら策定された水源地域活性化のための行動計画である。

ダムを治水・利水といった下流地域のための施設から、ダム周辺地域にとっても必要な施設として活用していくことをねらいとしている。

①目標：地域の資源を活かし、また、白川ダムも地域活性化の核として活用して、来訪者を増やし、交流を深めながら、生き生きと暮らせる地域づくりを目指す。

②取組み方針

水源地域の現状を踏まえた上で、右のように段階を踏んだ取組方針（1～9）があげられている。

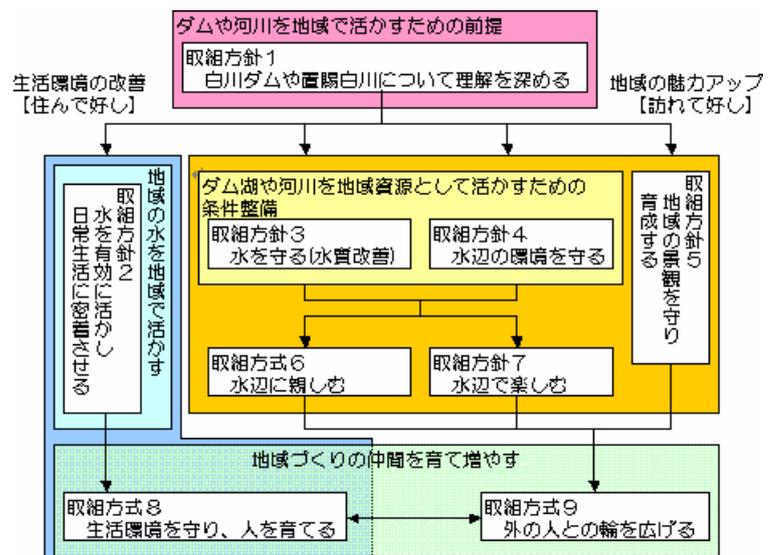


図 2-3 地域活性化に活かすための取組み方針

③現在の推進体制

施策実施計画の立案から実際に施策を実施するまでのすべてのことを「白川ダムビジョン推進会議」が受け持つこととしている。

ビジョンに掲げられているさまざまな取り組みの内、「水源地域のことを理解することができる」あるいは「比較的容易に実施することができる」取り組みについて少しずつ実現させていくことを目指している。

<主な活動>

- ・白川ダムビジョン推進会議
- ・自然観察会
- ・水質調査
- ・秋の河岸環境整備（支障木伐採）など

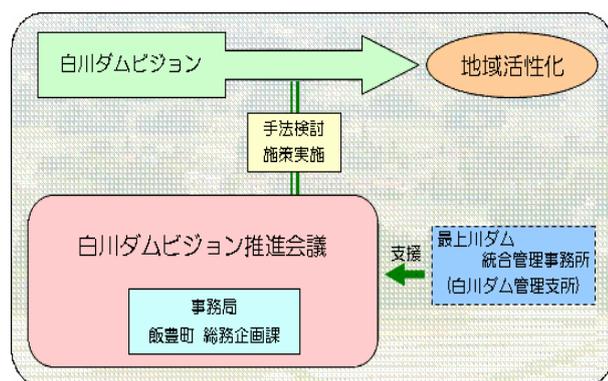


図 2-4 推進体制

2-3-3 奥三面ダム

三面川は、新潟県の北部に位置し、その源を朝日連峰に発し、朝日村、村上市を流下し日本海にそそぐ流域面積664.3、流路延長50kmの新潟県を代表する二級河川である。鮭や鮎を始め、多くの種類の魚や生物が生息し、流域の田畑には水を潤すなどの恵み豊かな川として親しまれている。しかしながら一方で、夏場は渇水しがちで、かんがい用水の不足を来したり、また、大雨が降るたびに氾濫を繰り返し、多くの水害に見舞われてきた。

三面川では洪水、渇水の被害を防ぎ安定した流れを保つため、昭和28年に県営では初となる三面ダムが完成したのを始め、下流部においても河川改修を実施してきた。しかし昭和42年に県北部を襲った羽越水害では、三面ダムで想定していた洪水流量を大幅に上回り、必死の洪水調整にもかかわらず甚大な被害を受けた。

羽越水害以降、三面川流域住民から治水対策への強い要望と、こうした被害を2度と繰り返さないため、最適な治水対策として三面ダム上流に新たなダムの建設が計画され、平成13年に奥三面ダムが完成した。

また、三面川は朝日村、村上市の耕地等の水源として利用されており、近年、夏期に頻発する渇水のためかんがい用水の取水制限を行っている状況である。三面ダム、奥三面ダムでは動植物の保護等を含め、河川維持用水の安定供給が期待されている。



位置図



〈奥三面ダム〉

〈日本カモシカ〉

■奥三面緒元

事業者	新潟県（土木部及び企業局）
位置	新潟県岩船郡朝日村大字三面
完成年月	平成13年10月
事業費	82,200百万円
形式	アーチ式コンクリートダム
堤高	116.0m
堤頂長	244.0m
集水面積	174.5
湛水面積	4.3
総貯水容量	125,500千m ³
有効貯水容量	108,000千m ³
治水容量	54,000千m ³
利水容量	非洪水期 108,000千m ³ 洪水期 54,000千m ³
推砂容量	17,500千m ³
堤体積	257,000m ³

■水没した集落と遺跡

<旧三面集落>

① 集落の暮らし

旧三面集落は人々から「マタギの里」と呼ばれ、自分自身を山人（ヤマンド）と呼ぶように、その暮らしはまさに「山にはぐくまれた生活、森林文化の世界」であった。

狩猟生活を主としており、クマやウサギなどを捕ったり、現在は天然記念物のため捕ることが禁じられているカモシカも冬の貴重なタンパク源として捕っていた。

また、春から夏にかけてはゼンマイ、ワラビといった山菜、秋にはマイタケ等のキノコを採取して生活していた。特に春には家族総出で山菜を加工するため、学校も「ゼンマイ休暇」で休みになった。稲作も行われており、自給自足と住民同士の助け合いの生活様式がこの旧三面集落には残っていた。

周辺地域との交流としては、交通機関の発達が遅れていたり、特に冬期間には朝日村や村上市に出るのに歩いて2日間かかるなど、大変な労力を考えると朝日村や村上市よりもむしろ、峠を一つ越えた山形県小国町との交流が深かったようである。

また冬期間は交通が遮断され集落が孤立してしまうため、急病患者などもヘリコプターで輸送するなど、非常に苦労も多かった。

② ダム建設による移転

旧三面集落は42戸、150人という小さな集落で、奥三面ダム建設地より上流約3kmのところの位置していた。

住みなれた土地を去らなければならない人々は、当初奥三面ダム建設に反対したが、たびたびの洪水や夏の渇水に悩まされた三面川流域に住む何万人の人々のためと、自分たちの将来のため、住みなれた土地を離れることに同意し、昭和60年その歴史に幕を下ろした。

この時、旧三面集落の人々は、そのほとんどが村上市松山地区に集団移転し、現在も「村上市松山大字三面」として「三面」の名を残している。

主な移転先	村上市松山地区	33戸	豊栄市	5戸
	新潟市	1戸	他新潟県内	2戸
	新潟県外	1戸		

<奥三面遺跡>

発掘調査は「奥三面ダム」建設のため、ダム事業費で昭和63年から朝日村教育委員会により、記録保存が行われてきたが、11年間にわたる現地調査を平成10年12月で終了した。これまで19遺跡、面積約16haが調査され、旧石器時代（約3万～1万3千年前）、縄文時代（約1万2千～2千4百年前）、弥生時代（約2千年前）、古墳時代（約千7百年前）、江戸時代（約4百～百3十年前）の生活の跡や土器・石器などが発見された。



ストーンサークル



人体像を彫刻した岩版

■周辺環境・施設

- ① 三面集落メモリアルパーク：「三面ありき」の石碑が建てられている。
- ② ダム湖（あさひ湖）：一般公募により決定
- ③ 梯朝日国立公園：奥三面ダムは朝日国立公園内にある。一帯は全国屈指のブナの天然林や、熊やカモシカが生息する豊かな自然に取り囲まれている。
- ④ 三面発電所、猿田発電所、奥三面発電所
- ⑤ 二子島森林公園・オートキャンプ場：三面ダム湖に浮かぶ二つの島を浮き栈橋で結び、湖面周辺を森林公園としたもの。オートキャンプ場でのキャンプ、釣り、サイクルボード等で遊ぶことができる。



- ⑥ 縄文の里・朝日：奥三面歴史交流館（交流館ウェブサイト及びパンフレットより抜粋）

奥三面ダムに沈んだ三面集落のかつての生活の様子や民具、遺跡から発掘された土器を展示し、自然や暮らしを伝えるための施設。また、まが玉づくり石器づくり、ヒツツ織りなど先人の知恵や技術が体験できる。

奥三面歴史交流館をはじめ、縄文時代の住居や水場等を復元した広場、縄文時代の植物を栽培・活用する縄文の森などの施設がある。

<施設概要>

- ・ 奥三面歴史交流館
展示施設、体験交流施設、整理
研究室等を備え核となる施設
- ・ 縄文広場
奥三面遺跡群の住居等の復元
- ・ 体験学習広場
縄文体験や交流ができる広場
- ・ 縄文の森
縄文時代の植物を栽培・活用
- ・ 体験農園
古代米やそばの体験栽培



<奥三面歴史交流館 常設展示内容>

奥三面遺跡群から出土した遺物と、奥三面集落が残してくれた民具を比較展示している。

奥三面集落の生活、民具など	ぜんまい小屋、機織り 奥三面の伝えてくれたもの 農耕・栽培、木材の栽培・加工 など
奥三面遺跡群	奥三面遺跡群について 縄文時代の住居、土器の変換 最古の狩人、縄文アクセサリー 土層断面 など



常設展示の様子

<奥三面歴史交流館 体験メニュー>

- ・ まが玉づくり ・火おこし ・石器づくり ・ヒヅツ織り
- ・ 土器づくり ・昔のおもちづくり
- * その他、季節ごとに体験イベントがある。

■漁川ダム諸元

形式	ロックフィルダム
堤高	45.5m
堤頂長	270.0m
堤体積	647,000m ³
総貯水容量	15,300,000m ³
流域面積	113.3km ²
湛水面積	110.0ha



ラルマナイ川（NPO 水環境北海道荒関氏提供）



白扇の滝(石狩東部広域水道企業団ウェブサイトより)→

■周辺施設

- ・えにわ湖自由広場
- ・えにわ湖（ダム湖）
- ・桜公園
- ・ラルマナイ自然公園（ラルマナイ川、ラルマナイの滝、白扇の滝、三段の滝）
- ・緑のふるさと森林公園
- ・市民スキー場



←えにわ湖でのE ボート競技風景
(NPO 水環境北海道荒関氏提供)

■ダム周辺の環境

札幌から約40分の至近距離にありながら、ダム周辺は自然が豊かで、家族そろって訪れる人も多い。また、ダムの貯水は、千歳川流域6市町、33万人の水道水源として利用されている。

漁川ダムが位置する恵庭市は、日本海からサケやサクラマスが遡上する地域でありながら、都市化の進展に伴う居住環境とコンクリートブロックに覆われた河川環境の悪化が懸念されていたことから、ダム周辺及び漁川流域の河川環境の保護に、市民自ら積極的に取り組む活動が見られるようになった。

■行事

- ・森と湖に親しむ旬間「漁川ダム見学会」
- ・えにわ湖慈しみフェスタ（ごみ拾い、耐水没性植物サリカの植栽）
- ・北の森21運動in漁川ダム
- ・Eボート大会

■活動団体等

ダム及び漁川流域を利用した活動は、官民がそれぞれの役割の中で相互に連携して行っている。えにわ湖慈しみフェスタは、官民が実行委員会を結成して取り組んでいるもっとも特徴的な行事である。

実行委員会の構成・後援団体でもあり、各行事に主体的に係わっている団体として、国土交通省石狩川開発建設部漁川ダム管理所・NPO水環境北海道・恵庭市町内会連合会・茂漁川親しむ会・漁川の水を守る会・石狩森林管理署・石狩東部広域水道企業団・恵庭市青年会議所・漁川ラブリーバー振興会などがある。これらの団体は、平成14年度

に策定した漁川ダム水源地域ビジョンにも参画している。

■その他特徴的なこと

- ・イメージキャラクター「いざりん」
- ・千歳川流域稚魚放流（サケ、サクラマス）
- ・石狩川流域300万本植樹
- ・川の体験学習



漁川・サケの稚魚放流（(NPO 水環境北海道 荒関氏提供）



漁川・水辺の楽校（(NPO 水環境北海道 荒関氏提供）

第3章 資源特性を活かした水源地域活性化の可能性検討

3-1 小国町全体のまちづくりからの視座

3-1-1 まちづくりの5つの柱

現在本町では、第三次小国町基本構想の理念に基づき、21世紀を展望する町づくりの戦略として「白い森構想」を推進していくことを基本姿勢としている。この構想は、町の優れた自然環境と地域資源を大切にしながら、計画的に保全・培養して、町全体を自然と人間の新しい共存関係の在り方を体験的に学習できる多彩な生活空間にしていこうとするもので、全町を「白い森公園」として形成するものである。

これを実現していくため、次の4つの柱で事業展開を図っていく。

1. 白い森の国ふるさと文化村づくり

小国町の美しい自然、広大な空間、豊かな生活技術。こうした小国町の特徴を、多様な人々とともに磨きをかけていくために、次の5つの交流ゾーンの整備を図っていく。

1) 白い森公園中央基地の形成

- 山村の快適さと都市の利便さを兼ね備えた多目的なふれあい空間の形成
- ・快適な居住空間の創出（あけぼの団地の整備／公共下水道整備／まち並みの景観形成／交通通信ネットワークの拡充）
- ・高齢社会に対応したサービス体系の確立（癒しの園の機能補完）
- ・交流空間のレベルアップ（白い森情報発信機能の拡充／移動体通信の拡充／道の駅インフォメーション機能の拡充／町民の森整備）
- ・健康の森“横根”と各交流施策等の連携強化

2) 朝日山麓交流ゾーンの形成

- 朝日山麓の地域資源を活用したふれあい空間の創出
- ・交流空間のレベルアップ（おぐに白い郷土の森整備／荒川リバーサイドパークとコミュニティの連携）
- ・新しい交流空間の創出（新潟県朝日村との広域交流路の整備／生活技術習得型交流空間の創出）

3) 飯豊山麓交流ゾーンの形成

- 飯豊山麓の地域資源を活用したコミュニティゾーンの形成
- ・交流空間のレベルアップ（玉川砂防林背後地整備／グリーンツーリズムの展開／小玉川コミュニティゾーンの形成）
- ・玉川自然観察学習林の整備

4) ぶな文化ふれあいゾーンの形成

- ぶな文化情報を世界に発信する白い森の国ふるさと文化村の拠点基地の形成
- ・ぶな文化プラザの機能整備（ぶな文化学習の砦の整備／学習・研究フィールドの整備／ぶな文化情報の受発信機能の整備）

5) 湖畔の森ふれあいゾーンの形成

- 横川ダム湖畔と大平峠一帯の地域資源を活用したコミュニティゾーンの形成

- ・多様な交流路の整備（市街地～ダム湖畔～沼沢のアクセス改良／叶水～飯豊町のアクセス改良／大平峠線の整備）
- ・新しい交流空間の創出（みどりと水の文化体験空間の創出）
- ・水源地域整備

2. 「森の学校」の機能づくり

山村に伝えられてきた生活技術、生活文化を基調とした教育環境や学習システムの構築を図りながら、山村を担う人材を育成する。

1) 新たな博物館機能の構築

- ・ぶな文化を世界に発信する拠点の形成（ぶな文化学習の砦の整備／新しい学習システムの構築／学習・研究施設の整備／新しい学習カリキュラムの検討／既存学習施設及び学習フィールドの連携・活用の検討）
- ・「小国学」を核とする生涯学習機能の充実
- ・多様な地域との交流を促進する事業の展開

3. 「森の仕事場」の創出と活性化機能づくり

小国に温存されている地域資源に立脚し、内発的な力による山村総合産業の創出を図っていく。

- 1) 内発的総合産業創出機能づくり（既存産業の経営基盤の安定強化／多就業を可能とする就業構造の転換／地域資源の発掘と活用を図る産業の創出）
- 2) 新たな商品開発機能づくり（異業種間の連携強化／市場調査・開拓による販路の確保／産業連携モデルの構築）

4. 「森の住宅」環境づくり

山村を取り巻く環境変化に対応しながら、山村が持つ多様な空間を生かした新しい居住空間の創出を図りながら、森林化社会を形成していく。

- 1) 快適な住環境づくり（計画的な土地利用と公共空間のバリアフリー／景観に配慮した市街地・山村の整備／高齢者専用住宅・公営住宅の整備）

これらの考え方は、平成10年に策定した「白い森の国おぐにの基本構想」に基づくものであり、今も変わらない姿勢である。さらに、この構想の背景は、昭和48年に樹立した「自然教育圏構想」にあり、その段階で整理した「中央総合レクリエーション基地」、「朝日山麓リゾート基地」、「飯豊山麓リゾート基地」の三つの交流基地の機能と空間、連携、交流などのあらゆる面でレベルアップしていくことを目指している。

横川ダム周辺については、「湖畔の森ふれあいゾーンの形成」として整理し、町全体のゾーニングの中の一つに位置づけている。したがって、横川ダム（堤体・ダム湖周辺）を活用してその地域周辺部の活力を高めていくことは無論であるが、町全体の中での新しい地域資源として位置づけ、それぞれのゾーンや事業相互に連携を深めながら、レベルアップを図っていくことが重要である。

3-1-2 横川ダムを活用した事業展開がまちづくりに与える影響

1) まちづくりの骨格的ゾーン整備への影響

昭和48年に策定された「自然教育園構想」から現在まで、本町ではまちづくりの骨格的ゾーンは変わっていない。しかし、その後「ぶな文化」を前面に打ち出した「ぶな文化ふれあいゾーン」や横川ダムの整備に伴って「湖畔の森ふれあいゾーン」を新たに設定している。

一方、ダム関連の事業により付け替えられた主要地方道川西小国線によって、ダム上流地域と町中心部との距離が大幅に短縮され、交通条件が一変した。

このように、ダム建設がまちづくりの骨格的ゾーン整備に対して既に大きな影響を与えている。

以下は、現在のまちづくり計画の骨格が定められた昭和48年の「自然教育園構想」の時の計画と、現時点までの状況の変化を示したものである。

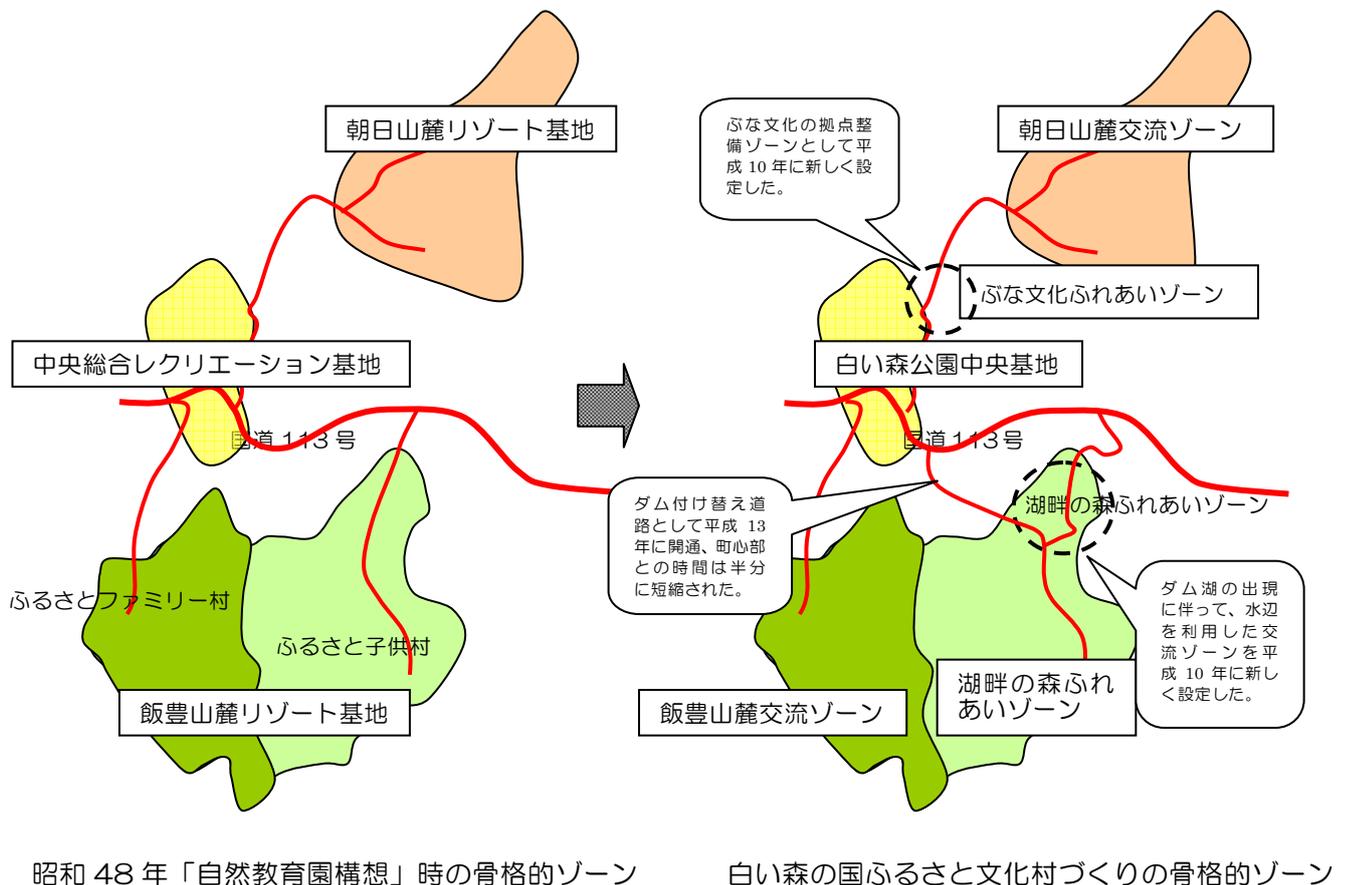


図 3-1 まちづくりの骨格的ゾーンの変化

骨格的ゾーンにおけるこの間の変化は、それぞれの地域で、整備目標に基づく整備が進められたことは勿論であるが、旧来の飯豊山麓リゾート基地エリアにおける横川ダムの整備は、これまで小国町に無かった広大な湖面と多様な水辺が一気に出現することとなり、この新しい環境をまちづくりの資源として活用することによって、町全体の骨格的ネットワークも変化する。このため二つのゾーンに区分した。

特に、ダム付け替え道路としてルート変更になった主要地方道川西小国線の開通は、「白い森公園中央基地」を始め、他の拠点地区との連携がしやすくなり、町民や来訪者の利用に対して、可能性は大きく広がったといえる。

今後の、まちづくり全体からみた当ゾーン整備に対して考えられる具体的な影響と可能性について以下に整理する。

(1) 拠点性の飛躍的向上

これまでの東部地区にも、自然や歴史・文化・民俗的魅力はあったが、そこを訪れるための目的となる拠点性が乏しかった。

今後は、当地区を訪れることを主目的とするか、あるいは途中立ち寄り型になるかは別として、ダム湖という訪れる対象がはっきりしたことによって、これまでより飛躍的に多くの人を訪れることは間違いなさであろう。それも、これまでのリピーターとは異なる人たちが訪れる可能性があるため、他のゾーンとのネットワークの強化によって、町全体への波及効果も高まることが期待できる。

それによって継続的に交流人口を増大させ、小国ファンを更に増やしていくためには、今後のハードとソフトのバランスの良い、効果的なインフラ整備が重要である。

横川ダムの周辺整備と、それらを活用した利活用ソフトの展開は、他の拠点エリアへも良い刺激としとして波及していく大きなきっかけとなる。

(2) 広域ゾーン形成と隣県ループ構想

町中心部や国道113号からのアクセス性の向上によって、湖畔の森ふれあいゾーンへの入込みが増えることは確実であるが、さらに主要地方道川西小国線を通して飯豊町の白川ダムとの連携が可能となる。これは両町にとって好ましいことであり、今後、町境をはさんだ広域のゾーン形成を目指すとともに、さらに山形県飯豊町と福島県山都町の県境付近の道路改良の促進に期待しながら、新潟県-山形県-福島県-新潟県のループ形成を目指して、提案していくことが望まれる。

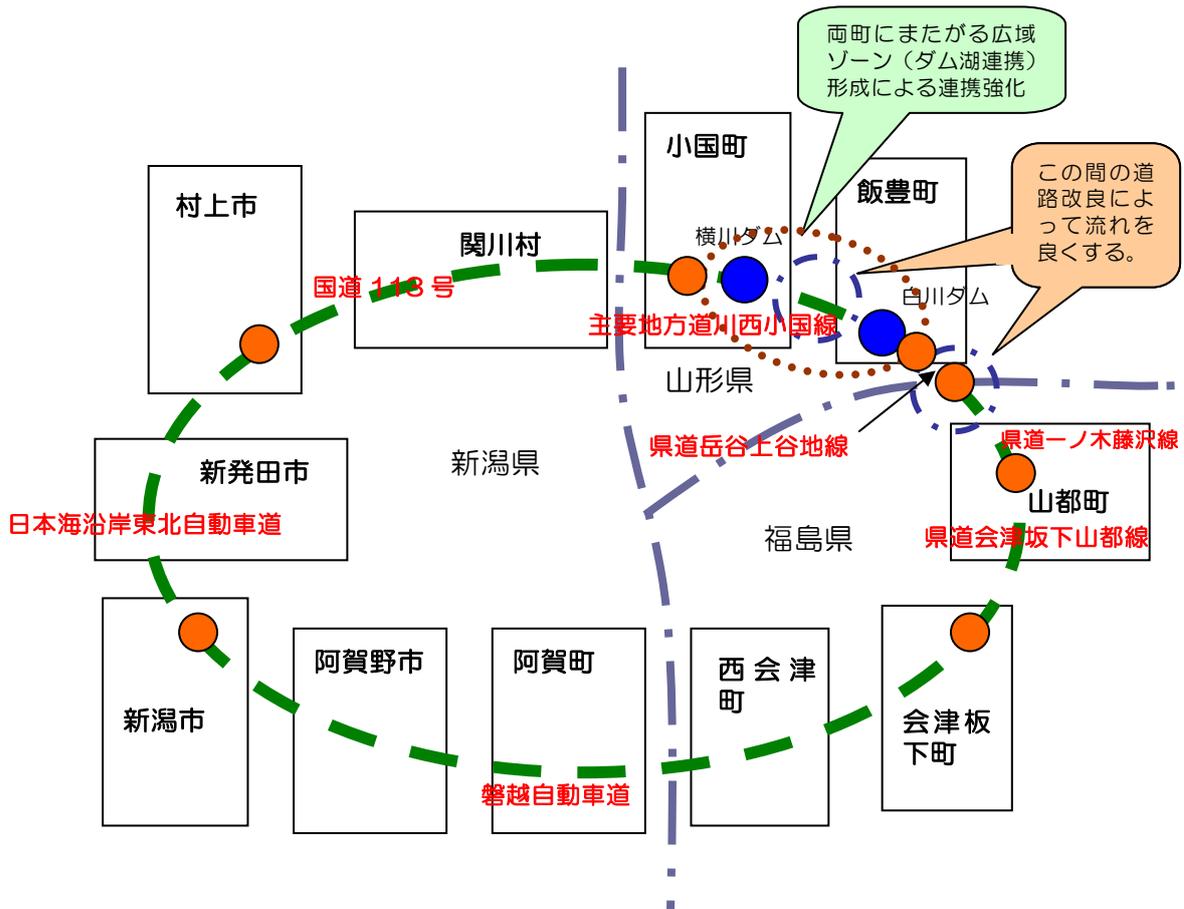


図 3-2 広域ゾーン形成と隣県ループ構想図

(3) 森林セラピー基地との連携

飯豊山麓交流ゾーンの温身平地区は、森林セラピー基地として認定され、今後の活用が期待されている。

そこで、この森林セラピー基地を利用する人たちを始めとして、飯豊山荘、川入荘、梅花皮荘などの宿泊利用者や日帰りレクリエーション利用者などが、森林空間だけでなく、全く環境の異なった広々としたダム湖や周辺の水辺も体験できるネットワークの構築が期待できる。

特に長期滞在者に対して、セラピーのメニューとして湖面や湖畔の活用は、森林との相乗効果をもたらすものとして期待できる。その意味でも、森林セラピー基地の多様性や付加価値付けにも貢献できる。

一方、ダム周辺を単なる日帰りや短期の観光、森林セラピー、レクリエーションなどの場として利用するだけでなく、交流居住が可能な地域として長期滞在者や半定住者を受け入れていくのも一つの方法になる。この方法については、後段で改めて検討を加えるものとする。

2) 今後のまちづくり施策への影響

次に、横川ダムの整備によって、今後まちづくりの施策を展開していく上でどのような影響があるのか。また、その影響を積極的にプラスの方向に誘導していくための施策はどうあるべきかについて以下に検討を行った。

表3-1 横川ダム建設に伴う影響とまちづくり施策への展開方向

関連する主な施策	横川ダム建設の影響	まちづくり施策への展開方向
公共インフラの整備	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム上流域の集落では、既に主要地方道の付替えによって道路も良くなり、町中心部との交通の利便性が高まった。また、合併処理槽等の整備によって水質の向上が期待でき、施設整備では、水源の郷交流館の整備により、都市と農村の交流促進による活性化が期待できる。 ・道路の改良によって町中心部との時間距離が半減したことによって、奥地感が無くなるとともに、住民が町中心部の公共施設や商業施設利用がしやすくなった。 ・ダム管理事務所に隣接して建設される情報交流館は、ダム本体の情報PRだけでなく、周辺の自然・歴史・文化等の情報発信や、人々の交流活動のサポートも行われる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通インフラの整備はプラス面が多いが、地元の商店等には、移転集落の人口減に加えて、町中心部への顧客の流出が懸念される。今後は、ダムを活かして交流人口が増やせるような施策展開が必要となる。 ・また、主要地方道川西小国線は、町境付近はそのままの状態であり、今後の白川ダムとの連携や、福島県側からのルート開通による、新潟県を含めた広域3県周遊ルートの開発など、まちづくりの新しい展開も検討する。 ・横川ダム情報交流館を町全体の情報PR施設としても活用できるよう、今後横川ダム管理事務所との連携を強化し、ダムへの来訪者に対して町の魅力と新しい情報を常に発信できるようにする。また、案内人や民話の語り部などが常駐して活動できるシステムを提案していく。
人口減少対策	<ul style="list-style-type: none"> ・東部地区の人口減少は、ダム建設による集落移転で一層の拍車がかかってしまった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダムによって生れた新しい環境を活かして、活発に人々が集い、交流する状況を作り出すことによって、ダム上流地域への交流居住やU、J、Iターンを促す支援策が必要である。
集落機能維持対策	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少と高齢化、産業構造やライフスタイル・意識等の変化が、集落機能の維持を困難にさせている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・この課題は、ダム上流地域だけの問題ではなく、全町あるいは全国共通の課題となっている。ダム建設によって生れる環境を利用して、様々な活動が生れ、地域に活力が戻ることによって、今後の集落機能維持も活性化するよう、長期的な施策誘導が必要である。
内発的地域産業の展開	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖及び湖畔周辺を訪れる人々が増えることによって、観光産業だけでなく、特徴のある内発的地域産業の展開の可能性も高まってくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の資源・技術・人材を活用し、既存業種の枠を超えた地域産業の連携・協力による複合的展開に対する支援を行っていく。
交流人口の拡大	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム建設によって生れる広い湖面と多様な水辺は、周辺の自然や歴史・文化環境と相まって、訪れる人々がこれまでより増加する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単に水辺の環境を提供するのではなく、そこで地域特性に根ざした活動が常に行われているような、魅力づけを行っていくための支援を積極的に行う。 ・特に、それをリードする人材の育成や地域文化の伝承活動等への支援を行う。

		<ul style="list-style-type: none"> ・交流人口の拡大から一步進めて、交流居住人口の受け入れを検討する。
<p>文化的資源の保全と継承</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・横川ダム建設に当たって、水没集落の歴史や文化、民俗などが詳細に調査されて、これまで地域の人々も知らなかった文化的資源が多く明らかになった。 ・向原遺跡など、水没エリアでは詳細な発掘調査が行われ、多くの遺物も発見されて、この地域の縄文時代の様子が明らかになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム建設に伴って明らかになった文化的資源の保全は、ある程度はダムの情報交流館で情報展示が行われると考えられるが、モノや情報だけでなく、残された地域における地域文化そのものの継承や、教育・生涯学習の場としての活用などに対する施策展開が必要である。
<p>安全安心な社会基盤</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・横川ダムの建設によって、水害の危険性は大きく改善され、過去の羽越災害を経験した下流流域では、水災害に対する安心感は大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・横川ダムの恩恵は、下流流域全体の住民が享受するものであり、ダムの完成に伴って、流域連携を強めていく良い機会となる。 ・一方、水害への備えはダム機能だけでは不十分であり、上流域の森林の保全に対して、下流流域の住民がその重要性を意識し、上流森林の保全のための支援や活動を広げていく施策展開が必要である。

3-2 東部地区の「集落機能」の維持・保全からの視座

3-2-1 東部地区の「集落機能」の維持・保全に対する課題

ダム上流地域の集落機能の現状については、アンケート調査やヒアリング調査の結果を2-1-2で整理した。ここでは、その結果に基づいて「集落機能」の維持・保全に対する課題を下表にとりまとめた。

表3-2 「集落機能」の維持・保全に対する課題

	集落機能維持の現状	課題
集落機能の維持	現在参加率が50%を切っており、既に維持が困難になっている集落機能	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者世帯の雪下ろしや、除雪に対する助け合いができなくなっている。 ・結い（ヨイ、ヨイナシ）の精神に基づく相互活動は3/4以上が参加していない状況にある。
	現在は過半数の住民が参加して行われているが、将来的には維持が困難と予測されている集落機能	<ul style="list-style-type: none"> ・冠婚葬祭における助け合い、祭りや伝統行事への参加などは現在まだ半数以上が参加して行われているが、将来的には維持は極めて困難と予測されている。
集落機能（環境）の保全	現在参加率が50%を切っており、既に維持が困難になっている集落機能	<ul style="list-style-type: none"> ・共有地や山林などの管理（下草刈りや枝打ち）への参加は、既に20%を切っており、荒廃が進んできている。 ・神社・仏閣や集落の共同財産の維持管理は、既に実施していない集落もあり、半数以上の住民は参加していない。
	現在は過半数の住民が参加して行われているが、将来的には維持が困難と予測されている集落機能	<ul style="list-style-type: none"> ・農作業に関する共同作業や助け合いは現在半数強の住民が行っているが、将来的には半数の集落で維持が困難と考えられている。 ・集落内道路や公共施設等の維持管理は半数程度の住民が参加しているが、既に実施していない集落もあり、維持は極めて困難と予測されている。
その他共通事項	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢化で若者が少なく、集落機能の維持はほとんど高齢者が担っているため、このままでは継承ができない。 ・町外から新たに転入してきた人たちは、集落の共同作業にかかわらない人が多く、協力も強くは呼びかけていない。 ・集落のほとんどの世帯が農業を行っていたころと違って、地縁より職域や同世代との関係が強くなっている。 ・特に若年世代で、これまで集落で行ってきた除雪活動や公共施設等の維持・管理について、今後は行政の支援を期待する声が多く聞かれる。 	

これらの課題は、明らかに急速な人口減少と少子高齢化、集落内の業態の変化が大きな要因となって、集落機能を「立ち枯れ」状態に陥らせている。さらにこうした傾向に拍車がかかりやがては立ち行かなくなると感じている人も多い。そのことは、集落の互助活動が機能なくなると同時に、集落が消滅することに直結している。

そこで、新しく生れる横川ダムという大きなインパクトを一つのきっかけとして、ダム上流地域に新たな魅力付けを行いながら、集落機能の保全を模索し、行動に移していかななくてはならない。いわばダムが「ムラ保全」に果たしていく役割という視点で整理するものである。

3-2-2 ダムに関連する事業展開が「集落機能」の維持・保全に与える影響

ダム上流地域における「集落機能」の現況と課題については表3-2に整理した。ここでは、ダム周辺における事業展開が、ダム上流地域の集落機能の課題に対し、どうすればプラスのインパクトを与えることができるかという視点から検討を試みた。

集落機能の維持・保全には、活動を継承する世代が存在することが前提となる。しかし、現在の多くの集落では、継承すべき世代の人口が少なく、現状で従来の集落機能を維持していくには、あまりにも負担が大きく現実的ではない。とすると、今後は、いくつかの集落が集まった新しい圏域を検討するか、新たなU・J・Iターンなどの若年層の転入を期待するか、集落外からの支援やボランティア組織などに頼るしか方法がない。したがって、これまで行われてきた集落機能を全て満足するような状況にはなく、今後は、必要最小限の集落機能を残しつつ、現在の時代背景と集落の現状、将来の地域づくりを見通した、新しい視点からの集落維持機能と新しい集落圏域も検討する必要がある。

一方で、今後必要となる、ダムに関連する公共施設や公園等の維持管理や運営について、地域でどう取り組むかが課題となっている。

このような状況を踏まえて、今後のダム周辺における事業展開が、集落機能に及ぼす影響としては、以下のように考えられる。

- ・既存集落内の施設や共有財産の維持管理も難しくなっている状況で、ダム周辺の事業運営や公共施設等の維持管理などの新たな負担増は、事業収入や管理収入が見込まれたとしても、現状の集落単位では難しい。
- ・これまでの集落単位を超えた圏域との協働が必要となることから、これを契機に発想を転換して、新たな集落圏域構築へと広げられる可能性がある。
- ・町民全体を対象とし、ダム上流域の人たちを含めて新しい組織を立ち上げることによって、町全体のまちづくり活動の輪に広げていくことができ、それによってダム上流域のまちづくりの活性化にもつながっていく。
- ・ダムに関連する事業展開を成功させることによって、若年層のU・J・Iターンを促すことも可能となって、ダム上流地域の定住人口を増やすことにつながる。
- ・現在の集落活動を引っ張っているのは、ほとんど高齢者層であるため、ダム関連の事業として、ダム湖周辺の景観保全や上流部森林の保全、地域文化の保全と継承、新しい地域産業の創出など、若い人たちが中心となって推進すべきテーマを積極的に取り上げていくことによって、世代間の空白を埋めていくことが可能となる。

3-3 東部地区の未来の夢実現のために

3-3-1 取り組むべき課題

津川村と小国町が合併した昭和 35 年から今日まで、ダム建設に関係なく、東部地区から移転して行った人たち、ダム建設によって東部地区から移転して行った人たち、ダム建設後も東部集落に残った人たち、町外から新たに東部地区に移り住んだ人たちというように、この 50 年近くの間には地区の人口の動態は大きく変容してきている。

昭和 35 年には 1,472 人を数えた人口も、平成 17 年には 424 人となり、そこからダム関係者を除くと、現在は当時の 1/3 以下にまで減少してしまっていることになる。

昭和 58 年に全国農林水産祭むらづくり部門で天皇杯を受賞した頃でも既に 700 人を割っていた。

受賞の最大の理由は過疎化の急速な進展に加えて、38 豪雪や羽越水害などによる大打撃を受けつつも、住民が結束してむらづくりに知恵をしぼり、協力し合って活動を続けてきたことに対する評価であった。

その後、ダム建設によって 2 つの集落が移転し、東部地区のコミュニティ活動は大きな打撃を受けることになった。さらに少子高齢化の急激な進行は、地域住民の生活の場を支える集落基盤を維持していくことも難しい事態を招いている。

そこで、これからの東部地区が新たに生れるダム湖及び湖畔の環境を活かしながら、未来への新しい夢を抱いて地域が連帯し、発展していくために取り組むべき課題を「生活の舞台をいかに豊にしていくか」という視点に立って、大きく 3 点にまとめてみた。

一つ目は、現在の東部地区の地域づくりにとって最も重要なことは、かつて日本一に輝いたコミュニティの熱気ある活動エネルギーに負けないような、あたらしいコミュニティ活動の再構築を図ることである。

二つ目は、新しく出現するダム湖を含めて、周辺の農村景観や多様な自然資源を再評価し、東部地区全体のポテンシャルを見直すことである。

三つ目は、見直した東部地区の新しい魅力を積極的に再発信をしていくことであり、その発信すべき情報の精査と発信する手法を確立することである。

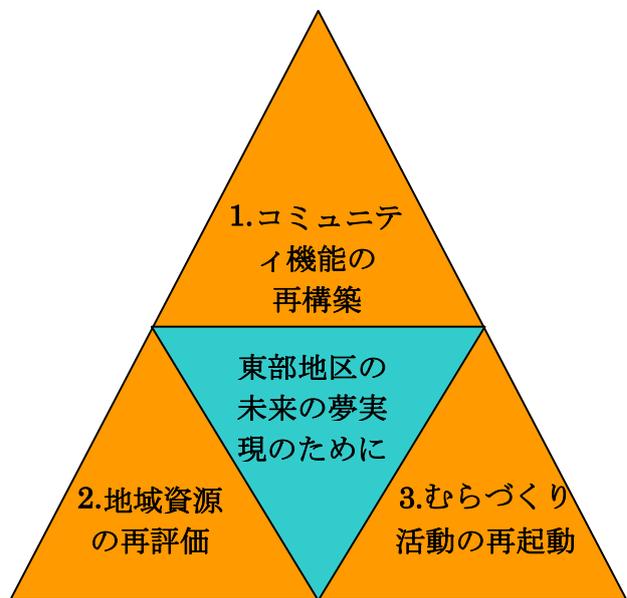


図 3-1 東部地区の未来の夢実現のために取り組むべき 3 つの課題

1) コミュニティ機能の再構築

天皇杯を受賞したコミュニティが、その後のダム建設や人口減少、少子高齢化による人口構成の変化など、地域コミュニティにとって非常に厳しい環境の中で、以前のような地域づくりへの熱い想いと、団結力を再構築するのは容易なことではない。

そこで、未来に向けてのコミュニティは、過去と同じ方法ではなく、状況の変化に応じた新しい手法が必要になると考えられる。

以下に、これからのコミュニティ機能の再構築の考え方についての提案を示す。

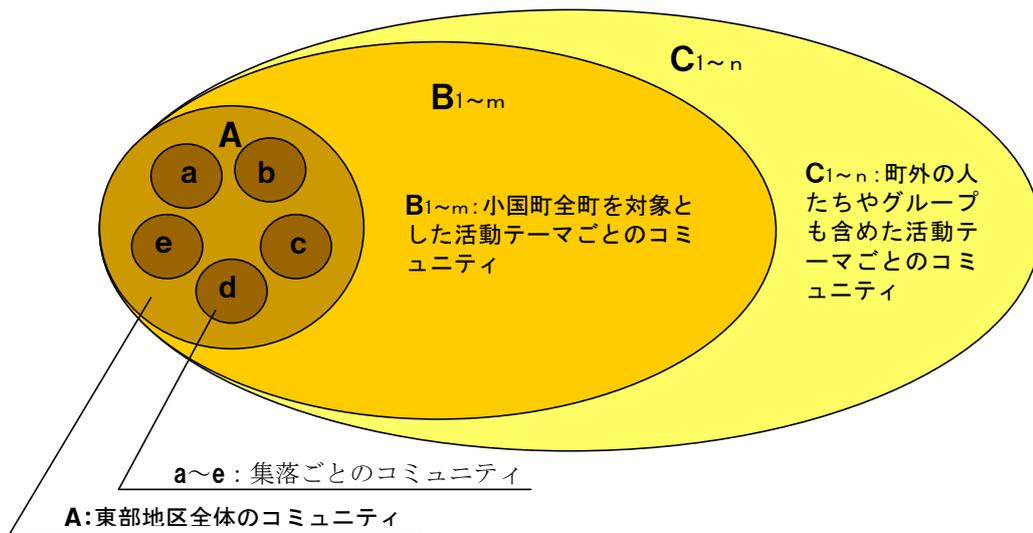


図 3-2 新しいコミュニティの考え方

これまで、aとAのコミュニティが自己完結的に存在していたが、今後は、ダム湖及び湖畔の広大な地域が新たに加わることによって、東部地区だけのコミュニティで対応するのは困難と考えられる。したがって、地域の年中行事や共同作業など昔から地域の共同体で行っていたものは、これまで通りの地域コミュニティで分担し、ダム湖を含めたまちづくり活動などについては、それぞれのテーマごとに、町内全域でサポート体制をつくって協力していく、ゆるやかな新しい広域コミュニティ**B_{1~m}**を創造していく。

また、町外の横川流域の地域や、近隣市町村、さらに全国の小国ファンなども加えて、目的ごとに活動する広域交流コミュニティ**C_{1~n}**の構築も、リピート効果や交流人口拡大効果が期待できる方法である。

これらの具体的方法等については、後段の実現のための活動方策で述べる。

2) 地域資源の再評価

(1) 地域の資源を改めて見直す

横川ダムの建設に伴って、東部地区の市野々と下叶水の 2 つの集落が移転したことを受け、横川ダム工事事務所が、移転者や有識者等で構成する「市野々・下叶水歴史保存会」を立ち上げ、この地区の自然、歴史、文化、民俗などを詳細に調査してとりまとめた「横川 ふるさとへの想い」を刊行した。

この中には、歴史ある集落の移転に至るまでのドキュメントをはじめ、地区の自然や四季、人々の日常の暮らしや食事、年中行事、産業や交通の変遷、史跡、歴史的史実や言い伝え、民話など、いわゆるこの地域の資源が網羅されている。

これらは、改めて調査されたことによって、住民以外の一般の人々にも明らかになったことであり、実際に住んでいた人々も新たな発見があったものと考えられる。

このような資源は、改めて整理されたことによって、初めて光が当てられて評価される場合が多い。これを機に東部地区の資源性を、新たに生まれるダム湖や周辺の関連施設も含めて、多様な視点で見直すことが重要である。

(2) 再評価の視点

次に、地域資源を再評価する視点にはどのようなものがあるのかについて、以下に検討して表 3-1 に整理した。

表 3-1 地域資源の再評価の視点

再評価の視点	対象となる事象と活かし方
学習環境の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・自然と共生してきた人々の知恵や自然に対する作法などを学び、これからの持続可能な社会への暮らし方に活かすための拠点づくりを推進する。 ・この地域には、歴史ある個性的な基督教独立学園高等学校があり、開設者の鈴木粥美氏がこの地にこだわって学校を創設したのも、教育環境としての潜在性があったからであろう。 ・小国町が平成 12 年にまとめた、「小国町における新しい学習環境創出に関する調査研究」においても、小国町の豊かな自然的・社会的・人的資源を広く学習環境として捉え、人づくりやまちづくりと連動した学習環境の整備と、そのプログラムやシステムのあり方を提案している。
観光や交流の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・新しいダム湖の環境と、昔からの地域の自然や歴史文化を融合させた、魅力ある交流の場を生み出すことによって、交流人口の増加や地域の活性化に役立てる。 ・ダム本堤付近に整備される予定の広報交流施設は、横川ダムそのものの PR や情報発信だけでなく、ダム周辺地域の自然、歴史・文化、民俗などを広く紹介する、インフォメーション施設でもある。従って、この施設の整備に当たっては、来訪者をダム湖畔や上流地域へ誘導できるようなわかりやすい情報案内や、地域住民と来訪者が交流しやすい交流広場の設置など、交流人口の拡大につながるような整備を期待したい。

美しい景観づくりの視点	・背景の飯豊山系をはじめとする自然の山々、そこに源を発する清らかな源流、のどかな山村の田園風景、今も残る歴史的な街道、劇的な変化を見せる秋の紅葉や冬の雪景色、さらにはダム建設によって生れる広々とした湖水や多様な水辺空間、ダム本堤の威容、付替られた新しい道路・橋梁など、多様な魅力ある景観を有しているこの地区のポテンシャルを、一層高めるまちづくりを推進する。
多様な活動をつなぐ視点	・自然や山岳の案内、雑穀の生産、山村体験の受け入れ、子供たちの体験学習の指導や交流など、多様な活動が個別のグループごとに行われている。地域資源を有効に活かす手段として、これらの活動は重要であり、今後、新たな人材も加えながら、活動の連携ができるよう、つないでいく作業が必要である。

3) むらづくり活動の再起動

東部地区が取り組むべき課題の根底にあるものは、地域の人口減少と高齢化である。これは、全国の農山村の共通課題となっている。

そこで、全国のおよそ半分の農山村では、その打開策の一つ、あるいは柱として、交流人口の拡大を目指している。

東部地区でも、もちろん交流人口の拡大は重要なテーマである。当地区では、その方法として 3-1-2 (3) の「森林セラピー基地との連携」で述べたように、長期滞在あるいは半定住者を増やしていくという考え方を検討したい。これは、これまでの「交流人口」から一歩進めた「交流居住」※¹⁾への拡大である。

当地区が「交流居住」に有利な条件にあるのは、「森林セラピー基地」と連携しながら、その機能を分担し、多様なセラピーメニューを体験できる新しい魅力づくりが可能であり、むらづくりの再起動のテーマにもなる。

そこでは以下のような流れのシナリオが考えられる。

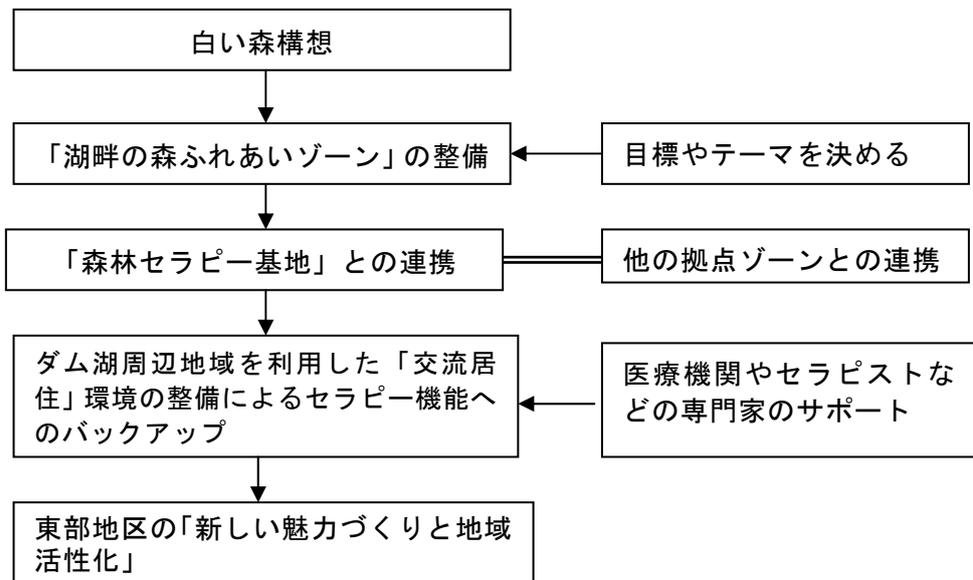


図 3-3 東部地区のむらづくりの再起動シナリオ案

これを東部地区の新しい魅力として発信していくことが、まちづくりの再出発になるのではないだろうか。

※¹⁾ 「交流居住」：平成 17 年 3 月に総務省自治行政局過疎対策室が行った「過疎地域における交流居住に向けたニーズ分析に関する調査」では、都市住民が都市と田舎に滞在拠点をもち、双方を仕事や余暇で使い分け、地元の人たちとの交流を楽しみながら生活する新しいライフスタイルを前提とした長期滞在の総称として下記のように定義している。

(1) **ちょっとだけ田舎暮らし**：田舎ならではの生活体験や自然体験、地元の人たちとの交流を目的に気に入った田舎を年に数回、あるいは毎年繰り返し訪れる田舎暮らしのかたち。1 回あたりの田舎滞在時間は日帰り～2 泊程度で、宿泊にはホテルや旅館、民宿など既存の滞在施設を利用することが中心。

＜基本的なイメージ＞

米作りの作業（田植え、草取り、稲刈り）など農業体験やお祭り・年中行事などの生活文化の体験、スキーやハイキングなどのスポーツを楽しむ生活。

(2) **少しじっくり田舎暮らし**：仕事や技術の習得などを目的とし、一定期間田舎で生活する田舎暮らしのかたち。田舎滞在時間は、数週間～数ヶ月と目的によって幅がある。宿泊には、ホテルなどの既存の滞在施設のほか、企業が用意する社宅や寮、関係者の自宅でのホームステイなどが中心。

＜基本的なイメージ＞

染色や織物などの伝統技術習得のための弟子入りや、冬季のスキー場、夏季の山小屋や民宿などで住み込みで働く生活。

(3) **ゆるゆるのんびり田舎暮らし**：仕事や教育など日常生活は都市で行ないながら、余暇時間の多くを田舎で過ごす田舎暮らしのかたち。週末に都市と田舎を行き来するタイプと、避暑・避寒・療養などで滞在時間が 1～3 ヶ月程度と長く、行き来する頻度はあまり高くないタイプがある。宿泊は、貸家や持ち家、リゾートマンション、湯治用の温泉旅館などが中心。

＜基本的なイメージ＞

都市では集合住宅に住み、田舎に所有するセカンドハウスに金曜の夜から車で出掛け、土日は田舎での暮らしを楽しみ、日曜の夜に都市へ戻る生活。あるいは貸し別荘を夏や冬に 1 ヶ月程度借りて滞在する生活。

(4) **どっぷり田舎暮らし**：仕事場も生活の場も田舎に置き、用事があれば時々都市の住居（こちらがセカンドハウス）を利用するもので、都市の滞在時間よりも田舎での滞在時間が長い田舎暮らしのかたち。

＜基本的なイメージ＞

田舎の家でホームページの制作や翻訳、執筆活動などの仕事をし、打合せなどで都市に出掛ける生活。あるいは退職金で田舎に住居を構え、年に数回、都市の家に暮らす生活。

「交流居住」の考え方では、例えば森林セラピーや、自然との共生の知恵を学ぶという目的で滞在する場合、(3) の「ゆるゆるのんびり田舎暮らし」が該当すると考えられるが、東部地区では、田舎暮らしを楽しむレベルから、心と体の健康回復や生き方そのものを変えていく学びの場として、その機能を発揮できる潜在性を有している。

東部地区の新たなむらづくりを再起動すに当たって必要なことは、この潜在的な可能性をいかに引き出していかにかかっている。

3-3-2 実現のための活動方策

東部地区の現状の課題を克服し、新しい未来を切り開いていくために、必要と思われる活動として、次の3つの活動を挙げ、それぞれについての方策を検討する。

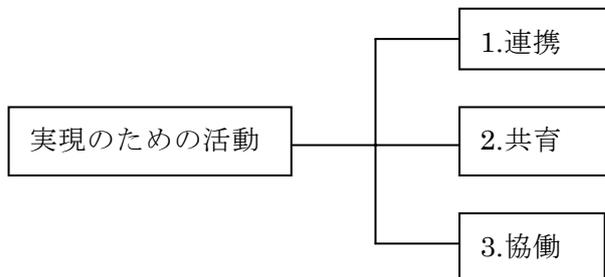


図 3-4 新たな未来実現のための3つの活動

1) 連携

当地区にとって必要と思われる活動のうち、「連携」には、①人の連携、②集落の連携、③施策の連携、④組織の連携、⑤活動の連携、⑥地域の連携が必要である。以下に具体的な活動内容の提案を行う。

表 3-2 連携の種類と概要

連携の種類	概要
人の連携	日常生活や集落活動は、あらゆる面で人の連携により成りたってきた。今後の地域づくりには、かつての東部地区のように人々の強い連帯で結ばれた活動が望ましいが、現状では当時の再現は困難と思われる。そこで、無理な連帯を強いるのではなく、もう少し緩くそして広い連携を目指して、多様な人々が集えるしくみを構築するのが望ましい。
集落の連携	資源管理や生産補完、生活扶助などで果たしてきた集落機能を維持していくために、個々の集落完結型から、個別のテーマや住民意向によるゆるやかな連携を進めていくことが必要である。
施策の連携	ダム建設に伴う水源地域に対する国や県のサポート、それらを取り込みながら、地域の特性に合わせた具体的な事業展開を行う町が、水源地域の将来像が見えるような効果的な施策を講じる必要がある。そのためには、国・県・町が整合性のある施策を講じるために連携する必要がある。
組織の連携	まちづくりや地域のイベントなどを推進している組織は町内に多い。東部地区だけに限らず、ダム湖周辺地区を町の白い森構想の一つの拠点としてサポートしていくために、関連する組織の連携が必要である。
活動の連携	それぞれのテーマに沿った活動を展開しているグループが東部地区という切り口でお互いに協力・連携しながら、その環を広げていくことが望ましい。そしてそれが地域全体の活動として日常化されるように育てていくことが重要となる。
地域の連携	東部地区だけの活動であっても、常に情報を発信しつづけることによって、町内の他域や、全国の同じような地域、さらに全く環境の異なる都市域とのネットワークが少しずつ広がってくる可能性があるため、そうした視点での取り組みが重要である。

2) 共育

東部地区の未来を切り拓くためには、まず、地域のことを良く知り、地域の歴史を、大地の記憶として継承していくことから始める必要がある。そして、それらを史実としてまとめることや学ぶことはもちろん重要であるが、それらを実態の伴った活動として継承していくには、古老から学んだり、お互いが情報交換しあったり、親が子供と共に実践したりという、地域内での縦横の共に学びあう共育環境をいかに実現できるかがポイントとなる。

3) 協働

協働には、行政と住民や企業、学校などによる異なった立場の人たちが協働する場合と、目的を同じくする地域住民同志の協働、地域外も含めた広域の人たちとの協働などがある。もっと小さな単位では家庭内の協働がある。

地域の将来に夢が持てるまちづくりを行うためには、これらの協働という活動が重要となる。

当地域に必要な協働活動は、地域住民の間での協働と、地域住民と地域外の人たちが連携した協働で、3-1-1のコミュニティ機能の再構築で述べた、新しいコミュニティにおける活動形態の重要な要素である。

ダム湖周辺地域を含めた東部地区のまちづくりは、東部地区全体の組織である東部地区振興協議会が中心となって推進することが望ましいが、東部地区にとって、既存集落での協働作業と新しく加わるダム湖周辺における活動を全て担うことは現状では不可能である。

そこで、ダム湖周辺に関しては、町全体の中の拠点施設の一つとして、町内外を問わず、活動の目的ごとに協働体をつくって、それらが連携していくための中心となるネットワークの要を官民の協働で立ち上げることが望ましい。

事例に見る恵庭市の漁川ダムを中心とする水辺空間の活動でも、多様な市民団体が、一つの目標（水と緑のやすらぎプラン）のもと、それぞれが歩調を合わせて活動を行っている。

3-4 地域資源の保全と有効活用のあり方

3-4-1 自然資源の保全と活用

1) 水源地域の森林の保全

横川ダムの集水面積は113.1 K m²に及び、そのほとんどが森林に覆われている。この森林は、降雨や融雪による水を貯え、下流流域の人々の暮らしや産業を支えるための水源を確保する重要な役割を担っている。

横川ダムの目的は、洪水調節、工業用水の確保と供給、渇水期の流量の確保、水力発電などであるが、こうした機能は、流域の森林が良好に保全されることによって、一層効果的に果たされていくものである。

したがって、今後とも水源地域の森林を保全し、その機能を十分果たすことができる健全な状態に誘導することが重要である。

そのためには、町として国や県と連携しながら水源地の森林整備のための事業展開に努めるとともに、そうした事業への参画を地域住民だけでなく、町民・県民・NPO団体等、多様な主体がかかわる仕組みをつくる必要がある。

2) 珍しい植物や群落、生物の保全と活用

ダム水源地域には、ブナ林やミズバショウ、イワカガミ、フクジュソウの群生地などの自然の植物群落のほか、市野々の飛泉寺の大銀杏や大石沢ブナ植物群落保護林など保全すべき群落や古木が多く分布している。また、溪流にはカジカやイワナなどの溪流魚、森にはクマやカモシカなどの大型哺乳類、里山や草地にはギフチョウやチョウセンアカシジミなどの昆虫等豊かな生物相が分布している。

ダム水源地域のポテンシャルを高めるためには、これらの環境を保全し、良好な生き物との共生空間をアピールすることが重要である。

そのためには、ただ自然のまま放置するのではなく、溪流の水質保全や里山の多様性回復、自然素材による水路の整備、水辺のビオトープの維持管理などが必要である。

3) 自然景観の保全

自然景観の保全には、直接自然に手を加えて改変したり、破壊したりしないということはもちろんであるが、自然景観を損なう最も多いケースは、その視界に不似合いな人工物ができてしまうことである。

当地域では、背後に雄大な飯豊山系を望み、周辺は人工物がほとんどない山林が多い。したがって、自然景観の保全には、これらのスカイラインを遮るような構造物や、不調和な色彩を使った建造物を作らないことと同時に、田園景観や集落景観が周囲の自然景観を引き締め、全体として美しい風景を作り出すような配慮が必要である。

3-4-2 人文資源の活用

1) 大地の記憶の継承として遺跡や史跡の情報発信

縄文の昔から、それほど周囲の自然環境が改変されていない当地区においては、現在の暮らしと過去の暮らしが同じ空間の中で、時間の変化だけが積み重なってきたことを実感しやすい。それが、以前はその場所がどんな場所だったのか想像がつかないくらい改変された市街地や住宅団地では、遺跡が出て当時の暮らしぶりの実感がつかめない。

その意味で、当地区の遺跡は住民にとっても来訪者にとっても価値が高い。したがって、提案している学習環境を構成する一つの要素として、これらの遺跡や史跡の姿を広く情報発信するとともに、地域内での情報共有が望まれる。

2) 上杉鷹山の教えの再構築による一村一品的産業起こしの勧め

この地域が非常に貧しかった時代、上杉鷹山は、それぞれの地域に副業として、その地域に適した作物や工芸品等の生産を奨励した。その施策のおかげで、米沢藩は窮地を脱したことは有名である。この鷹山の教えを現代風に再構築し、地域の活性化につなげていく施策を講じるとともに、集落ごとに最低一つの自信作をつくりだす取り組みを行う。

3) 越後街道黒沢峠の活用

江戸時代を経て明治時代まで、多くの人々に利用された越後と米沢とを結ぶ街道が越後街道である。黒沢峠はこの間にある十三峠の一つで、地元の黒沢峠敷石道保存会と東部地区振興協議会によって維持管理され、往時の敷石が歴史的街道の面影を残している。百数十年前にはイザベラバードが越後から米沢に向かう途中にこの峠を越えて市野々に宿泊している。彼女の日本奥地紀行に当時のこの地区の暮らしぶりが詳しく紹介されており、当時の厳しい生活ぶりを知ることができる。

この街道は、歴史的価値があると同時に、自然にも恵まれた静かな山道で、日常を忘れて癒される空間としても有効である。毎年10月には黒沢峠祭りも開催され、楽しみながら往時を偲ぶことができる。ゆっくり歩くことの素晴らしさを感じることができる歴史街道としてもっと有効に活かしたい。

4) 大銀杏のシンボル性のアピール

飛泉寺の大銀杏は、元の位置から100mほど移植されたが、ダム湖畔の広場に市野々のシンボルとして残された。市野々に住んでいた人々にとって、この大銀杏は最も親しまれた思い出深いふるさとの木であったはずである。この地を去った人たちが、戻って再び出会うことができる唯一の市野々の生き証人である。

したがってこの広場は、将来市野々に住んでいた人たちのよりどころとして、大銀杏と語るメモリアル広場として整備し、そのシンボル性を強くアピールする。

5) 民話の里としての情報発信

この地区の大きな特徴の一つが、豊富な民話や伝説である。当初から計画にあった民話の里構想のコンセプトは、この水源地域の大きな目玉として活かしたい。

拠点となる施設は、新たに建設しなくても、空家になった民家や、叶水基幹集落センターや水源の郷交流館を利用するなど、方法はいくつか考えられる。重要なのは、活字

資料として残すだけでなく、地元の語り部が語ってくれる状況を継続していくことである。

そのための語り部の育成が必要であり、語り部学校として町内外にも広く呼びかけて活動を始めることが望ましい。

3-4-3 特産品や伝統技術の活用

1) つる細工や木工芸等の伝統技術

つる細工などの伝統技術によってつくられる自然素材の製品は、単なる土産品としてだけではなく、昔は日常で使われる道具や器であったように、優しさ・癒し・健康・暖かさなどを求める自然志向の時代には、再び需要が高まってくると考えられる。

さらに、今は離村した赤沢集落は、嘉永年間（1800年代）に木地師が移住してその技術を生かしてきた集落であった。

今後の地域活性化に活かしていくためには、これらの伝統技術を、地域全体の活動に結び付けていく、つまり民話の郷やセラピーロードのシンボルグッズや、集落ごとの特産品メニューの一つとして売り出していくなど、新たな展開を加えていく。

2) 安心安全な健康食としての食材や郷土料理

健康志向の現代には、必ず話題となる健康食として、この地域の自然素材から生れる食材や郷土料理に注目したい。そして、ここを訪れるとホンモノを食べることができるという場を、農家民宿と併設するなどし、エコツーリズムやグリーンツーリズムのメニューに組み込むなどの活用が考えられる。この場合も食や料理を単独ではなく、何かの活動とつなぐことが重要である。

3) わらびを原料とした商品としての付加価値付け

3-2-2 で述べた上杉鷹山の施策にちなみ、この地区では、わらびに徹底的にこだわり、観光わらび園だけでなく、わらびを原料とした多様な製品・食品の開発を行って、地域の産業に育てていくことが望まれる。

4) おいしい米や雑穀の産地

当地区の主産業は農業であり、主力の米や最近生産が伸びている雑穀も、「安心・安全」や「健康食」などの地域統一イメージに合ったものとしてブランド化していく。

特においしい米は魅力があり、農家民宿で、健康食の郷土料理とあわせて提供すれば、それだけで集客効果がある。

3-4-4 その他資源の活用

1) 森林セラピー基地と連携した水辺の癒し空間活用

小国町では南部地区の温身平が、森林セラピー基地に認定されたが、町としてはその魅力を高めていくために、基地以外とのネットワークの在り方も検討している。当地区は、広い湖面と水辺空間さらに黒沢峠など、ブナ林内を歩く温身平の森林セラピー基地とは異なったタイプの癒し環境を提供できる。

したがって、この森林セラピー基地を地域活性化のために活用する方策として、町内の異なった癒し環境をネットワークし、来訪者に体験してもらうことが効果的であり、そのためのメニューの開発が求められる。

さらに、セラピー効果を高めるための、医療機関との連携、長期滞在が可能な宿泊施設や半定住型の「交流居住」を可能にするなどが効果的である。

2) バイオマスや雪など自然エネルギーを利用したコミュニティ構築

当地区の自然的特性である森林面積の多さと、雪の多さを活かして、暮らしの中に森林バイオマスや雪のエネルギーを活用したまちづくりを推進する。

それによって、森林の適正な管理や邪魔となっている雪の利用が促進される他、一方で二酸化炭素の排出削減となり温暖化防止につながる。

これら一連の活動も、学習環境の一環として活用し、当地区が全体として持続可能な暮らしのモデル地区となるような仕組みを構築していくことが望ましい。

第4章 横川ダムを活用した地域活性化の具体的方向

これまで、横川ダム水源地域周辺の現状と課題、ダムを活かした今後のまちづくりへの可能性などについて検討してきた。本章ではこれらの結果を踏まえて、具体的なダム周辺地域での活動が、全体のまちづくりに効果的に連動して、本町の持続的な発展に寄与していくためにどうあればよいか、という視点から検討を進める。

本町は、「白い森構想」の基本理念を具現化していく戦略として、「白い森の国ふるさと文化村づくり」での5箇所の拠点整備地区と、それを横軸で支える三つの主要施策を掲げている。

そこで、横川ダム水源地域の活性化をまちづくり全体の中に位置付け、その活動をきっかけとしてまちづくりを進めていくという流れを、概念図として図4-1に示す。

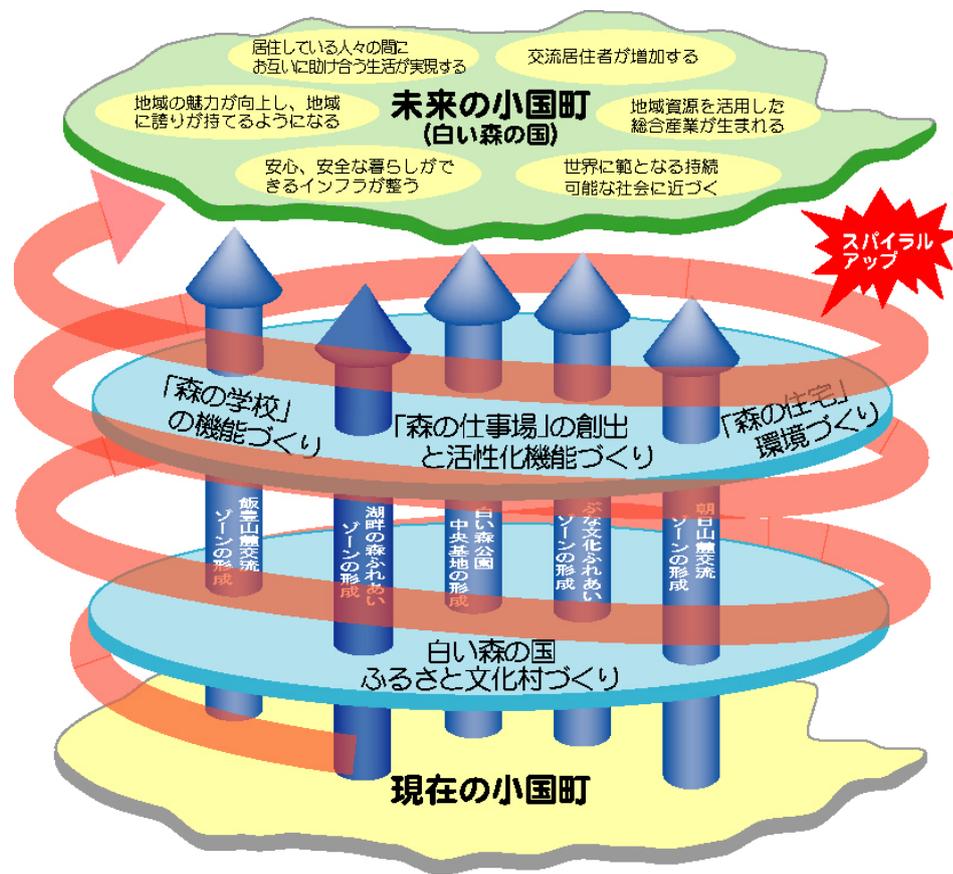


図 4-1 本町の戦略的まちづくりの流れ概念図

この図は、横川ダム周辺地区を中心とする「湖畔の森ふれあいゾーンの形成」をスタートとして段階的に向上していく図となっているが、まちづくり全体では、それぞれのゾーンからスタートする五重の螺旋構造にしていくことが基本である。そしてそれぞれが競争・協働しあいながら相乗効果を発揮していくことを目指している。

そこで、以下に水源地域ビジョンで具体的に取り組むべき方向性を検討する。

4-1 ダム湖及び周辺資源を活用した多面的交流事業推進のあり方

ここではダム湖及び周辺資源について、いくつかの切り口からその多様性や高付加価値化への可能性を探ってみる。

一つ目は、ダム湖岸の場所自体が有する潜在的な可能性を引き出して多面的交流に活かす視点、二つ目は、四季が織りなす地域の自然と人の暮らしを活かした視点、三つ目は、ダム上流地域における集落間の連携協力体制の再構築の視点、四つ目は、ダム湖周辺資源を活用した地域活性化とまちづくりの視点、五つ目は、町全体あるいは町域を超えた流域交流の視点、の五つの視点から検討を行う。

4-1-1 ダム湖及び周辺整備箇所を活用した交流事業推進の視点

横川ダム周辺整備として、四つの整備地区がダム湖及び湖岸に計画されている。具体的なハード面の整備概要は第2章の表2-1に示した。ここでは、それぞれの地区における可能な活動を通じて、いかに人と人とが活発に交流し、町の新たな観光や体験学習、豊かな自然との触れ合いなどに多面的な機能を発揮し得る拠点に育てていくかについて検討を行った。

表 4-1 ダム湖及び周辺整備箇所を活用した交流事業推進の視点

	場所		想定される取り組み	多面的交流を推進するための手法
計画されているダム周辺整備地区	ダムサイト地区	広報交流館	<ul style="list-style-type: none"> ・展示物等による防災意識の啓発、横川ダムの紹介、ダム周辺及び小国町の紹介 ・地域の人たちが企画する企画展の開催 ・地域の人たちによる交流活動や体験学習の継続的实施 ・貸し自転車の貸し出し 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖周辺地域へ行ってみたいと思わせるしかけを用意：例えばダム湖周辺の解説付魅力マップや、食や特産品、通年のイベント情報が盛り込まれたパスポート型冊子の配布、季節を先取りした写真展や東部地区のむらづくりの歴史企画展、横川流域の縄文遺跡企画展などを開催し Web での PR と結果の報告を継続して行っていく。 ・地元の人たちによる企画展の継続：企画展ではできる限り直接会話による解説を通して交流を図る。 ・「よこかわ水の駅」として他の水の駅や川の駅との連携交流：他の水の駅、川の駅などに案内リーフレット等を常備。合同イベントの開催など
		展望広場	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム本堤の眺望を利用した児童生徒の体験学習など 	
	市野々地区	大イチョウ広場	<ul style="list-style-type: none"> ・市野々に住んでいた人たちのシンボルとして新しいイベントの開催 ・横川ダムの象徴木としてPR ・広場での芋煮会など町民が集って交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「東部地区ふるさとまつり」の復活：市野々に住んでいた人たちだけでなく、東部地区の人やゆかりのある人たちが年に一度大イチョウの下に集って、かつてむらづくりの一環として盛んだった「東部地区ふるさとまつり」を復活させる。

		歴史街道を結ぶ不動出生橋	<ul style="list-style-type: none"> ・十三峠、黒沢峠の旧峠道の山歩き等における新たな結節点として案内板等を設置する。 ・水辺に近づくきっかけづくりとして、もぐり橋の存在をPRする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・古い歴史の峠みちと新しく生れた水のみちが出会う結節点の演出・黒沢峠まつりと湖面を活用したプログラムとを連動するイベントを開催する。 ・橋が水中にもぐる時期には、渡し船を使う：常時満水位での歴史街道を利用したイベント時には、船を利用して道をつなぐことで、新しいイベントとしての多様性を加え、PRしていく。
		湿地・草地	<ul style="list-style-type: none"> ・湿性や草原生の生き物にふれあえる空間として、継続的に管理する。 ・既存の下葉水にあるビオトープと連携した管理や学習支援活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・森林セラピー基地と連携できるサブ拠点として位置付ける：背後を山に囲まれ、前面には水辺が広がる「静」の空間を生かし、多様な自然の中で癒される安らぎの広場として、黒沢峠の散策等も加えたメニューの開発を行う。
		流木荷揚場	<ul style="list-style-type: none"> ・炭焼きや工芸、バイオマス利用などの、流木の多様な利用方法の実例を紹介する展示広場の併設や解説板等を設置。 ・炭焼き体験などのイベントの開催。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎年「流木美術・工芸展」などのイベントを開催：地域の伝統工芸などの展示や体験などの他のイベントと連携して開催する。 ・炭焼窯の設置による炭焼き体験と炭の多面的活用推進：町の環境計画とも連動して再利用システムをつくりあげる。
下葉水地区		湿地・草地	<ul style="list-style-type: none"> ・広場利用を行うエリアと、自然植生や生き物の生息空間として保全するエリアを区分して管理を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地元のNPOが先行してつくりあげたビオトープと連携：水辺の生き物に出会える場、環境学習の場として活用できるプログラムを用意して地元だけでなく、都会の学校との交流にも活かしていく。
		水辺	<ul style="list-style-type: none"> ・水位変動による裸地とならないよう植生に配慮する。（植生の復元には、在来種の活用を原則とする。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・法面を裸地にさせない景観配慮のダムをウリとする：洪水時の制限水位と常時満水位の間の法面緑化技術の確立により、制限水位時期のダム湖の景観を醜くする裸地化法面を極力なくす。 ・経年変化を観察し、表土の浸蝕が発生する場所では、土木的な工法との併用によって植生の安定化を図る。
上葉水地区		パークゴルフ場	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な年齢層が同じコースで交流できる特徴を活かして世代間交流を推進する。 ・整備水準を上げて、評判の良いコース状態を維持することによって、リピーターや常連客を増やす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「白い森おぐに湖杯」など定期的なコンペの開催：パークゴルフ人口増加のため、年齢層別や地域別など多様な人々が参加できるしくみをつくる。 ・白川ダム湖畔のパークゴルフ場と連携したツアー競技を開催：白川ダム湖畔にも公認コースがあり、近隣同士で協力してパークゴルフによる交流と集客を図り、先進地として存在価値を示していく。

		ゲートボール場・芝生広場	<ul style="list-style-type: none"> ・お年寄りや子供たちが安全で安心して利用できるよう配慮し、ベンチや緑陰樹などを配置する。 ・桜を植えてお花見広場としても活用。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の井戸端会議場を目指す：地域のお年寄りや子供たちがいつも集まれる楽しい交流の場とするために、地区の井戸端会議場的な居心地の良い空間にしていく。
		花壇と親水部	<ul style="list-style-type: none"> ・散水施設の有無と、維持管理水準によって、植栽する品種が限られるため、条件に合った取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・花づくりの達人を競う：希望する地域の人たちに花壇をつくってもらい、毎年花の達人競技会で、優秀な技と美しさを競ってもらう。 そして、その技を集落の緑花運動の指導に活かしてもらう。
新規提案エリア	湖岸道路	桜並木	<ul style="list-style-type: none"> ・町の木であるオオヤマザクラを湖岸道路に植栽して花の回廊の拠点とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町民参加で名所づくり：苗木を植えても10年で名所になる。 ・経費をかけず、短時間でできる：苗木代と土壌改良費だけで支柱は不要、イベントとして町民や学校、企業、流域地域の人たちなどの参加で行えば短時間ででき、リピーターの数も増える。 ・今後、5つの文化村を結ぶ花の回廊として広げていく：この活動を横川ダム湖畔だけで終わらせることなく、全町の取り組みに広げていく。
	湖岸の常時満水位以上の余裕地やダム周辺の耕作放棄地など	ヤマブドウやマタタビ、カシスの栽培	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖岸において、特産品づくりの一環として地域性に即したワインの原料を栽培する。 ・最近増加している耕作放棄地の活用として、上杉鷹山公が勧めた地域ごとの換金作物生産の教えを活かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の自然の恵みからの特産品づくり：隣接の飯豊町では、コクワ（サルナシ）ワインを地域限定の特産品として販売しているが、本町でも、ダムの湖岸法面や耕作放棄地を活用してヤマブドウやマタタビの栽培を行って「白い森ワイン」を売り出し、山の幸、川の幸を活かした薬膳料理などとセットで売り出す。 ・広く苗木の所有者を募りその本数に応じたワインを年間契約で送る：耕作放棄地等を活用して生産し、全国から苗木のオーナーを募集して権利を販売する。 リピート率の向上と、都市と農村の交流のきっかけづくりにするとともに、予約販売で生産量の目途を立てやすくし、売れ残るリスクを低減させる。 ・町独自の新しい産業を育てていく：地域性を活かしながら健康イメージをPRすることができる食品産業の創出を図る。 ・カシスを使った新しい特産品の開発に取り組む。

<p>市野々地区 町道横川ダム湖岸線付帯町有地</p>	<p>流木などのバイオマスエネルギー利用したハウス施設</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・流木荷揚場からの流木や、周辺の里山管理、遊歩道管理で発生した木質バイオマスをハウス栽培にエネルギー利用することによって、通年出荷が可能な農・園芸作物の生産が可能になる。 ・また、未利用バイオマスを有効活用し、資源循環やCO2の排出削減にも貢献できるモデル施設となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然エネルギー利用をまちづくりの柱に据える：町が計画している未利用バイオマス利用による地域暖房と連動させて、地域特性を活かした自然エネルギー利用をウリにする。 ・雪の冷熱エネルギーを利用した農産物の出荷抑制や、旨味づけなどと組み合わせる：本町にとって雪を活かしたまちづくりは欠かせないテーマである。森に暖められ雪に冷やされるエネルギー利用は、未来の小国をアルカディアにできる貴重な資源である。雪室の実現を目指す。 ・これに本ダムの水が生み出す水力発電のエネルギーを加えれば、ポスト化石燃料時代の最先端地域となる。
---------------------------------	---------------------------------	---	---

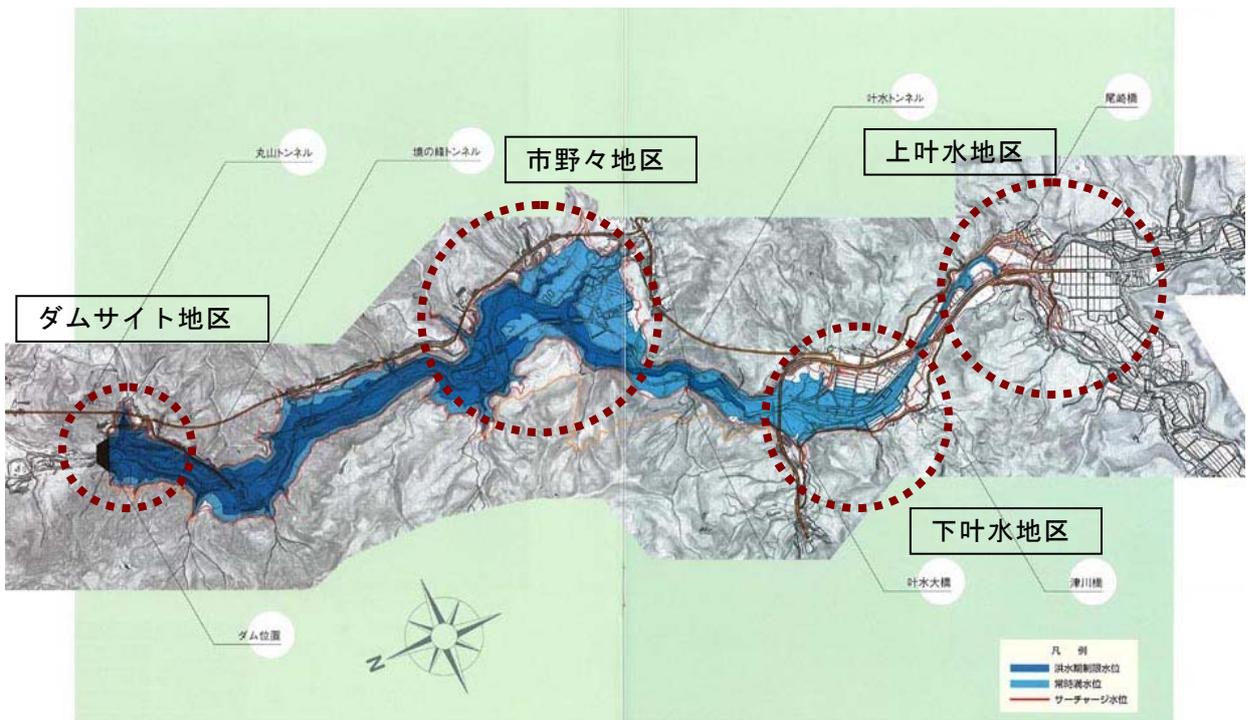


図 4-2 ダム湖岸整備地区位置図

4-1-2 四季が織りなす地域の自然と人の暮らしを活かした交流事業推進の視点

ダム湖周辺地域の自然が季節によって大きく変化することに着目し、四季の劇的な移り変わりを資源とし、また、それぞれの季節に繰り広げられる地域の人々の暮らしの中の年中行事や祭りなどを交流事業に活かしていく視点で検討した。

表 4-2 四季が織りなす地域の自然と人の暮らしを活かした交流事業推進の視点

季節	季節の特徴		特徴を活かした交流事業の推進
	自然	主な年中行事や祭り等	
春	<ul style="list-style-type: none"> ・山全体が白黒の世界から鮮やかな色彩に劇的に変化する時で、ブナの若葉が一斉に萌え始める。 ・野山では短期間の間に草花が一斉に咲き乱れ、まさに一時の春の妖精たちである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・春は農作業に関する行事が中心となる。 ・当地区には、わらび園が5ヶ所あり、野焼きは春の風物詩となっている。 ・山菜採り ・山菜の保存技術 	<ul style="list-style-type: none"> ・3月、早春の雪の固まった頃に、現在も町内五味沢地区では「雪の学校」が開催され、ブナの森ハイキングなど早春の自然観察会で都市の子供たちや家族との交流が図られている。ダム上流地域でも、横川ダム工事事務所の主催で雪上山歩きによる動物の足跡探しなどの体験会がNPOの協力で催され、成果を挙げていることから、今後の都市との交流などに期待できる。 ・5～6月には町内大滝、五味沢地区で「山菜の学校」が開催され、山菜採りや山菜料理などが学べる交流会が実施されている。ダム上流地域は、最もわらび園が多い地域でもあり、今後のプログラムに加えたい。特に山菜採りのマナーや保存の仕方を現場で教えることは重要。 ・ダム上流地域にも森林・登山ガイドを行う方がいることから、自然観察や自然体験学習などは年間を通じて初心者から経験者まで十分対応可能プログラムを用意できる。 ・ゼンマイに代表されるような採る技術・選別する技術・ゆでる・もむ・・・、それぞれの山菜の特性に応じた保存の技術を伝える。
夏	<ul style="list-style-type: none"> ・森は緑を増し、原生のブナ林を中心とする山々は、多様な生き物を育む。人々が多様で豊かな自然に触れることができる季節である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・虫送り ・盆行事と盆踊り ・カジカとり 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏はダム湖や湖岸の水辺は利用適期となり、観光レクリエーション目的の人たちで賑わうことが予想される。これらの人たちがリピーターとなって何度もこの地を訪れ、地域の人々と交流が生れることが望まれる。 特に今後、これらの人々の中から、この地域の自然を愛し、地域の人々と親しく交流でき、集落の共同作業にも協力できる交流居住人口を増やしていくことが、ダム上流地域の活性化につながる一つの方法である。 ・滝川上流のカジカ滝で行われている独特の漁法の伝承などを盛り込んだプログラムの実施。
秋	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖周辺の山々が紅葉に染まり、水面に映えて、単彩色に変わる前の最も美しい色彩の時。 	<ul style="list-style-type: none"> ・稲刈り ・秋祭り ・芋煮 ・きのこ採り ・保存食づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム上流の大石沢では今年からきのこ園が開園する予定で準備が進んでいる。わらび園利用者の多くがきのこ園を利用する可能性は高く、今後の入込みが期待されている。 ・マスずし、キノコの塩漬けや乾燥による保存、納豆ねせや大根漬けなど、冬に向けた保存食づくりを伝承する。

冬	・音も色彩も消える白の世界。時には 3m を超える積雪に見舞われ、全てが雪に埋もれる。	・小正月の鳥追い ・雪の学校	・都会の人にとっては深々と雪が降り積もる情景を見ているだけで、癒しや気分転換となる。何もない白い空間を価値ある空間に変えることは十分可能である。 ・冬の生活はどういうものなのか？衣食住のあらゆる場面で発揮されてきた雪国山村の知恵を伝える。 ・バイオマスエネルギーを利用したハウス栽培による農業の多様化を促進する。
---	---	-------------------	--

4-1-3 ダム上流地域における集落間連携・協力体制の再構築の視点

ダム建設による市野々や下叶水の移転によって、旧東部地区はダム湖上流地域を残すのみとなった。かつて、幾多の豪雪や水害の苦難、奥地集落の集団移転など厳しい環境をのもて、東部地区は地域づくりに積極的に取り組み、昭和 58 年に全国農林水産祭において、むらづくり部門の天皇賞に輝いた。

あれからほぼ四半世紀が過ぎ、社会経済状況の変化やダム建設工事の着工、付け替え道路の完成による町中心部との時間距離の大幅な短縮などによって、ダム上流地域の環境は大きく変貌した。

同時に、集落人口も減少が続く中、それぞれの集落機能も 2-1-2 に示したように共同体としての活動や集落行事の継続が困難になりつつあるのが現状である。

そこで、ダムの完成に伴ってできるダム湖や水辺を軸に、6 つの集落がゆるやかに連携した活用事業に取り組みながら集落機能の再構築を目指すという視点から、今後の集落間連携協力のあり方を検討した。

表 4-3 ダム上流地域における集落間連携・協力体制の再構築の視点

集落間の連携協力が必要な理由	現状における課題	集落機能や集落間連携の再構築に向けての方策
ダム湖周辺施設の運営管理等への参加協力	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少や高齢化が進む中、現状のダム上流域の全集落が協力し合っても、地域住民だけで全ての対応は難しい。 ・ダム関連施設の管理運営のほか、この地域全体の魅力向上のための独自の企画運営が持続的に実施される状況をどう創り出すかが課題。 ・現状では、中心的組織が定まっていなため、情報の集約化難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム上流地域の活性化のためには、この機会を利用し、活動目的に応じて、地域外の人たちとの連携を推進していくことが必要である。 ・また逆に地域外のグループが、ダム湖周辺で活動する機会も増えると予想されるため、それらのグループとの連携も積極的に進める。 ・地域住民が協力しやすい組織体制を確立する
減退傾向にある集落機能の改善	<ul style="list-style-type: none"> ・集落機能の減退がこのまま続けば、各集落存亡の危機に陥る可能性がある。これまでは、共有財産区等の管理もあって、あくまで各集落は独自の共同体制を守ってきたが、今後は、可能なものから集落間の相互協力による共同実施に切り替えていく必要が生じている。 ・これまで集落が担ってきた、公(行 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖周辺施設の運営管理への参加は、その新しい集落間協力への大きなきっかけになる。 ・集落機能が果たしてきた中間的な公共性の領域は、共同生活を行う上での重要な作法であることから、国が推進している交流居住(あるいは二地域居住)人口などの増加を図る場合も、無原則的に受け入れるのではなく、集落の共同作業へ

	政)と個(個人あるいは家族)の間 の中間領域の共同作業が、このま まだと、公と個にその負担が振り分 けられる可能性が大となる。	の参加が可能であることを条件にする などの対策が必要。 ・どうしても維持が難しい機能につ いては公と個に二極化させない、集 落の合意による新しい体制づくりの 検討が必要。
新たなまち づくりへの 再スタート	・かつてむらづくりで天皇杯を受賞 したほど活発だった地域であるが、 現在はその頃の活気はなくなってい る。 ・人口減少と高齢化が進み、相対的 に若い人が少なくなっている一方、 大石沢では転入者の増加によって 一旦減少した人口が増加に転じて いる。	・豊かな周辺の自然、縄文時代から自然 と共生してきた人々の暮らし、叶水 の基督教独立学園の立地とその歴史 などに、ダム湖という新しい環境を 加えて、特徴ある体験学習や環境学 習の中心地として、また癒しや健康 回復の基地として、ダム上流地域の 集落が連携協力して、まちづくり の再スタートを切るチャンス到来で ある。

4-1-4 ダム湖周辺資源を活用した地域活性化とまちづくりへの視点

次に、ダム湖を中心として、来訪者が比較的簡単に行くことができる周辺の資源に光を当て、本町がまちづくりの骨格に位置付けている「白い森の国ふるさと文化村づくり」の5つのゾーンの中の当該エリア「湖畔の森ふれあいゾーン」の形成」を具体的に進めていく推進力としていく。

表 4-4 は主な資源をどう活かして「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能の向上を図っていくかについて検討を行った。

表 4-4 ダム湖周辺資源を活用した地域活性化とまちづくりへの視点

エリア		想定される取り組み	多面的交流を推進するための手法
黒沢峠や桜峠など越後街道十三峠の歴史街道の整備と活用	黒沢峠	・十三峠の中では最も活発な取り組みがされており知名度も高い。今後は保存会の活動を支援しながら保全整備を進めるとともに、他の峠をつなぐ活動に発展させる。 ・旧道が現道と交わる所や横川ダムの不動出生橋のように河川等と交わる場所を結節点としてメリハリをつけ、通り道としての旧道は極力昔の面影を保全する。	・歴史街道の全国ネットワーク化を働きかける。：横川ダムの完成を契機に、越後と米沢を結ぶ歴史と文化の街道に光を当て、直江兼続やイザベラバードなどのゆかりの人物を冠にした街道歩きイベントを開催し、各地の歴史街道歩きのイベントとも連携して、歴史街道の全国ネットをつくって交流を図る。 ・セラピーロードとしての活用を図る：登山道とは違って比較的標高差も小さく中高年でも安全に歩けるため、セラピーロードとして、温身平の森林セラピー基地活用の多様化を図る。
	桜峠	・市野々が湖底に沈むことによって黒沢峠と桜峠の間にダム湖が位置し、新たに不動出生橋によって結ばれることになった。 これに伴って、黒沢峠と桜峠の歴史街道を連続して歩くきっかけができ、新しい魅力付けが期待される。	・黒沢峠と桜峠の起点・終点の魅力付けを行うとともに、さらに白子沢から旧街道を回って周遊できるルートの開発を行う。市野々側には旧道が部分に残されていることから、その復元を行っていく。：横川ダム拠点整備地区の市野々地区を起点として多様な歴史街道の利用ができるメニュー開発も同時に行う。 ダム湖汎の市野々地区では、駐車場や広場を離合集散の場として活用できるため、団体での交流も可能となる。

	萱野峠 (ダム周辺地区ではないが参考事例として)	・この峠でも最近峠道の敷石を掘り起こすイベントが企画され、まちづくりグループが活動を始めている。	・石畳の道復元活動そのものを通じて、広く全国にイザベラバードの足跡を尋ねる歴史街道を宣伝する。：他の同様な活動団体との交流を通じて活動への相互参加や地域間交流を推進するきっかけづくりとする。
越後街道と以前に越後と米沢を結んだ中津川街道の整備と活用	中津川街道、越後街道	・全ルートの整備でなくても、歴史街道の趣を残す要所については復元を図り、新街道とともに歴史街道探索や、山歩き、セラピーロードとして活かす。	・旧街道復元を継続イベントとして実行：全国から参加者を募って、復元作業のボランティアに参加してもらい、地元の人たちと交流をしながら、継続的なつながりをもった活動にしていく。 ・新旧歴史街道にある石碑や道標・地蔵、シンボルとなる大木などをチェックしていくウォーキングラリーの開催：横川ダムの市野々地区の大イチョウを起点終点として毎年開催、時代衣装での仮装や開催当日には各峠に峠の茶屋を出店するなど、参加者も参観者も楽しめるイベントとして育てていく。また、観光客の参加も増やしていくよう、広報交流館でのPRやWeb情報を活用する。
旧滝集落周辺の耕作放棄地の活用と横川上流部の滝や溪流の保全と活用	ダム上流地域の耕作放棄地	・旧滝集落やダム上流域の耕作放棄地をヤマブドウやマタタビ、カシスの生産農園として活用し、特産品としてワインづくりを行う。	・飯豊山や溪流の自然景観と、ヤマブドウやマタタビ、カシスなどの栽培風景の調和した桃源郷を目指す。：契約栽培者が別荘感覚で利用できる宿泊施設の整備や、耕作放棄地の貸し農園的な再利用も含めて検討する。
	かじか滝、白滝、横川源流部	・かじか滝、白滝の景勝と溪流を保全しながら、観光や癒しのスポットとして活用する。	・カジカ料理、カジカに関する特産品の開発：飯豊山麓交流ゾーンではイワナの寒風干しが特産品となっている。当ゾーンではカジカに関する商品開発を行い、町の特産品として例えばイワナとカジカの寒風干しをセットにしてPRするなどの取り組みを行う。
主要地方道川西小国線(九才峠)の改良	九才峠、白川ダム	・白川ダムとの多様なイベント連携が可能であり、先進地として学ぶべき取り組みも多い。	・スポーツ関連行事の共同開催：まず、マラソンや自転車ロードレース、パークゴルフ大会、ボートやカヌー競技などの共同開催から連携を始め、源流の森の「森の学校」などの体験プログラムの連携や、夏の雪まつりの共同開催などに広がっていく。
飯豊山信仰登山道の維持保全と活用	旧滝地区を含むダム上流地域	・飯豊山信仰の登山口としてルートの整備や管理を行う。 ・信仰登山の歴史的な史実や史跡に光を当てる。	・飯豊山信仰登山基地としての知名度を高める：地元の山岳ガイドが同行する登山の楽しさを体験できるプログラムの実施や特徴ある地元農家民宿などとの連携を図る。 ・ルート上の見どころマップの作成：信仰登山の歴史を物語る史跡や、季節の花、眺望点など、魅力を宣伝する案内地図を住民参加で作成する。

地域内のわらび園の活用促進	5箇所 の観光 わらび 園	<ul style="list-style-type: none"> ・観光わらび園だけでなく、わらびそのものの高付加価値商品化 ・わらび園来訪者に別の季節に再来園してもらうための企画づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・特産品としてのわらびのブランド化：郷土料理や薬膳料理の材料だけでなく、加工して保存のきく健康食品の研究開発など、わらびに徹底的にこだわった特産品メニューをそろえる。
ダム湖周辺の水源の森	樺沢、大滝山、旧滝集落などの山林	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖周辺に分布する山林を「水源の森」として保全し、育成管理を行っていく体験プログラムの実施 ・森林を適正に管理・経営しているという国際的評価である FSC（森林管理協議会：本部はドイツ）認証取得への取り組み。 ・企業に森づくりへの参加を呼びかける。企業は、森づくりを通して、社会貢献やCO2の削減にも貢献できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖周辺の山林をフィールドとして、水源地域の森林が有する機能を学び、その機能を発揮するために必要な管理方法を体験できる場を設定する。 ・同時に棚田を含めた里山の復元や、里山の多様性を実感できるエリアを、農家民宿などとともに里山野外博物館として位置付ける。 ・水源地域の森や水田の保全は、下流域の住民の生活に直結するだけでなく、海の魚場の保全にもつながることから、この活動を流域全体との交流事業に育てていく。 ・まず、町有林において FSC 森林認証を取得し、持続可能な社会を目指す活動団体や企業と連携しやすい環境づくりを行っていく。 ・参加企業と協定を結んで、継続的かつ多様な交流に結びつける。
町内他地区への好刺激の伝播	町内南部、中心部、北部	<ul style="list-style-type: none"> ・横川ダム建設にあたって、調査編集された「横川ふるさとへの想い」によって、これまで埋もれていた多くの地域の歴史や民俗文化が再認識された。町内の他の地域でも、地域固有の歴史文化を見直す良いきっかけとなって波及している。 ・横川ダム水源地域ビジョンへの取り組みが、まちづくりにおいて、官主導から民主導へとシフトしていく新しい取り組みが始まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域づくりへの取り組みの普遍性が、横川ダム水源地域ビジョンの取り組み（講演会やワークショップの開催など）を通して、町内に広く伝わり、他地区での新しい取り組みに発展していくきっかけになっている。 ・横川ダム水源地域ビジョンへの取り組みによって、多様な人材の発掘や、まちづくりに関する NPO 活動の情報も集約化されるようになり、町全体の今後のまちづくりに対する段階的な向上への筋書きが描きやすくなった。 ・まちづくりの活動団体の連携や役割分担がしやすくなり、それぞれの地域を超えてテーマ性によるネットワークが可能になってきている。

4-1-5 町全体あるいは町域を超えた流域交流の視点

本町の拠点整備地区の一つである、湖畔の森ふれあいゾーンは、第4章の冒頭に述べたように、他の拠点地区と連携しながら段階的な向上を目指すまちづくりの5つの柱の一つとして位置付けられている。したがって、全体のまちづくりの視点が必要であると同時に、町を代表する重要な拠点の一つとして、町外、特に下流流域の安全を守る役割の大きいダムという機能からも、下流流域全体の地域との連携交流は、意義あるものと考えられる。

そこで、表4-5に、町全体あるいは流域全体の中での交流の視点について事例的に整理する。

表4-5 町全体あるいは町域を超えた流域交流の視点

連携の視点	町全体の拠点間交流	流域全体の連携交流
活動のネットワークに関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・本町では町全体の自然や歴史文化環境を学習の場として位置付け、拠点ごとに活動を展開している。本地域が有する学習機能の潜在性も高く、既に、叶水のビオトープを会場に環境学習の支援が横川ダム工事事務所やNPOの手で行われている。 ・今後、それぞれの拠点が有する特徴を活かした展開が重要であり、そのための情報共有や相互協力は不可欠である。 ・町にとってダム湖の有する拠点性は大きく、新たに増加するであろう来訪者を、町の他の拠点地区へも誘導したり、繰り返し来訪してもらうための戦略が必要で、そのためにもそれぞれの拠点間の協働と競争によるグレードアップを図りたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・下流部の新潟県関川村に大石ダムや荒川水辺プラザ「川の資料室」があり、荒川及びその支流に関する直接的な情報のネットワーク化を図ることが可能である。 ・また、大石ダム下流には県民休養地としてレストハウス、バーベキュー広場、小動物園などがあり、ダム湖周辺利用の先進事例ともなっている。これらの地域との連携による関連企画の同時開催などが活動として考えられる。 ・羽越水害を体験した荒川流域の住民は、水害の防止に関して県や市町村という区域を超えた一体感がある。 ・越後と米沢を結ぶ旧街道の歴史からみてもこの地域は深い関係があり、越後側からは塩、小国側からは青苧が運ばれるなど、重要な物流街道であった。 ・街道をテーマとした連携協力は、現在も大里峠で行われているが、さらに活動を広げていくことが望まれる。
人的交流に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・各拠点における環境学習等に関する指導者は、その地域密着型の人たちや、地域にこだわらず一定の専門性を持って全国さらには国外にも活動の場を展開する人たち、逆に町外の人たちが町内を活動の場として利用している場合など多様なケースがある。これらあらゆるケースで町の資源とかかわる人たちの情報を集め、連携や交流ができれば町の大きな財産になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昔から新潟県の関川村とは人的交流も多く、小国町への観光入込み客をみても新潟県側からが多い。 ・水害の防止や水源涵養など下流域の人たちの生活の安全・安心に直接的にかかわるテーマから、長い歴史のある生活文化に関するテーマなど、流域間で共有できるテーマは多く、今後は単なる観光交流から一歩進めた人材や、多様な企画の取り組み団体相互の交流に発展させたい。

4-2 多面的交流事業の推進等地域活性化のための人材育成と確保

4-2-1 ダム湖上流地域の地元住民の意見

横川ダム湖周辺地区、特に上流域に位置する叶水地区を中心とする6つの集落は、ダム建設によって、生活、産業、集落機能などに多くの影響を受けている。

今後これらの変化をまちづくりに、より効果的に転換して地域活性化を図るためには、将来を担う人材の確保が不可欠となる。人材の育成や確保について、また現在のダム上流地域の集落が抱える課題と将来の方向性等について、従前からの東部地区在住者、東部地区への転入者から話を伺った。以下に、それらの意見の要約を示す。

1) 人材育成への提案

- ・地域に残っている若い人たちと、新たに転入してきた若い人たちが、もっと情報交換して交流を深め、協働して地域を担っていく活動をする機会をつくっていく。
- ・現在、ただ一軒残った商店では、観光客だけでなく、地域の人たちが気軽に集まって交流が生れるような場として活用していく方策を探っている。特に若い人たちが新しいことに取り組む場としての活用を期待している。
- ・今がこの地域が変わっていくチャンスである。そこでどういう具体的な活動に結び付けていくかについては、これまでの長老による話し合いではなく、若い人たちの意見を聞く機会をもっと増やしていくべきである。
- ・基督教独立学園では、地域住民にも参加を呼びかける公開講演会を開催している。今後も、このような取り組みを積極的に行って、地域住民が学べる機会を増やしていく。

2) 人材確保への提案

- ・一旦町外に転出した若者たちの中にもUターン希望者は多いので、その人たちが戻ってやっていけるような地域づくり、受け入れ態勢づくりが必要である。
- ・基督教独立学園は、高い理想の教育理念をもち、学生も全国から集まって来ている。この学園の存在を地域の人材確保や育成にもっと活用していく。
- ・この地区は、あまりこだわりなく転入者を受け入れてくれるし、人間関係もうまくいっている。今後も若い人たちが転入してくる可能性は十分あるので、そういう人たちを積極的に受け入れて活かしていく。
- ・学園は、特に地元で定住できる人材を育てている訳ではないが、地域の人材として育ててくれればうれしい。地元出身の卒業生のほか、何人かは戻ってきて定住している。地域の魅力が増せば当然、今後もそういう人たちが増えるはずである。
- ・農業に興味を持つ人たちを積極的に誘致すべきである。この地域は、これからも農業を中心としていくべきだと思う。
- ・Webサイトを利用して、農業希望者の受け入れを募集することも効果があるのではないか。

3) 多面的事業推進へ向けての提案

- ・付替道路によって、町中心部との交通は格段に便利になった。飯豊町と福島県の喜多方方面を結ぶ道路の整備を推進し、九才峠を通過して福島へ抜けられれば、白川

- ダムだけでなく、福島県との新たな交流が生まれ、交流範囲を拡大することができる。
- ・水の郷交流館を有効に活かし、ダム上流地域の活性化への牽引役的な位置付けにしていく。(そこがうまくいかないと、全体の機運が広がらない)
 - ・自然の豊かさがこの地域の特徴であり、それを活かした体験交流などを推進していく。
 - ・この地域の自然の素晴らしさを来訪者に体験してもらう多様なメニューが考えられる。学園としては、学外に出て体験学習を受け入れるような活動を実行したいと思っても、現在のカリキュラムをこなすのが精一杯という面はあるが、人材のネットワークを活かしてできるだけ協力していきたい。
 - ・学園の卒業生も家族を連れて毎年結構多く訪れる。そういう人たちも交流の一環として楽しんで滞在できるようにしていく。

以上の結果から、この地域を活性化していく手法としては、①先人から受け継いできた自然と農業を大切に、それを生かした体験交流活動を展開していくこと。
②ダムという新しい地域資源と地域特性を活用した働く場を創造していくこと。
③地域を支えていく人材を確保していく上で、転入者を積極的に受け入れていくことに集約できる。

4-2-2 地域活性化のための人材育成のあり方

地域活性化に関するアイデアはたくさんあっても、それを具体化していくには、多くの問題点や不確実性が常に存在する。

そのため、これらを分析管理し、運用していく人材の育成が重要になってくる。

「地域づくり」は「人づくり」と言われるゆえんである。しかし、こうした人材が、簡単に育成できるとは考えにくい。また、行政側にしてもこれまでにそのような経験はなく、まして常に異動が付きものの自治体職員では継続していくのは難しい。

このような現状と、横川ダム水源地域ビジョン策定の過程で明らかになってきた本町の住民や NPO 等の活動状況、本調査でのヒアリング結果等を参考にして、今後、地域活性化につながる人材育成をどのように実現して行ったら良いかを検討した結果を事例的に以下に示す。

1) 公（官）と個（民）の中間領域における企画・経営管理能力のある専門家の支援

まず、横川ダム完成に伴う新しい環境を活用して、ダム湖周辺地域の活性化に向けて具体的な目標を定め、そこに内在する不確実性を分析しながら全体を管理し、目標とする到達点に向かわせる能力と経験を有する専門家（インキュベーター・マネージャー）を招聘して支援を受ける。この専門家は町内外に関係なく、これまで本町が培ってきた人材ネットワークを活用しながら選定する。

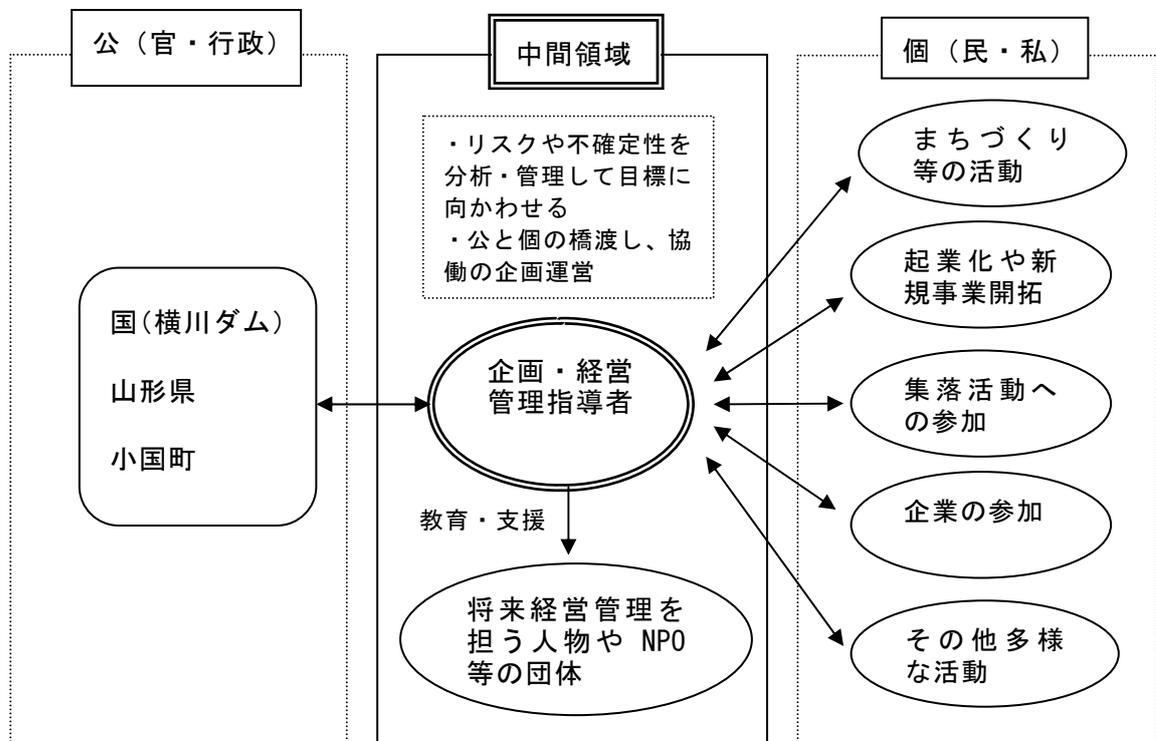


図 4-3 公（官）と個（民）の中間領域における専門家の支援の概念図

2) 行政頼りでもなく、個への負担転化でもなく、自律した新しい集落形成を目指した組織体制づくり

中間領域を支える活動組織が、行政組織のミニチュア版であったり、専門家集団や趣味の集まり的な NPO 団体では本当の効果は発揮できない。

指導力のある NPO 組織が、まちづくり活動の公益的な中間領域をリードしていくことは重要であるが、あくまで基本となるのは、それを支える住民一人ひとりのまちづくりへの参加である。自律した集落形成のためには、どのような地域にしていくべきかを住民自らが考え、決めていかなければならない。

そのためには、地域が自律するために必要な公益活動を理解し、地域が助け合ってきた昔の「ゆい」や「よいなし」のような共同生活の作法も、一方で見直していくことも大切である。

3) 目標へ向かっての活動が人を育てる環境づくり

まさに人材の潜在能力の段階的な向上を可能にする環境をいかに構築していくかが、今後のまちづくりの重要なポイントとなる。その意味で、横川ダム水源地域ビジョンへの取り組みを契機として、全ての体験が人育てにつながるような、やりがいと継続性のある活動を支えるしくみをつくっていききたい。

4-2-3 具体的なダム湖周辺地域活性化への人材育成と確保

1) 求められる活動とそれを実施する機関や団体等の関連

まず、ダム湖周辺地域の活性化に向けて考えられる活動とそれを受け持つ機関や団体等を、現状における情報を基に表 4-6 に整理した。

表 4-6 ダム湖周辺地域の活性化に向けて考えられる活動とそれを受け持つ機関や団体等

関連する機関や団体等 活動内容	小国町	横川ダム 管理 事務所	町民	白い森大 学ワーキング グループ*	ダム上流 地域住民 や団体	ダム下流 流域の住 民	NPO 等のま ちづくり活 動団体
イベントの企画運営	○	○		○	○		○
広報交流館の運営	○	○					○
水源の郷とレストランの運営	○				○		○
郷土料理の開発			○	○	○		○
特産品開発				○	○		○
民話の伝承	○		○	○	○		○
共生の知恵伝承	○			○	○		○
水辺環境の体験学習	○		○	○	○		○
ダム湖周辺整備区域の維持管理	○	○			○		○
ダム湖の環境保全活動	○	○	○	○	○	○	○
変動水域の緑地化	○	○	○	○	○		○

この表からも、4-2-2 に示した中間領域にあたる「NPO 等のまちづくり活動団体」の役割が大きいと言える。

2) 人材育成の行動計画

将来に向けてのまちづくりと地域活性化実現のためには、表 4-6 におけるそれぞれの活動を実行するために必要な人材と、これら多様な活動を総合して地域活性化に結びつけていくための図 4-3 に示したような企画立案から全体の経営管理指導までができる人材（インキュベーター・マネージャー）が必要になる。

町やダム管理事務所の職員は配置換えや転勤が避けられないため、継続的な活動を総括していくことは難しい。

そこで、まず民間から常駐でなくても指導を受けられる指導者を選任する。そして、例えばほとんどの活動計画に関係しそうな地元の NPO 団体を軸とした活動を誘導しながら、地元の経営管理指導者を育てていく。

さらにその人材が、町内の「白い森の国ふるさと文化村づくり」の各ゾーンでも、図 4-1 に示すような戦略的なまちづくりの指導者として活躍し、未来の小国町を目指して段階的に向上していくための原動力となっていく。

これがすなわち、横川ダム水源地ビジョンを契機とした活動が、小国町のまちづくり戦略上大きな推進力となることを期待している所以である。

第5章 横川ダム水源地域ビジョンとまちづくりで目指す方向性への提言

5-1 「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能のレベルアップ

5-1-1 「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能

まず、機能のレベルアップを図るためには、当該ゾーンの目指す方向と、その担うべき機能を明らかにしておかなければならない。

そこで、「湖畔の森ふれあいゾーン」の整備目標と、当該ゾーンに期待されている機能を、当ゾーンが新たに加わった過疎地域自立促進計画や、本報告書の第1章1-2-2で見直した「横川ダムに関連するこれまでのまちづくり構想」から要約し、さらに、本調査において必要と思われる機能を加えて以下のように整理を行った。

■ 「湖畔の森ふれあいゾーン」の整備方針

「地域資源を活用したコミュニティゾーンの形成」

■ 期待される機能

- ①まちづくりを軸にした地域内交流機能
- ②地域活性化に向けた地域間交流機能
- ③地域住民や観光客等来訪者のスポーツ・レクリエーション・地域文化ふれあい機能
- ④新たな産業や事業への取り組みによる地域活性化機能
- ⑤人口の流出防止と人材育成の機能
- ⑥防災機能強化による水土保全機能
- ⑦ダム湖周辺の新しい景観創造機能
- ⑧次世代への地域文化継承機能

この他集落機能の維持や保全に関する機能があるが、これについては別途 5-3で検討を行う。

5-1-2 レベルアップにつながる活動メニューの検討

これらの機能を水源地域ビジョンで取り組む活動によって、レベルアップしていくことが、本町全体のまちづくりにとって望ましいことであり、その結果として他のゾーン形成へも良い波及効果が期待できる。

以下にそれぞれの機能ごとに、まちづくりで目指す方向に連動し、そのレベルアップにつながるダム水源地ビジョンの活動メニューとその支援施策等を検討して取りまとめる。

表 5-1 「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能のレベルアップにつながる、ダム水源地ビジョンの活動メニューと支援施策の検討一覧表

期待される機能	ダム水源地ビジョンの活動メニューとして考えられること	レベルアップのための施策あるいは支援等
① まちづくりを軸にした地域内交流機能	<ul style="list-style-type: none"> ・「東部地区ふるさとまつり」の復活(ダム水源地ビジョンの策定や試行的活動に参加している人たちを中心として、この期間中に準備会を立ち上げる。) ・特産品開発のための地域共同体の組織化 ・学習環境としての資源や人材の掘り起こしを、まちづくりの一環として、地域住民が協働で取り組んでいく。 ・基督教独立学園創立の教育理念を地域内の交流や学習環境づくりに積極的に活かしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東部地区で研究集会や講演会を繰り返し開催して地域づくりを学び、「東部地区ふるさとまつり」を成功させてきた経験を活かして新たな再出発ができるよう、町も講演会やイベント企画に対して多様な支援を行う。 ・この活動にはリーダー的人物の存在が欠かせないが、スタート時点は行政のしかけも重要である。
② 地域活性化に向けた地域間交流機能	<ul style="list-style-type: none"> ・白川ダムとのスポーツ関連イベントの共同開催(湖畔マラソン、カヌー大会、パークゴルフ大会など) ・歴史街道を生かした越後から米沢までの街道歩きなどの共同開催 ・九才峠を通して近接する白川ダム上流地域の中津川集落と連携して、グリーンツーリズムや子どもたちの農山漁村体験を受け入れる活動を共同展開 ・置賜地域全体に広がる桜回廊の推進 ・横川ダムの下流流域の住民との防災やダム湖の環境保全などをテーマとしたイベントによる継続的交流活動 ・都市域の住民や子供たちとの自然体験や食農体験交流、スポーツ交流などの推進 ・水源の郷交流館が来訪者との地域間交流の拠点となるような活動や、特徴ある郷土食の提供など、質的な向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政が前面にでるのではなく、あくまでも地域の住民が主体となって交流活動を行うことができるよう、町は情報の提供やきっかけづくりの支援を行う。 ・ダム管理事務所は、活動の場の提供や、広報交流館での情報発信などの面で支援を行う。 ・特に白川ダムとの連携・交流は今後の可能性や相乗効果も大きいと考えられるため、管轄整備局は異なるが、国交省の積極的支援が求められる。 ・各省庁で実施されている地域活性化に向けた多様な施策に関する情報の収集と、有効活用への手法検討を行う。
③ 地域住民や観光客等来訪者のスポーツ・レクリエーション・地域文化ふれあい機能	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖を利用したカヌーやボート、ヨットなどの水上スポーツ基地 ・パークゴルフでの世代間、地域間交流の活発化 ・水辺や歴史街道を森林セラピー基地と連携したメニュー開発 ・これらの機能を充足させるための指導者、インストラクターの養成 ・縄文時代の遺跡に始まる地域の歴史や自然と共生してきた知恵などの地域文化に触れる体験の場をつくる。 ・民話をテーマとした交流活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民・町・県・国(ダム管理事務所)が連携して継続可能なスポーツイベントを育てていく協力体制を町が中心となって構築していく。 ・白い森の案内人や、NPO おぐに森と水辺の会、森林インストラクター会など、関連する団体やグループの協力体制づくりに対する支援を行う。
④ 新たな産業や事業への取り組みによる地域活性化機能	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の資源を活かした新たな産業や事業の起業化 ・地域の就業機会の拡大や経済的波及効果を高めていく商品開発 ・水源地域の森林の管理と木質バイオマスの有効利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・町は地域の事業者、団体、NPO等に対して、起業化支援などの施策を推進する支援事業を積極的に紹介し、申請手続き等の支援を行う。 ・伝統的な技や知恵を有する人材

	<ul style="list-style-type: none"> ・観光レクリエーションの新しい動向に対応した受け入れや、森林セラピー基地との連携による交流人口の拡大 ・水の郷交流館や、地元で頑張っている商店などを新たな核として育て、その場所を仕事興しの機能に発展させていく。 ・グリーンツーリズムや子供たちの農山漁村交流に対応した農家民宿等の展開 	<ul style="list-style-type: none"> （高齢者）に生きがいを持ってもらう場を積極的に支援して増やしていく。 ・新たな核となる施設やそこで行われる活動に対して、効果的な波及効果を誘導する支援を行う。 ・国が推進する、長期宿泊体験を伴う自然の中での体験活動プロジェクトへの積極参加を、官民連携で取り組んでいく。
⑤ 人口の流出防止と人材育成の機能	<ul style="list-style-type: none"> ・①から④の展開によって、人口の流出を防ぐとともに、新しいUIJ Turner者や交流居住者を増やす。 ・新しい地域ぐるみの取り組みの推進が、地域の人材を育てていく相乗効果のしくみを構築する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町はUIJ Turner希望者や交流居住希望者の情報の窓口として、田舎暮らし体験ツアーなどの企画の更なる魅力向上を図る。 ・若い転入者の増加が地域に刺激を与え、活性化につながりつつあることから、彼らが将来に夢が持てるような具体的支援策を講じる。（例えば、地域の活性化につながる活動助成や、町の施策研究等への参加機会をつくるなど）
⑥ 防災機能強化による水土保全機能	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖上流に位置する森林や農地の保全等により、ダムの機能や安全性を高める取り組みの推進 ・下流住民が楽しみながら取り組める源流部の体験観光企画や交流会の開催 ・企業と連携した森づくりの推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・町有林や管理放棄の民有林の維持や保全等に対し、住民やNPO等がかかわれるしくみづくりを行う。（P82※1 活動支援システムの例参照） ・水源環境税などを活用した、水源地域の森林造成や、維持管理に関する活動支援を積極的に行う。 ・森づくり参加希望企業の募集や情報提供を行う。
⑦ ダム湖周辺の新しい景観創造機能	<ul style="list-style-type: none"> ・周辺の自然と調和するダム湖及び周辺地域の景観の保全と創造に関する取り組みとして、絵画・写真コンテスト、俳句・川柳大会などの企画開催 ・春のオオヤマザクラ、初夏のヤマボウシ回廊、夏の溪流や湖水と緑あふれる自然景観、秋の紅葉の絶景、冬の純白の別世界など、それぞれの季節の景観を際立たせる演出や視点場の整備 ・地域の景観保全活動を行うNPO等を組織し、ダム湖畔を含めた上流集落の景観保全に関して地域の合意形成を図りながら保全活動を行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな自然や美しい農村景観が損なわれないよう、町全体の景観計画とダム湖周辺の景観指針の策定を支援する。 ・地域住民が行う景観保全活動に対して、情報提供や人材派遣などの支援を行う。
⑧ 次世代への地域文化継承機能	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム水源地域ビジョンに盛り込まれた事業を展開していくことによって、地域素材を活かした食文化など、地域固有の文化の継承が期待できる。 ・上大石沢にかつてあった木地師の文化の伝承など。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム水源地域ビジョンの事業がまちづくりへの波及効果を発揮できるよう町として支援・誘導を行う。 ・地域の食文化を学校給食で子供たちが味わったり、郷土料理の実習プログラムを授業に加える。

5-2 東部地区の集落機能の維持・保全につながる活動メニューの展開

3-2において東部地区の集落機能の維持に関する現状と課題を整理したが、この結果から改めて、人口減少と高齢化、産業や就業構造の変化が、農山村の集落機能の立ち枯れ状況を加速していることが明らかとなった。

このような状況の中で、多くの課題を伴いながらも、全く新たな環境を創り出したダムという資源を、ダム上流地域がうまく活用して今後どのような地域づくりと集落機能の維持・保全を図っていくかが大きな課題となってくる。

5-2-1 集落機能の維持・保全につながる活動メニューの検討

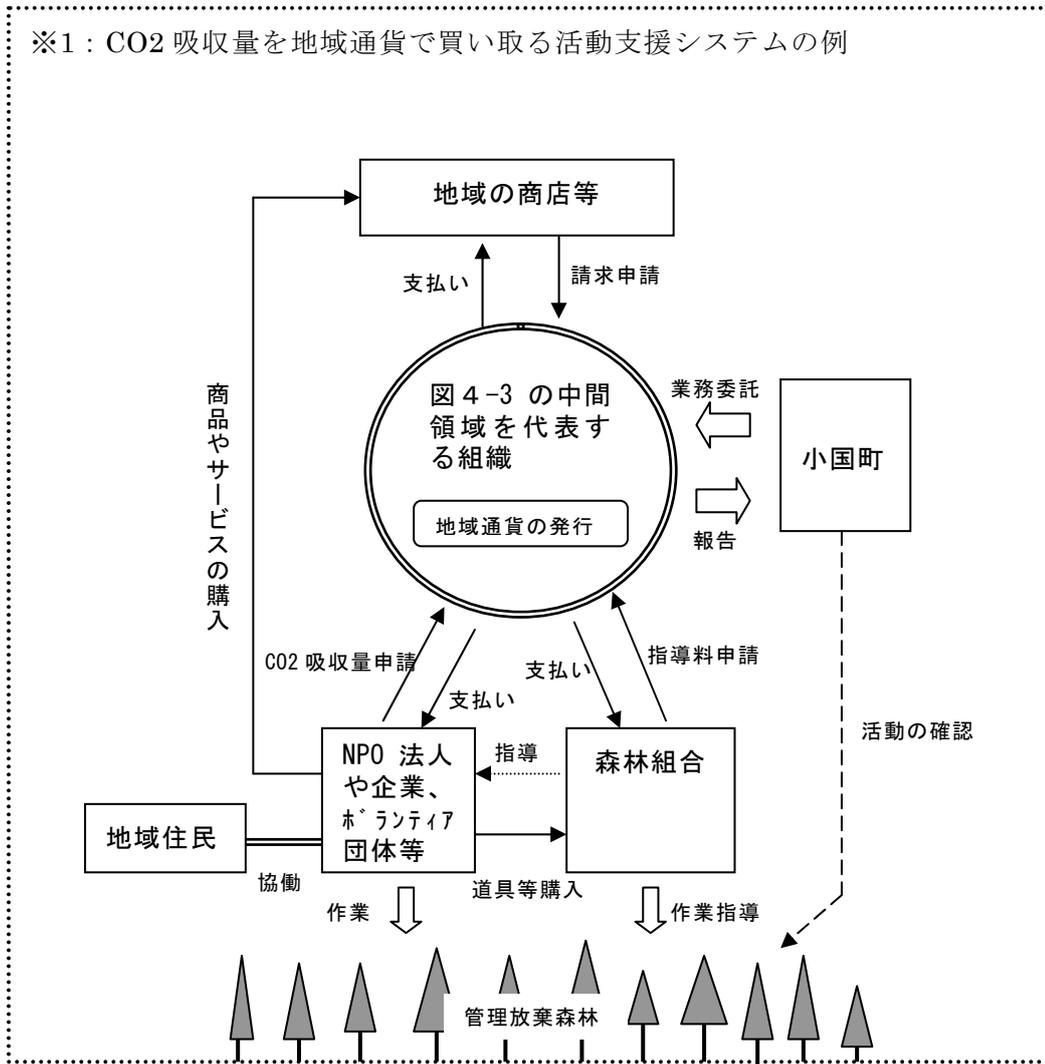
ダム水源地域ビジョンが、当該ゾーンのまちづくりで期待される機能のレベルアップに結びつくためのメニュー検討は5-1で行った。ここでは、ダム上流地域の集落機能の維持・保全について、ダム水源地域ビジョンによる活動が、それらの機能の改善につながるような展開メニューの検討を行う。

表 5-2 集落機能の維持・保全につながる活動メニューの検討

対象となる 集落機能	活動メニューの展開方向		関連する今後の行政 支援のあり方
	活動メニュー	展開方向	
国土管理機能	・耕作放棄地の活用	・新しい特産品づくりとして、耕作放棄地にヤマブドウやマタタビ、カシスの栽培を行うことによって、農山村景観の保全にも寄与する。	・転作奨励の有効活用の他、支援策を検討
	・里山の適正な管理	・管理が放棄された落葉広葉樹林を、NPO や企業等の活動フィールドとして活用できるシステムを構築していく。 ・発生する木質バイオマスは、きのこ栽培やエネルギー資源などとして利用し、資源の有効活用を図っていく。	・落葉広葉樹施業の支援策に関する情報の提供 ・森林施業計画の策定支援を行う。
	・管理放棄森林の手入れ	・管理放棄のスギ林の枝下ろしや除間伐、針広混交林への誘導などを、森の学校などの体験学習や、NPO や企業等の活動フィールドとして活用していく。 ・間伐材等の発生材は、できる限り収集して木工芸の体験学習や雪囲い、園路の補修、バイオマスエネルギーなどに活用していく。 ・企業と森林所有者が協定を結ぶことにより、企業は人工林の管理や植林作業（森林組合員などが指導）を支援する。 さらにエコツーリズムや森林セラピー的プログラムとの併用によって、社会貢献だけでなく福利厚生、社員研修、体験交流など多様な展開が可能である。	・NPO 等のボランティア活動に対しては、その活動内容に応じたCO2 吸収量を算定して、その評価額を地域通過として支払うような制度の創設を検討（※1） ・ダム湖周辺森林の将来ビジョンの策定や、森林整備計画の見直し

住環境保全機能	<ul style="list-style-type: none"> ・美しいの農山村風景や集落景観の保全 	<ul style="list-style-type: none"> ・周辺の自然景観と調和した田園景観や集落景観を保全・創造していくための具体的な活動として、桜回廊の取り組みや、景観保全に関する学習を「白い森の大学」などで取り組む。 ・ダム上流地域集落の景観保全活動を住民が全員参加で取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・景観計画や景観農業振興整備計画の策定、町森林整備計画との整合などによって、体系的に景観の保全を行っていく。
地域文化継承機能	<ul style="list-style-type: none"> ・地域固有の誇れる伝統文化の保全 	<ul style="list-style-type: none"> ・集落間や他地域と協力関係が構築できるテーマごとの連携を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の提供や仲介で支援
	<ul style="list-style-type: none"> ・自然との共生の知恵を学び、自然に対する作法を身につける 	<ul style="list-style-type: none"> ・絶好の学習空間として資源や人材を活かしたプログラムの展開を図っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人材育成のための研修会等を実施
教育・文化創造的機能	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な自然と地域の文化資源を活用した学習環境の創造 	<ul style="list-style-type: none"> ・「森の学校」や「白い森の大学」などを継続的に開催していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町の事業としての委託や、人材の活用を支援する
	<ul style="list-style-type: none"> ・その学習環境を活用して、多様な文化、多様な人々との交流を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内、地域間、都市と農村などの交流を通じて、その中から新たな白い森の国の文化を創造していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町の企画と連動しながら実績を積み上げる
地域産業創出機能	<ul style="list-style-type: none"> ・広域的な交流の進展に伴う、新たな地域産業の創出 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な取り組みを通して、広域的な交流人口が増加することにより、多様なニーズが発生してくる。その一つとして地域固有の特産品の開発がある。これらを将来的に新しい地域産業に育てていく取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新規起業化への支援措置
地域自治的機能	<ul style="list-style-type: none"> ・個と公の間領域の見直し 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人が担うべき責任と、公共が行うべきサービスの間にある、集落協働作業が衰退してきている。今後の取り組みの中で、この機能を見直して新しい集落機能の活性化につながる体制を再構築していく視点を重視する。 ・集落の住民一人ひとりが、地域が自律していくための公益活動に参加する新しいしくみをつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公共が行ってきた維持管理等の作業や集落で行ってきた作業を見直し、可能なものは地域に委託する
	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい合意形成と協働のしくみづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい活動への取り組みには、地域住民の合意形成が不可欠である。ビジョンへの取り組みを契機に、住民ワークショップや、枠を広げた目的ごとの集会の開催など、新しい手法を試みる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現在実施されており、経過を見て手法の改善などを検討

※1：CO2 吸収量を地域通貨で買い取る活動支援システムの例



5-3 他の拠点エリアとの連携

全ての活動が、当該地域のみで対応できるものではなく、当然他の拠点エリアとの連携や協働が必要となる。特に、ダム水源地ビジョンへの取り組みは、まちづくり全体から見て、相乗効果が期待されるため、ここでは他の拠点エリアとの連携の可能性についてまちづくりの視点から、主な項目を選んで検討する。

5-3-1 ぶな文化の継承

ぶな文化の継承と創造的発展は、小国町が掲げるまちづくりの理念であり、その中心をなす「共生と循環の思想」は、これからの人類が生き続けるための重要なキーワードとなっている。したがって、本町の五つの拠点の一つである横川ダムを中心とする「湖畔の森ふれあいゾーン」の形成においても「ぶな文化の継承」は、町全体に共通するテーマとして、他の拠点エリアとの連携が不可欠となる。

そのテーマが目指すものは、ぶな文化の有する自然観・世界観を未来文明の基礎として、生き生きと学ぶことができる環境を創造することであり、その結果として本町で暮らしたいと思う多様な人々も快く受け入れながら活力ある森林理想郷を構築していくことである。したがって本町のまちづくりは、五つのゾーン全てに、この基本的な方針が貫かれている。

具体的な連携としては、ぶな文化の中でも、各ゾーンに共通するものと、それぞれのゾーンによって異なるものがあり、例えばマタギによる狩猟が特徴だった地域、魚を中心に捕っていた地域、木地師が多かった地域、炭焼きが盛んだった地域など、それぞれ異なる特徴を活かしながら、全体として連携していくことが必要となる。

また、現在残るブナ林の特徴も規模も均一ではなく、各ゾーンに分布するブナ林の特徴を活かしながら他のゾーンと連携することで、多様なブナ林の体験が可能となる。

5-3-2 森林セラピー基地の機能補填

森林セラピー基地は、飯豊山麓交流ゾーンにある温身平が登録地である。温身平は原生のブナ林があり、平坦地が多く、山歩きというより散歩気分でゆったり歩くことができる。

しかし、もしここに、森林セラピーを期待して多くの人を訪れた場合、せっかく自然の中にどっぷり浸れることを期待してきた人をがっかりさせることになる。当然、適正な入山者数をコントロールすることが必要であるが、温身平は飯豊山への登山基地の一つでもあり、設定されたルートだけでは容量的に十分な受け入れは難しい。

幸い本町には、他にもセラピーに相応しい自然は豊富にあり、その中から、補助的地域を定めて、全体のネットワークの中で対応することが可能である。

特に、ダム湖周辺のエリアでは、温身平にはない広々とした水辺空間と身近な里山、美しい農村風景などがある。一方、朝日山麓には傾斜はかなりきつい、広大なブナの原生林が味わえる。健康の森横根では、手入れされた美しいブナの二次林

を散策できる。これら環境の異なる地域が連携して森林セラピー基地機能を補填し合えば、参加希望者が増加した場合の受け入れ容量が増えるだけでなく、多様な森林環境を体験することも可能になり、町全体の地域活性化への影響も大きいと考えられる。

5-3-3 食文化の継承と商品化

ぶな文化の中に含まれる本町の食文化も地域によって異なる場合が多く、それぞれの地域で特徴的なものを商品化したい。これはまさに上杉鷹山がこの地域に奨励した地域活性化のための一村一品運動である。そのときの奨励品や現在既に販売されているものも含めて、各地域で昔からの食の特徴を研究し、その素材をベースに現代に合う商品開発を行うことである。

この地域の食材は、山野の自然の恵みや雑穀を素材としたものが多く、現代人が好む健康食そのものである。

したがって、各ゾーンが一つの名物をつくり、五つのゾーンの商品を5種類集めると一つのパッケージになるような工夫を行うなど、各地区が協力・連携して「白い森おぐにブランド」を商品化する。

具体的には、ゼンマイ、ワラビ、コゴミなどの山菜やきのこと類、クルミ、クリ、トチノ実など縄文時代から食されていた木の実、イワナやカジカなどの溪流魚などを材料とした食品、五穀や山菜を活かした薬膳料理、マタタビの薬用酒など、小国らしい食材を健康志向に対応した商品として開発していく。

5-3-4 人材の連携

各ゾーンで中心的に活動するのは当然その地域住民であるが、多様な活動を全て住民の力だけで実行することは不可能である。本町には、多様な自然資源に負けない多様な人材が存在し、自然との共生の技や知恵を継承してきている。しかし、この中の多くの人たちは高齢化し、次代への技や知恵の継承を図らなければ途絶えてしまいかねない状況にある。これは地域の問題だけでなく、ぶな文化の継承を標榜する町としては重要な課題である。したがってまず各地域における人材の洗い出しを、それぞれの地域で行い、継承のために必要な地域間の連携や協力体制を構築していくことが必要となる。

横川ダム水源地ビジョンの中で開始された「白い森の大学」などでも同様な活動が試行的に行われているため、一つはこの活動を通じて継承を図っていくことが考えられる。

本町の人材は、ぶな文化の継承という部分だけでなく、観光案内やネイチャーガイド、歴史・民俗研究家、有機農業家、登山家など多様であり、これらの人たちの活動情報をネットワークすることがまず必要である。

5-4 まちづくりを横軸で支えていく活動メニューの構築

本町のまちづくり戦略として推進している「白い森構想」の概念を、図 4-1 に示した。この戦略の柱である「白い森の国ふるさと文化村づくり」には縦軸となる 5 本の柱と、それらを横軸でつなぐ 3 つの主要な施策（「森の学校」の機能づくり、「森の仕事場」の創出と活性化機能づくり、「森の住宅」環境づくり）があり、縦軸の一つが当地区「湖畔の森ふれあいゾーン」である。

本町のまちづくりの考え方は、この柱を築き上げる作業とともに、この柱を横に紡いで補強していく 3 つの施策展開を図っていくことである。

したがって、ダム水源地域ビジョンで取り組む活動は、全て上記のまちづくり戦略に結びつくような展開が期待される。

そこで、以下にこの 3 つの主要な施策に収斂していく活動メニューの構築について提案を行う。

5-4-1 「森の学校」の機能づくり

本町では、まちづくりを推進する 3 つの主要施策の一つとして、活力ある人生を構築していくための戦略として「森の学校」の機能づくりを挙げている。

これまでも具体的に、「雪の学校」や「山菜の学校」などの体験交流が実施されてきた実績がある。本水源地域ビジョンでは「白い森の大学」として、それらを受け継ぎながら、ダム及びダム湖周辺の自然や歴史等を学ぶことを支援する活動が試行されている。

本町が目指す「森の学校」の機能の一つは、豊かな森や美しい農村風景を背景に、そこに住む住民（特に経験豊かな高齢者）が、個々人の巧みな力と技と知恵が詰まった場所をつくっていくことである。そしてその場所をつくっていく過程で住民自体が学ぶことによって生きがいをもち、その場所に来た来訪者がそれを学び、住民と交流が生れ、それによって住民が地域に誇りを持ち、しかも多少の経済効果につながり、お互いが助け合って生きていくことができる地域に育っていくことである。

つまり、ダム湖周辺地域が「森の学校」の場を提供するだけでなく、地域住民が「森の学校」にふさわしい場を創り上げ、その学校の指導者として活動していくことを前提としている。この活動が「森の仕事場」の創出と活性化機能へとつながっていく。

二つ目は、「ぶな文化」の継承拠点としての役割である。これは町内 5 つのゾーンに共通な役割と言えるが、特に交流機能が大きく情報発信機能の高い当地区において、小国町の存在証明ともいえる「ぶな文化」を継承するための学習機能を充実させることである。

三つ目は、森の恵みを最大限に活かす戦略として「森の学校」を活用することである。それは、林産物の生産加工であったり、木工製品であったり、うまい米や水であったり、エネルギー生産であったり、農山村での癒し体験を提供する農家民宿であったり様々な森の効用をメニュー化して提供することである。

5-4-2 「森の仕事場」の創出と活性化機能づくり

「森の仕事場」の創出は 5-2-1 の「森の学校」の機能づくりと連動するもので、「森の仕事場」づくりの側から言えば、「森の学校」を戦略的に利用して仕事場の創造を行っていくということになる。

現状における具体的な「森の仕事場」は、林業がそれほど盛んでない当地域では、観光わらび園やゼンマイ採りなどが主であるが、かつては山を仕事場とする木地師やマタギがいたし、織物用のアオソの採取や薪や柴の切り出しも行っていった。

これからの「森の仕事場」の創出は、昔の森と共生していた生活で培われた知恵を、将来の持続的社会的構築のために学び直すという意味も含め、一方で、森林セラピーやフォレストツーリズム・グリーンツーリズムといった新しい里山の活用や、雪の森を産業化に活かす雪室の活用など、この地域に相応しい「森の仕事場」の創出を図っていくことである。

その結果、森林が人を癒すだけの森林セラピーではなく、その地域の人の暮らしを含めた風土全体が、来訪者を暖かく包み込むことによって癒されるという世界を創造することができる。これが、まさに当地域の人々の親切さに心を打たれ、その行く先で見た米沢平野をアジアのアルカディアと言ったイザベラバードの心情であり、この地を訪れる来訪者に実感してもらおうことができる大きな財産となる。

5-4-3 「森の住宅」環境づくり

横川ダムの建設によって、自然災害から地域を守る安心・安全な住宅環境が生まれたことを受けて、次は美しく快適な住環境の整備を目指す。

上流地域では特に水源地域ということで、生活排水の浄化等、ダムの水質保全への配慮や、ダム湖周辺に多くの人々がきてくれるようになった場合に、訪れる人々に良い環境と感じてもらおうことが大切となる。

美しい街路や花壇、農村風景に似合った農家民宿のたたずまい、そしてそこに住む人々の思いが伝わる町並の美化などによって、背景の山並みや美しい里山、新しいダム湖を一層引き立てる風景を創造していくことを目指したい。

それによって、来訪者のあこがれの地となり、交流居住者や転入者の増加にもつながる桃源郷となる。